COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
2
戦闘員、派遣します!
暁なつめ
NATSUME AKATSUKI
ILLUSTRATION
カカオ・ランタン
KAKAO LANTHANUM
戦闘員、派遣します!
角川スニーカー文庫

モケモケモケ！
モケモケケケッ!!
「おい、こいつ……
ザリガニなのか？」
「あれはモケモケだ。
煮て食べると美味しいぞ」
スノウ
SNOW
スラムのみなしごの身から
近衛騎士団の隊長にまで
登り詰めた努力家。
ローンの支払いに苦しんでいるため、
最近はただの金の亡者。
SNOW'S VIEW
ちなみにこの森はカチワリ族の縄張りでもある。
鈍器で頭をかち割りに来る事から名付けられ…
戦闘員六号
SENTOUIN ROKUGOU
バスター対象①モケモケうるさいザリガニ

「呼び出しといてなんだけど、知らない人が出てきたんだけど……」
「おい、お前。随分と安っぽいホログラム使ってんな」
グリム
GRIMM
大司教だけどオカルト認定された人。
GRIMM'S VIEW
私が呼ぼうとしたのはアンデッド、
つまりゴーストよ!?
何なのあのガダルカンドみたいなの……？
バスター対象②誰かのパチモン…ゴースト？

バスター対象③メンバーらの湧いた頭
ROKUGOU'S VIEW
ロゼは置いといて、なぜこいつらは俺ではなく他の男に……
この敗北感、許せない。
「美味しいです！ 美味しいです!!」
「イケメンだからって乙女心を弄んだ罪は許されないわよ！」
「このスノウ、性格に難ありですが顔と体には自信があります」
「私の胸ばかりご覧になるのですね。中身も……見てほしいです」
ハイネ
HEINE
褐色おっぱい四天王の幹部。
魔王軍四天王幹部も兼務する。
今回も六号の餌食に。
ロゼ
ROSE
カー○ィみたく
コピー能力を持つキメラ。
モケモケを食べると
語尾がどうなるのか気になるところ。

「待たせたな、相棒。後は自分に任せとけ」
「くっ……!?」
ラッセル
RUSSELL
水のラッセルの異名をもつ実力者。
男の娘マニアが
狂喜乱舞しそうな体躯である。
バスター対象④敵人型ロボット

CONTENTS

COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!

口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン
口絵・本文デザイン／岩井美沙（バナナグローブスタジオ）

戦闘員、派遣します！2

暁 なつめ

角川スニーカー文庫

CONTENTS

プロローグ

「どうなってんですかねえアスタロト様！　聞いてた話と違うんじゃないんですかあああああああああ!?」
『そ、その件に関しては謝るわよ、悪かったわね六号。そうだわ、こっちで「この騒がしい世界に祝福を」の新刊が発売されたから転送してあげる！　あなた、これ好きだったでしょう？　今回のお詫びって事で！　ね!?』
　その日、俺はモニター越しの相手に思い切り食って掛かっていた。
　画面の相手はアスタロト。
　悪の組織である秘密結社キサラギの最高幹部の一人である。

ニバナ言ってんじゃねえぞ　俺の命は『このされ』の新刊一冊分ってか！　アリスから聞いたぞ、転送成功率が五割を切るガラクタなんかで送ってくれやがって、いつか地球に帰ったら覚えてろよ！　俺を送った張本人のリス様には泣くまで揉(も)んでやると伝えとけ！　アスタロト様はちょっとでも悪いと思っているのなら結婚(けっこん)して養ってください!!」

『う、うるさいわよ、あなたこそバカな事言っていないで少しはまともな報告をなさい！　なんなのこの報告書は、まだ地球に帰れないってどういう事よ！』

逆ギレしたアスタロトがそう言って指し示したのは俺が送った最近の報告書だった。

「帰れない理由はちゃんと説明したじゃないですか。支部長に任命された以上、俺のかわいい部下達を放(ほう)り出して逃(に)げ帰る事は出来ない、って……」

『あなたがいる国は、戦争のせいで男が少ないらしいわね。しかもそっちで出

来た部下は美女や美少女が多いとかなんとか、そんな報告がアリスから……』
「そして！　キサラギの看板背負ってこの星に派遣されたエリート戦闘員の俺が、魔王軍なんて時代錯誤な連中に舐められるわけにはいかんのですよ！　俺が負ける、それすなわちキサラギが負けるって言っても過言じゃない！　でしょう!?」
　画面の向こうのアスタロトが、困り顔で小首を傾げる。
『そ、そうかなぁ……。派遣する戦闘員にあなたを選んだのは、エリートだからとか強いからという理由じゃなく、どんな環境や戦況でも生き残ってきたしぶとさから選ばれたんだけど……』
「地味に傷付くから本当の理由を言うのはやめてください。それよりも援軍ですよ援軍！　魔王軍の連中が魔法って不思議技を使うんですけど、こ

れが意外と強烈なんですよ。戦闘員を百人とは言いませんから、せめて怪人をあと二人ほど送ってくださいよ」

現在こちらに送られている戦闘員は俺を含めてわずか十人。

怪人と呼ばれる強力な戦力に関してはたったの一人のみだ。

『それが、こっちとしても増援を送ってあげたいのは山々なんだけど……。世界征服を目前にして、ヒーロー達が大規模な反抗作戦を行ってるのよ。今もベリアルとリリスが最前線で戦っているけど、状況は良くないわ。本当はあなたにも帰ってきて欲しいのだけれど……』

そう言って、アスタロトが何かを期待する目でこちらをチラチラと……。

「俺みたいな旧式の改造手術しか施されてない古参兵なんて、帰還しても役に立たないですよ。こっちの方は任せてください。アスタロト様のご活躍を期待してますから」

『あなたさっきはエリート戦闘員って……』

冗談ではない、ウチの最高幹部であるベリアルやリリスが出張ってもまだ危うい戦場になんて、絶対に行きたくない。

『まあ、そういう事ならそっちはあなたに任せるわ。現状ではこれ以上の支援は出来ないから、どうにか頑張ってちょうだい』

マジかよ。

「せめて最新の装備をもっと回してくれませんかね、人が無理なら物資で支援を……」

『……アリスとあなたの報告で侵略地の現状は分かりました。それでは、今後はスパイではなく侵略活動に重点を置きなさい』

俺の言葉を聞き流し、アスタロトは淡々と告げてくる。

「おいふざけんなよ　キサラギの完全バックアップ体制はどうなったんだよ！　バカにしやがって、俺はここにいながらでもあんたを涙目（なみだめ）にする事だって出来るんだぞ！」

『こっちもギリギリなんだから仕方ないでしょう。二人きりだからって口の利（き）き方がなっていないわよ。涙目に出来るものならやってご覧なさいな』

　こちらをからかうかのような笑（え）みを浮（う）かべ、アスタロトが鼻で嗤（わら）う。

「よし、そこまで言うならやってやんよ！　俺が今何て呼ばれているか教えてやる。チャックマンなんてバカな名前付けられてんだよ！　これでも拝めやクラァ！」

『そ、それでは戦闘員六号！　次の指令は侵略地の拡大だが、手段は問わない！　現地での基盤（きばん）をさらに安定させ、侵略の足掛（あしが）かりとせよ！　貴様の活躍には期待して……、わ、私が悪かったからそれをしまって！』

一章

ペテン師系婚活女子

1

惑星(わくせい)間転送装置とかいう怪(あや)しげな名前が付いた機械で、下っ端(ぱ)戦闘員である俺がこの星に派遣されて二月(ふたつき)余りが経(た)つ。

戦闘員派遣の目的はこの惑星の調査と侵略のための下地作りだ。

この星に巣くっていた悪の組織、呼称(こしょう)『魔王軍』と交戦し、一時的な停戦協定を結んだのが一月(ひとつき)前。

そして現在、一時的な停戦協定も期限を迎え日夜魔王軍との小競り合いはあるものの、今のところ大規模な侵攻は行われていない。

それもひとえに、秘密結社キサラギから派遣されてきた、俺の同僚たる戦闘員達を警戒しての事だろう。

現在この国に派遣されているキサラギの関係者は、俺を含めて十人のみ。

まずはこの俺、戦闘員六号さん。

そして……。

「久しぶりだな六号よお。長く続いた俺達の戦いに、今日こそ決着付けるにゃん」

俺の前で西洋風の剣を片手に、渋い声で重々しく告げてくるのは虎顔の大男。

「望むところっスよトラ男さん。愛する部下の形見であるこの魔剣、なんとかザッパーがある限り、俺が負ける事はありませんから……」

そう、キサラギから派遣されてきた幹部の一人、怪人（かいじん）トラ男だ。

「スノウのその剣はいつから形見になったのかにゃあ。というか、おめえだけ魔剣使うとかズリいにゃん」

「トラ男さんは俺達戦闘員より強い怪人じゃないっスか、このぐらいのハンデはくださいよ。ていうかなんなんスかさっきから、語尾（ごび）のにゃんにゃんがウザいんですけど」

トラ男は秘密結社キサラギの中堅（ちゅうけん）幹部の一人。

今日はなぜか語尾が変だが、怪人の中でも古強者（ふるつわもの）にして頼（たよ）れる人だ。

「語尾に『にゃん』を付けるとモテるって聞いたにゃあ。前はガルルって付けてたんだがよ、ちっともモテねえからにゃんにしたにゃん」

「語尾変えるだけでモテるってマジっスか、俺もにゃんを付けていいっスか」

異国の地で再会した俺達は、互いの腕がどれだけ成長したのかを確かめるため、グレイス王国の訓練場を占領し、こうして対峙していた。
「にゃんは俺の商標登録でもねえし好きにするにゃん。それじゃあ……。行くぞ六号、どれだけ強くなったのか見てやるにゃん！」
「望むところっスよトラ男にゃん！　俺達戦闘員が、いつまでも怪人より弱いとは思わない事にゃん！　おらあああああ！」
　俺達は叫ぶと同時に剣を振り上げ、それを打ち合わせながら交差した……！
　激しい金属音と共に何かがひゅんひゅんと宙を舞う。
「……やっべえ、どうすんスかトラ男さん、スノウから勝手に借りてきた魔剣が折れちゃったんですけど」
「お、俺は知らねえぞ、そんなもん持ち出すからにゃん。せっかく西洋風ファ

ンタジー世界に来たんだから騎士ごっこしようなんて言い出した六号が悪いんだぞ」

宙を舞ったのは真っ二つになったスノウの愛剣。

へし折れた剣先が地に刺さるのを目で追いながら、俺とトラ男は顔を見合わせ。

やがて、先ほどから訓練場の片隅で俺達の勝負を見守っていた相棒へと、助けを求めた。

「おいアリス！　高性能なお前なら救済策の一つも思い付くだろ⁉」

「助けてくれよアリスにゃん！　何かねえのかアリスにゃん！」

地面に体育座りをしながら俺達を興味深げに観察していたのは、キサラギの誇る美少女型高性能アンドロイド、キサラギ＝アリス。

「しょうがねえな、アリスにゃんがアホなお前らに知恵を授けてやろうじゃ

ないか？　金属用ボンドでわざと折れやすいようにくっつけて、そのまま知らんぷりして返しとけ。そのうち戦闘で折れるだろうからその時に『なまくらを買わされたんだろう、俺達が商人を叱ってやる』とか言って慰めてやれ」

「それだ」

日頃から高性能を自称するアリスの言葉に、俺とトラ男の言葉がハモる。

俺達は早速折れた魔剣を直そうと、互いに剣の柄と剣先を手に取り、それをくっ付けようと……。

「――六号、どこだああああああ！　今日という今日は許さぬ！　早く出てこい、くびり殺してやる！」

訓練場の入り口から聞き慣れた声が響いてくる。
　俺がとっさに折れた剣を背中に隠すと、もう片方を持っていたトラ男はソレを驚異的な握力で握り潰し、そのまま遠くに投げ捨てた。
　……やっちゃったよこの人、もう修理も出来ねえじゃん。
　姿を現したのはこの国の近衛騎士団隊長、スノウ。
　黙っていれば美人なのだが、銀髪を振り乱し目を血走らせた今は酷い顔だ。
「私の愛剣をどこにやった！　五年ローンで買った我が愛剣、フレイムザッパーを返せ！」
　こちらに詰め寄るスノウに向けて、俺は冷静に否定する。
「あの魔剣なら旅に出たぞ。なんか唐突に自我に目覚めたみたいでな。今の

お前じゃ力不足だから真のご主人様を捜(さが)しに行くってよ」
「ふざけるな、魔剣が勝手に歩いてたまるか！　それに毎日磨(みが)いて小まめに手入れしてやっていたのだぞ、万が一自我に目覚めたのなら私が主(あるじ)として認められないはずが……、おい待て、貴様背中に何を隠している」
　ツカツカとこちらに歩み寄っていたスノウが、そのままピタリと動きを止める。
　俺は魔剣を差し出すと、
「実は旅に出た魔剣がついさっき戻(もど)ってきてな。魔王(まおう)と激闘(げきとう)の末紙一重(かみひとえ)で負けたらしい。最後はお前の名前を呟(つぶや)いて、満足そうにただの剣に戻っていったよ」
「あああああああああああ！」
　それを見たスノウが膝(ひざ)から崩(くず)れた。

こぼ

そっと柄を握らせてやると、スノウはそれを見ながらホロホロと涙を溢し始める。

「……おい六号、これはちょっと見てられねえにゃん」

「トラ男さんにも責任はあるんですから、どうにかしてやってくださいよ。あんたが片っぽ握り潰しちゃったからもう修理も出来ねえっスよ」

トラ男はしょうがないにゃあと呟きながら、小さなメモに何かを書くと、腕に着けた端末をいじる。

それは俺やアリスも身に着けている、地球のキサラギ本部へメモを送るための転送装置だ。

悪の組織の戦闘員たる俺達は、悪行ポイントという物と引き換えにこれを使い、装備を送って貰うのだ。

[illegible]トラ男の目の前に、一振りの剣が現れた。

やがてトラ男の目の前に一振りの剣が現れた

いや、それは……。

「フレイムザッパー……。寝る前には必ず磨いてあげたフレイムザッパ……。買った日は嬉しさのあまり朝まで眠れなかったフレイムザッパー……。寒い冬の日は毎日抱いて寝たフレイム……？」

泣きながらブツブツと呟いていたスノウがふと顔を上げた。

その視線の先は、トラ男が黒塗りの鞘から抜いた刃物に向けられている。

「ッ……！　な、なんという業物……！　ト、トラ男殿、そのとてつもなく美しい剣は、一体どこから……!?」

トラ男が取り寄せたのは日本刀だった。

名剣マニアは一目でその価値に気付いたのか、魅入られたかのように目が釘付けにされている。

トラ男は刀身を鞘に納めると、ああ　と残念そうに呟くスノウに向け

て。
「愛剣の代わりにこいつをやるにゃん」
「トラ男さまああああああああ！」
　日本刀を抱き締(し)めたスノウが別の意味で涙を流した。
　と、ハッと何かに気付いたスノウは、目の端(はし)に涙(なみだ)を溜(た)めたままトラ男へにじり寄る。
「トラ男様……。これほどの物を無造作に渡(わた)すという事は、もしや他(ほか)にも業物をお持ちで？」
「俺も男だからな。武器は嫌(きら)いじゃねえから一応それなりに色々と……。こ、こらっ、放すにゃん！　腹の毛皮を撫(な)でるんじゃねえにゃん！」
　コイツ、なんて分かりやすい女なんだ。

他にも刀を保有している事を匂わすトラ男に、スノウが媚びた笑みですり寄っている。
「へ、へへへ……。実は最初に出会った時から、トラ男様は只者ではないなと思っていたのです。このスノウ、人を見る目はありますので！」
「てめえ初めて俺に会った時は魔物めとか叫んで斬りかかってきたにゃん。気持ち悪いからトラ男様って呼ぶのはやめろにゃん」
モテるために語尾を変えるほどなのに、なぜか嫌がるトラ男。
「良かったじゃないっスかトラ男さん、早速モテモテじゃないですか」
「俺は小さい子が好きだからこの何かとデケエのは範囲外にゃん」
さすがは幹部にして怪人だ、トラ男さんはとんでもねえぜ。

――と、その時、城内に甲高い鐘の音が鳴り響いた。

トラ男の発言にドン引きしていたスノウは、それを聞いた途端（とたん）に表情を引き締める。

「敵襲（てきしゅう）か！　おい六号、出撃（しゅつげき）するぞ！　手柄（てがら）を立てる好機だ！　……へへ、へへへへ。トラ男殿に頂いた、この剣の切れ味を試（ため）してやる！」

「ククク……　[illegible]……」

抜き放った日本刀の刃(やいば)をウットリとした表情で眺(なが)めながら、スノウが物騒(ぶっそう)な事を口走った。

2

遠い星の空の下に、火薬が炸裂(さくれつ)する音が響き渡った。

俺が手にしたアサルトライフルが火を噴(ふ)く度(たび)に、そこかしこに魔物達が倒(たお)れ伏(ふ)す。

「オラオラ、秘密結社キサラギ社員、戦闘員六号様だ！　この雑魚(ざこ)どもが、冥土(めいど)の土産(みやげ)に俺の名前を覚えとけ！」

「隊長！　いつも思うんですが、そのセリフやめませんか!?　あたし達の方が悪人っぽいんですが！」

敵を蹂躙しながら笑う俺に、近寄る魔物を蹴り飛ばしながら、人造キメラのロゼが戸惑いの声を上げていた。
「バカ野郎、戦争に悪人もクソもあるかよ、勝った方が正しいんだよ！　正義は必ず勝つって言うだろ、つまり勝った方こそ正義なんだよ！　日頃俺がどんなに悪い事をしていようとも、勝ちさえすれば正義の味方ってわけよ」
「あたしバカだけどそれが違う事だけは分かります！」
　怪人トラ男率いる俺以外の戦闘員達は、別の方面から侵攻してきた魔王軍を迎撃に向かっている。
　俺が率いる小隊が任されたのは、敵の中でも精鋭と思われる中隊一つ。
　本来であればたった五人の小隊で相手取るなんて無茶もいいとこだが、

そこはキサラギでも最古参のエリート戦闘員だと、もっぱら俺の中で評判の六号さんだ。

現代科学の申し子である俺とアリスは、銃火器という物を持たない魔王軍を相手に、武器の力で圧倒していた。

銃を乱射しながら高笑いを上げる俺にロゼが引いていると、そこに満足そうな顔をしたスノウがやってくる。

「おい六号、敵の数が多いぞ、その妙な武器で一掃してくれ！　私はもう十分に試し斬りを済ませたから満足だ！　後でこの剣の切れ味について語ってやろう、それはもうズパズパと……」

「そんなグロい話は聞きたくねえよ！　まあ待ってろ、魔王軍なんざ蹴散ら

してやんよ、ヒャハハハハハハ　次に死にたいヤツはどいつだ？　さあ出てきやが……」

　ガチンという音とともに、アサルトライフルの連射が止まる。

「あれっ。あっあっ、ジャムったからちょっとタンマ……！」

　弾詰まりを起こしたライフルを叩く俺に、スノウが表情を引き攣らせた。

「お、おい六号、囲まれているぞ！　はは、早くしろ！　急げ！」

「バカッ、急かすなよ！　手元を揺らすな、遅くなる！　グリムは⁉　こういう時のためのグリムだろ！」

　ゼナリスとかいう邪神を崇める大司教、グリム。

　邪神崇拝者特有の夜型の生活スタイルなため昼はあまり働かないが、こういった大量の敵を相手取る際には役に立つ。

「敵の足止めなら、アイツが一番……」

弾を排出しながら振り向くと、グリムは車椅子の上でよだれを垂らして眠っていた。

「戦闘が始まって早々に寝ましたよ」

「寝ている間にその役立たずを捨ててこい！」

ロゼに向かって怒鳴る俺にトカゲ型の魔物が飛び掛かる。

が、ソイツが飛んだと思った瞬間、横合いから放たれた散弾を食らい、弱い悲鳴を上げて動かなくなった。

「助かったぜアリス、お前はたまにできる子だ！」

「高性能美少女アリスにゃんだからな。それより前見ろ、次が来るぞ」

アリスの言葉を待っていたように目の前には魔物の群れが迫り来る。

戦闘前に用意していたメモをキサラギ本部に転送すると、アサルトライフルを掃射する。

魔物達が怯(ひる)んだその隙(すき)に、本部から送られてきた物を掴(つか)んで放(ほう)り投げた。
「ビビらせやがって雑魚どもが！　科学の力を思い知れ！」
魔物の群れのド真ん中に投げ込まれた高性能爆弾(ばくだん)は、俺達が伏(ふ)せると同時、魔物の群れを薙(な)ぎ払(はら)った――！

３

街に帰った俺達を待っていたのは民衆による歓声(かんせい)だった。
「よくやったぞ黒い人！」
「黒い人素敵(すてき)！　カッコイイわよ！」
「スノウ隊長、お帰りなさいませ！」

「チャックマーン！　チャックをチーってしてみろよー！」
黒い人というのはキサラギ製の戦闘服を着たカッコイイ俺の事だ。
連日の戦勝に、ここ最近の俺達はこんな感じでチヤホヤされて……。
「クッソガキがあああああ！　てめー今日こそは許さねえ！　ケツにコーラとメントス突っ込んでやる!!」
「うあああああああー！　大人のクセに大人げねえぞチャックマン、誰か！　誰かー！」
俺の事をチャックマンと呼んだクソガキを追いかけていると、出迎えに来た兵士が慌てて止める。
「戦闘員六号様、ご立腹のところもうしわけありませんが、ティリス様から伝言を預かっております。戦いの疲れを癒やしたら登城して欲しいとの事。あの子は叱っておきますので、どうか今日のところは　六号様。ろ、六号

[illegible]様っ！　子供にそのような無体はいけませんよ！」
——この惑星において、すっかり行きつけとなった場末の酒場。
「それじゃあ、本日の輝かしい勝利を祝して、乾杯！」
「「「乾杯！」」」
今日の戦闘を終えた俺達は、貰いたての給金で早速飲みにくり出していた。
「……っかああああああ！　仕事の後の一杯がたまんねえな！　おい、今日は奢りだ、ジャンジャン飲めよ！」
「おい六号。人に奢る前に、まずは自分が貸してやった金を返せよ」
飲み食いが出来ないくせに珍しく酒場に付いてきたアリスが、早速無粋なツッコミを入れる。

「隊長、ありがとうございます！　あたし、ご飯奢ってくれる時の隊長だけは大好きです！　尊敬もします！」

「本当よね、こういう太っ腹なところは嫌いじゃないわよ！　でもお金の使い方が荒いから伴侶としては減点ね！」

「ハッハッ、そんなに褒めるなよ、給料日にはまた奢ってやるからな！」

「お、お前には、今の二人の言葉が褒め言葉に聞こえるのか……」

チビチビと酒を舐めながら、スノウが呆れたように呟く中。

「しかし、飯を食わないアリスが店まで付いてくるなんて珍しいな。リリス様に食事機能でも付けてもらったのか？」

「お前、スノウにスパイやってた事がバレてから、いよいよ自分達の素性も隠さなくなったなあ。まあアホなお前じゃどうせボロが出ただろうから止めはしないが……」

現在、この国での俺の立ち位置は妙な感じになっている。
外部からの傭兵でこの国の小隊を任される隊長で、秘密結社キサラギとのパイプ役だ。
そして、なぜか俺の隊には近衛騎士団の隊長に返り咲いたはずのスノウも交ざっていた。
本人いわく、お目付役として配属されたのだとドヤ顔を見せているが、俺には体のいい厄介払いとしか思えない。
俺とアリスが他の惑星からやって来た事は、この連中には既に話してある。
最初説明した時はバカを見る目で見られたものだが、今では異世界からやって来た魔法使いだと勝手に納得しているらしい。
「店まで付いて来たのは惑星調査の一環だよ。現地人が当たり前に食べてい

る物も、地球人にとっては毒物の可能性もあるからな。お前、目の前にある皿に一体何の肉が使われてるのか知ってるのか？」

　アリスの言葉にふと気づき、俺はマジマジと皿を見つめ……。

「おっさーん！　俺がいつも頼んでる、日替わり肉って何が使われてんの？」

「なんだ、そんな事も知らないで食ってたのかい。今日の肉はオークだよ。魔王軍との小競り合いでオーク肉が安いんだ」

　店主の言葉を聞いた俺は皿を除けた。

「隊長、どうしたんですか？　食べないのならあたしが貰っちゃいますよ？」

「お前、バッタ食うのは嫌がったのにオークに抵抗はないんだな。オークってアレだろ？　俺達がしょっちゅう戦う、人の言葉を話す二足歩行の豚だろ？」

　ナイバレで大概の物は食ってきたが、さすがに言葉を喋る知的生命体

サバイバルで大概の物は食べてきたが、さすがに言葉を喋る知的生命体を口にするのは抵抗がある。

アリスが興味深げに皿の中身をつついて調べる中、スノウがフッと鼻で嗤った。

「普段は随分と強気なくせに、食に関しては繊細なのだな。この国は荒野が多いため水が足りず、野菜が稀少だ。だが、肉ならそこら中に歩いているからな。ここでは好き嫌いをしていては命に関わるぞ。ほら、スポポッチとポイズンスポイラーをよそってやる」

「やめろ、妙なもん食わそうとすんな！　二つ目のは名前的にもヤバそうだぞ！」

スノウが押しつけてくる皿を押し返していると、ふとアリスが口を開いた。

「おいお前達、明日は休みだろ？　報酬を出すから、暇なら仕事を手伝って

くれないか？」
「俺は別に構わんが、この六号さんを雇（やと）おうってんなら報酬は高く付くぞ？」
「……これは本来、お前もやらなきゃいけない仕事なんだがなあ」
　呆れたように言うアリスに、ロゼがもうしわけなさそうに。
「ごめんなさい、明日は大事な用があるから空けておけとグリムに言われてて……」
「ええ、明日は月に一度のゼナリス集会があるの。なんなら皆（みんな）も見に来る？　集会といっても私とロゼの二人しかいないけど」
「何それ、ちょっとだけ見てみたい」
　俺が少しだけ興味を示すと、ロゼが初耳だとばかりに顔を上げる。
「あたしそんなの聞いてないよ!?　とってもも楽しくてありがたいお話が聞け

る、お茶会みたいなもんだって聞いてたのに！」
「ゼナリス様のお話はとっても楽しくてありがたいわよ！　ちゃんとお茶も出してあげるから、いいから来なさい！　既に対価の食事は奢ってあげたんだし、今更取り消しは利かないわよ⁉　それに、あなたは数少ないゼナリス教徒の一人なんだから」
「入信した覚えもないよ⁉　隊長にも変な組織のバッジを押し付けられたし、みんなしてあたしを変な事に巻き込まないで！」
ギャイギャイと騒ぐロゼを尻目に、スノウが表情を輝かせた。
「報酬は幾らだ？　愛剣のローンのためにもぜひやろう！　で、一体何をすればいい⁉」
グイグイと顔を寄せられたアリスは迷惑そうにその顔を押しのけると。

「仕事内容はコレの調査だ」
　そう言って、スノウの皿を指さしてきた。

4

　この惑星の自然環境は非常に過酷だ。
　大陸の多くを赤茶けた荒れ地が覆い、緑が深い森には危険な生態系が形成されていると聞く。
　俺とスノウは、そんな危険な森の中で……。
（見ろ六号、あれはモケモケだ！　煮て食べると美味しいぞ！　あそこに乱入して捕まえてみてはどうだ！）
（何がモケモケだバカにしやがって、かわいい名前のくせに凶暴過ぎんだろ！　見つかったら俺達が食われるっ！）

ぞ！　見つかったら俺達が食われるわ！）
木々が生い茂る森の中、茂みに隠れた俺達は凶暴な巨大生物を観察していた。
一言で言えば物置小屋ほどの巨大なザリガニ。
それが同サイズの巨大蛇の腹を大きなハサミで捕まえていた。
（モケモケの肉は煮込むととても柔らかくなり、臭みもなく美味しく食べられる。名前の由来は主にモケモケと鳴く事から……）
（解説はどうだっていいよ、とばっちり食らわないように隠れてろ！）
そんな森の怪獣決戦をデジカメに収めていたアリスが尋ねる。
（しかし、この星の生物は本当に物理法則を無視しているな、甲殻類があのサイズにまで育つとかあり得んだろう。ちなみにどっちがモケモケなんだ？）
（ハサミを持っている方がモケモケだな、食われそうな方がスポポッチ。こっち

も美味(うま)いぞ）
（悠長(ゆうちょう)な事言ってないで見つからないうちにとっとと逃(に)げるぞ！）
　俺は半泣きになりながらのんきな二人に訴(うった)えかけた。
（おっ？　見ろ六号、スポポッチが反撃(はんげき)を始めた。この星の蛇は獲物(えもの)を締(し)め上げようともせず、尻尾(しっぽ)ビンタで攻撃(こうげき)するんだな、興味深い）
（あれはスポポッチがたまにしか見せない必殺技(ひっさつわざ)だな。アレを見られるだなんてついてるぞ）
（お前ら、いい加減その頭の悪そうな単語の連呼をやめろ！　アリス、ここはもういいだろ、他(ほか)に行こうぜ⁉）
　この星の生態系調査。
　それは確かにキサラギから命じられた任務なのだが、正直言ってもう帰りたい。

りたい

　半泣きで移動を開始した俺の後ろから、モケモケという勝ち誇った鳴き声が聞こえてきた——

「——スノウ、あの木にぶら下げられてるスポポッチは何だ？　この辺りの生き物が干し肉でも作ってるのか？」

「アリスが指さしているアレは、カチワリ族が縄張りを主張する行為だな」

「帰ろう！　アレはアカンやつだって！　お前らには危機感知センサーとか付いてないのかよ！　百舌の速贄そっくりじゃねーか！」

　モケモケから離れた俺達は、頭部を砕かれ木にぶら下げられたスポポッチという、衝撃的な物を見付けてしまった。

「カチワリ族は非常に好戦的で、縄張り意識が強く、この危険な森の中で平

然と生きていけるだけの強さを持つ蛮族だ。名前の由来は、獲物を見付け
ると鈍器で頭をかち割りに来る事から……」
「解説はいらねーって！　さっきから変な視線を感じるんだよ、縄張り意識
が強いなら早く離れよう！　大体お前、普段は真っ先に逃げようとするく
せに今日は一体どうしたんだよ！」
　スノウの背中を押しながら、俺はその場を離れようとする。
「私を見くびるなよ六号。普段の安月給ならともかく、アリスが約束してく
れた高額報酬のためなら完璧な案内をこなす。私は金の上での約束事には
誠実なのだ」
　この女、それ以外に関して不誠実なのは認めるのか。
　……と、その時だった。

硬い物で木の幹を叩くような、カンカンという音が鳴る。

その音の根はかなり近い。

というか、さっきから絡みつくような視線を感じる方向から……！

「規則正しい音の間隔から、仲間に信号を送ってるな」

「さすがだアリス。これはカチワリ族が獲物を見付けた際、仲間を呼び寄せる音で……」

二人が言い終わるより先に、俺はその場から逃げ出した――！

一体どれほど走ったのだろう。

ナントカ族は撒いたようだが、ふと気が付けば……。

「あいつら、迷子になりやがった……！」

てっきり付いてきているかと思ったら、二人の姿が見当たらない。

というか方角が全く分からないんだがどうしよう。
腕時計（うでどけい）に内蔵されている方位磁石も、そもそも惑星（わくせい）が違（ちが）うのだから役に立たない。
「はーつっかえ！　まったく、あいつらはどこほっつき歩いてんだか！　非常事態になってものんびりしていやがったし、見付けたら説教だな！」
　憤（いきどお）りに任せて愚痴（ぐち）を零（こぼ）すも、もちろん誰（だれ）も答えはしない。
　薄暗（うすぐら）い森の中、時折聞こえる獣（けもの）の奇声（きせい）を聞いていると、徐々（じょじょ）に不安になってくる。
「……まあ、あいつらを置いて逃げた俺もちょっぴりは悪いかもだし、説教は許してやるか。だから、どっか近くにいるのならそろそろ出てきてもいいんだからな。もうあんまり怒（おこ）ってないし。ていうか、あんな状況（じょうきょう）じゃ足が竦（すく）んで動けないとかもあるよな。咄嗟（とっさ）に逃げ出せた俺が優秀（ゆうしゅう）なんであって、別に怒

る事でもないよな、うん」
大きめの声で一人ごちるも辺りはシンと静まり返り、相変わらず聞こえるのは獣達の奇声だけ。
アリスと連絡を取ろうにも、電波塔が整備されていないこの星で、携帯を呼び出しても意味がない。
というか、アイツそもそも携帯とか持ってんのか。
無線機を転送してもらっても、受信側も都合良く無線を持っていてくれないと……。
「あっ、そうだ！」
今の状況を書いたメモ書きをキサラギ本部に送って、アリスに迎えに来てもらえばいいのだ。
賢いアイツなら俺の位置情報が分かればここまで来てくれるだろう。
安心した俺はホッと息を吐きながら、早速メモ紙を送ろうと――

「モケモケモケッ」

俺の背後から、特徴のある鳴き声が聞こえてきた。

恐る恐る振り向くと、いつの間にそこにいたのか、片方のハサミを失ったモケモケが……！

俺は相手を威嚇するように、両手を広げて奇声を上げた！

「モケモケモケモケ!!」

「モッ!?」

俺の突然の奇行にモケモケが驚き後ずさる。

口元から泡を吹きながらこちらを覗うモケモケに、俺もモケモケ鳴きながら、舐められないよう距離を詰め……！

たら、詰められないよう、距離を詰め……！

と、そのときだった。

「モケケ……」

まるで敵意はないとばかりに小さく鳴くと、そいつはハサミを下ろす。

俺の決死の鳴き声により、仲間と認めてくれたのだろうか？

思えばこの星にやって来て、俺はまだ何も知らない。

凶暴な見てくれのコイツにしても、実は優しい生き物なのかもしれない。

悪の組織の構成員としては甘い考えだが、暗い森で出会った友人だ。

こちらにそっとハサミを伸ばすモケモケに、俺はフッとはにかみながら……。

俺が握手をしようとしたモケモケが、突然頭から二つに割れる。

「これでも食らえええええええ！」

そんなスノウの声と共に、俺の友人は食材になった。

5

大森林の生態系調査を終えた帰り道。

街へと入った俺達は、疲れた様子のロゼとグリムに出くわした。

「あっ、隊長お帰りなさい！　森の調査はどうでしたか？　というか、聞いてくださいよ！　グリムが怪しげな儀式で、うっかりアンデッドが呼び出されて大変だったんムグッ!?」

「隊長お帰り！　なんだか元気がないみたいだけど何かあったの？　ほらロゼ、美味しい串焼きがたくさんあるわよ！　だから余計な事は言わないようにね！」

何か気になる事を言いかけたロゼが口に串焼きを突っ込まれている。

「大森林で六号が、モケモケに襲(おそ)われかけていたところを助けてやったのだが様子がおかしくてな。一人で迷子になった事も相まって色々ショックだったのかもしれん」

「いきなり俺の友人を殺しておいて何て言い草だ！　しかも俺の目の前で生醤油(きじょうゆ)かけて食いやがって、この冷血女が！」

　あのモケモケは、俺が襲われていると勘違(かんちが)いしたこの女に殺されおやつにされた。

「な、何なんだ貴様は、助けてやったのに礼も言えないのか！　大体獲(と)れたてのモケモケをその場で食って何が悪い、あの巨体を全(すべ)て持ち帰る事など出来ないではないか！　それにお前だって、あまりの美味さに泣きながら食べていただろう！」

「食ったけど！　そりゃあ俺も食ったけどさあああ！」

俺がアイツを食べたのはあくまでも供養のため
狩られたのなら仕方がないと、あいつの命を無駄にしないため、自分の血肉、糧として泣きながら食べたのだ。
「それより、ロゼが先ほど聞き捨てならん事を言ったな！　グリム、お前はまたアンデッドを呼び寄せたのか!!」
「なによ、だって私は不死と災いを司るゼナリス様の信徒だもの！　その教祖がしもべを呼んで何が悪いあああ痛ぁい！」
　グリムが逆ギレし開き直るも、スノウにこめかみを掴まれ締められる。
　と、その言葉にアリスがピクリと反応した。
「今アンデッドと言ったのか？　それは俗に言うゴーストやゾンビというやつか？」

か？」

何にでも興味を示すアンドロイドにグリムは小さく微笑むと。

「あら、アリスったらゼナリス様に興味が湧いたの？　そうよ、さっき私が呼び出したのはゴーストよ。元々私がゼナリス様に惹かれたのも、永遠の若さを与えてくれて憎いあんちくしょうに復讐出来る、素晴らしい教義のおかげなのよ。どう？　あなたも試しに入信してみない？」

「自分は無宗派だからノーサンキューだ。おい六号、オカルトの定番ゴーストときたぞ。科学の結晶たる自分に真っ向から喧嘩売る存在が現れやがった。何がゴーストだ、科学の力でバスターしてやる」

自分もアンドロイドなんていうオカルトじみた存在のくせに、アリスがそんな事を言い出した。

「ゴーストの何が気に入らないのか知らんがいつになく攻撃的だな。この星には魔法がある時点でオカルトなんて今更だろうに。お前だってハイネの炎の魔法とか見ただろ？」

「魔法とやらはまだいい。いや、良くはねえが、超能力の分野はキサラギですでに十分研究されている。炎のハイネの魔法なんて、典型的なパイロキネシスだな。つまり魔法はただのシックスセンスだ」

　噛んで含めるようにゆっくりと、俺にだけ聞こえるように説明してきた。

「もうちょっと分かりやすく頼む。パイ何とかだのシックス何とかってエロ用語？」

「……ハイネが使っていた炎の魔法は、地球で発火能力者と呼ばれる連中が使うのと同じだって言ってるんだよ。こいつはキサラギの改造手術で脳み

そをいじくれば誰でも使えるようになる。だが幽霊となれば話が変わる。自分は胡散臭いオカルトの存在は認めないぞ」

「お前も胡散臭い存在のくせに、なんで幽霊は認めてやらないんだよ」

と、その会話が聞こえていたのか、グリムが聞き捨てならないとばかりに口を挟んだ。

「ちょっとアリス、私のかわいいゴースト達にケチ付けるの？　ゼナリス様の力を疑うと罰が当たるわよ？」

「グリムが使う呪いとやらは強烈な自己暗示を併用した催眠術だな。ゼナリスなんてもんは嘘っぱちだ」

アリスは、自分の信じる邪神を嘘っぱち呼ばわりされたグリムにバシバシ叩かれながら、

「今日の生態系調査で魔獣についても調べているが、グリフォンが航空力学に反して飛ぶ原理、甲殻類のモケモケがどうやってあれだけデカい体を維持

できるのか。いろいろと興味は尽きないが、いずれ化けの皮を剝いでやろう」
「お前ファンタジー世界を真っ向から否定する気だな。グリムなんて一度死んで生き返ったんだけど……。それも頭が無い状態からだぞ？」

「トカゲだって尻尾が無くても生えてくるだろ。グリムがいつから普通の人間だと錯覚した？　そいつは人の皮を被った未確認生物かもしれん」
「うおおおおおおお！」
　人外扱いをされとうとうアリスの首を絞め始めたグリムだが、アリスがちっとも表情を変えない事に業を煮やしたのか……、
「いいわ、そこまで言うのなら私の降霊術を見せてあげる！　ゼナリス様を嘘っぱち呼ばわりされて引き下がれるもんですか！　でも、今日は魔力を使い果たしたから明日でいいわね!?」

「六号、聞いたか？　これがペテンの常套手段(じょうとうしゅだん)だ。その場では要望に応(こた)えられないから、後日準備を整えて、ってな。それまでに手品の種を仕込んでおくんだ」

「きいいいいいいっ！」

　大人げない二人をよそに、呆(あき)れたスノウが口を開いた。

「アリスは魔術否定論者だったのか？　そういった連中はごく稀(まれ)に見かけるが、ここまで筋金入りなのは初めてだな。というか、私の武器も魔剣(まけん)なのだが……」

「そう、その魔剣だ。中の動力を取り出してどういう原理か見てみたい。今度スノウの家に遊びに行かせろ。調査のために何本か分解を」

「絶対断る」

騒がしい三人をよそに、俺の下にやって来たロゼがくいくいと服を引っ張りながら。

「隊長、モケモケを狩ったと聞きましたがお土産は無いんですか？　余ったお肉、持ち帰ったりとかは……」

物欲しそうなロゼに、俺はふと尋ねてみた。

「……一応アリスが回収したけど、お前あの肉食って語尾にモケモケって付けないだろうな？」

「…………た、多分大丈夫……かと…………」

この世界の生物にはまだまだ謎が多い。

とりあえず、ロゼにモケ肉は食わせない。

大森林の生態系調査を行った、その翌日。
「さあアリス、今晩は私に付き合って貰うわよ！　ゼナリス様の存在を嘘っぱち呼ばわりした事、思い知らせてあげるから！」
「おう、オカルトの穴をついて泣くまで論破してやるからな」
非常に面倒臭い事になっていた。
「なあ、どうして俺まで付き合わされる事になったんだ？　検証でも何でも、お前ら二人でやればいいじゃん……」
「何言ってるのよ隊長！　これはゼナリス様に対する挑戦なのよ？　今後アリスみたいな子が現れないためにも、神の奇跡の見届け人が要るに決まってるじゃない！」

「そうだぞ六号、この手の奴に決定的な証拠を出さないと、後でいいわけにしてなかった事にするからな」
「…………。」
「言ってくれるじゃないの、この口の悪いチビっ子め！　あなた、死後は絶対地獄行きよ！」
「アンドロイドが地獄に落ちるって新しいな」
ちくしょう面倒くせえ、俺もロゼやスノウみたく逃げればよかった。
「さあ、行くわよ！　今宵は丁度良い事に満月よ。なら、より強い魔力を得るため、丘の上で降霊の儀式を行うわ」
「なるほど、その丘に昨夜のうちに種を仕込んでおいたんだな」
「きいいいいいい！」
んもう、早く帰って飲みに行きたい！

――街から少しだけ離れた、見晴らしのいい丘の上。
裸足のまま地に立つグリムが、魔法陣が描かれたシートを広げていた。
魔法陣の上に布が被せられて中身が見えないカゴを置くと、俺達を振り返り不敵に笑う。
「フフ、今夜は特別よ！　アリス、いつも澄まし顔のあんたを恐怖で震え上がらせてあげるわ！　普段であれば供物には食べ物を捧げるの。でも今夜は生け贄よ！　ご覧なさい、カゴの中にはお肉屋さんで貰ってきた、憐れで無力な生け贄が……！」
興奮気味のグリムがテンション高く叫びながら、カゴに掛かった布を取

り……！

「……可愛（かわい）いわね」

「ふわふわだな。おいグリム、まさかこのウサギを生け贄にすんのか？」

カゴに入っていたのは地球の物よりも耳が大きな一羽（わ）のウサギ。

肉屋に貰ってきたと言っていたが、中身の確認まではしていなかったらしい。

「キュー……」

カゴの中で手足を縛（しば）られたそのウサギは、俺とグリムを見上げて小さく鳴いた。

それを見たグリムは、ゴクリと唾（つば）を飲み込むと、手にしていた棍棒（こんぼう）をそっと置き……。

「……た、隊長、今夜はさらに特別よ！　今日一日だけ助手にしてあげるわ！　私が合図をしたら、この子をゼナリス様の下に送ってあげて……」
「俺だって嫌だよ！　邪神の大司教を名乗るならこのぐらい出来ないでどうすんだよ！」
今までに手を汚しはしたが、こんなくだらない事で可愛いウサギを手に掛けたくない。
「隊長の意気地なし！　俺は悪の組織の構成員だって意味わかんない事言ってるくせに！　あとゼナリス様は邪神じゃないわ！」
「う、うるせー！　キサラギをバカにすんな、悪の組織の構成員にも良心ぐらいはあるんだよ！　それにそこまで非情になれるなら、長年下っ端戦闘員なんてやってねーよ！」

貴なんてやってれ　。」

　と、俺達がウサギの押し付け合いを始めたその時だった。

「キュッ！」

　そんな小さな鳴き声と共に、ウサギがぐったりと動かなくなる。

　アリスの手には、それで仕留めたのであろうグリムが用意した棍棒が……。

「これでいいか？　よし、やって見せてくれ」

「お前に人の心はないのかよ！」

「そうよ、良心ってものはどこにいったの⁉」

　棍棒を肩(かた)に載(の)せたアリスに向けて、俺とグリムが非難を浴びせる。

「アンドロイドにんなもんねえよ。ほら、こいつで早くやってみせろ」

「あっ、やめて！　分かったわよ、やるから生け贄押し付けないで‼」

　アリスに無理矢理(むりやり)ウサギを押し付けられ、グリムは涙目(なみだめ)になりながらも

渡されたウサギをそっと置く。
　そして魔法陣の前にロウソクを立てると火を灯した。
「いい加減アリスみたいな子供に舐められっぱなしなのも癪だし、大司教の本気を見せてあげるわ……！」
　グリムは高らかに宣言すると、何かの呪文を唱えだした。
　それに伴い魔法陣が輝き始め、グリムの表情が恍惚としたものになっていく。
「おいアリス、これちょっとヤバくねーか？　ていうか俺はオカルトも信じる人なんだけど、何だか嫌な予感がする！」
「魔法陣が光ったぐらいでだらしねーな。シートの下にLEDかなんか仕込んでんじゃねーのか？」
　シートの裏を確認しようとするマイペースなアリスにツッコもうとする

も、魔法陣はどんどん光を増していき——

「不死と災いの神ゼナリス様！　その御名において、汝のしもべを遣わせたまえ！」

グリムの高らかな呼び声と共に、魔法陣は一層眩く輝くと……。

そこには、いつぞやに見た魔王軍幹部、ガダルカンドに似た姿の魔物の姿……。

いや、一体の巨大な悪魔が立っていた。

7

むすめ

『これはこれは、我を呼び出すとは大した娘よ！　こうして現世に呼ばれたのは、はたして何百年ぶりか……』

魔法陣の上に立つ悪魔は、まるで蜃気楼のようにゆらゆらと姿を揺らめかせている。

今の姿は、いわば霊体みたいな状態で呼び出されたのだろう。

「凄いぞグリム、マジで呼び出しやがった！　しかもなんか大物臭いし！」

俺が思わず歓声を上げると、呼び出した悪魔と向き合っていたグリムが小さく首を傾げて呟いた。

「だ、誰……？」

「おい」

俺はグリムを引っ張ると、耳元で囁いた。

（不安になるような事言うなよ　アレはお前が呼んだんだろうが）

（そんな事言われたって、私が呼ぼうとしたのはアンデッド、つまりはゴーストよ!?　太古の悪霊を呼んでやろうと思ったのに、知らない人が出てきたんだけど……）

　太古の悪霊とやらを呼ぼうとした事も聞き流せない話だが、今はそれよりも目の前の悪魔だ。

　すみません、間違えましたと謝ったところで、果たして許してくれるだろうか。

　——と、その時だった。

　ヒソヒソと囁き合っていた俺達をよそに、アリスは悪魔の前に立つと、その強面に向けて言い放つ。

「おいお前。随分と安っぽいホログラム使ってんな」

……………。

『ホログラム？　ホログラムとは何だ小さき者よ。我は邪神ゼナリスに連なりし大悪魔、名を……あっ！　こっ、こらっ、何をするか！』

悪魔が名を名乗りかけるが、アリスは魔法陣が描かれたシートを掴み、突如バサバサと扇ぎ出した。

扇がれる度に姿を揺らめかす悪魔が大声で騒ぐが、アリスはまったく悪びれようともしていない。

『いきなり何をするのだ小さき者よ！　呼び出されたと思えばこの無礼！　貴様、タダでは済まさぬぞ！』

「うるせーぞホログラム野郎。本体はどこに隠してるんだ？」

この世に怖いものなどないのか男前なアンドロイドが傍若無人に言い放

つ中、悪魔が感心するような表情を見せた。

『ほう、ここに在るは我が仮初めと見破ったか。だが、我が現世で受肉するためには、そこのちっぽけなウサギの肉ではちと足りぬな』

悪魔はそういうと、未だアリスが握り締めたままのシートの上で、その姿を揺らめかせ――

『我の真の姿が見たいというのなら、受肉に必要な量の贄を捧げよ！　そして汝の魂を代価とし、欲望に塗れた願いを唱えるがいい！　さあ小さき者よ、今こそ……おいやめろ！　さっきから何なんだ貴様は、なぜ我の邪魔をするのだ！』

魔法陣が描かれたシートをくるくる丸めて畳もうとし始めたアリスに、

悪魔が焦りの声をあげる。

悪魔が焦りの声を上げる。
「自分が呼べと言ったのはゴーストのはずだ。ガダルカンドのパチもんは呼んでねえぞ」
『パチもん!?　この我が何者かのパチもんだと!?』
　アリスに煽られ続ける悪魔だが、俺はふと閃いた。
「おいあんた、悪魔って事はアレだろ？　あの有名な、三つの願いを叶えてくれるってやつだよな!?」

「隊長！　ゼナリス様と契約を結んだ私が言うのもなんだけど、悪魔との取引だけはオススメしないわ！」
　その呼びかけに、悪魔はようやく俺達に気付いたようにこちらを見ると、
『その通りだ小さき者よ。魂と引き替えに、どんな願いでも叶えてやろう！　さあ汝、この我に何を望……　やめ、一々邪魔するのをやめろ！　契

約が終わらぬと帰れないだろうが！』
　アリスは裏面に何かの仕掛けがあると思ったのか、今度はシートをひっくり返した。
『先ほどから訳のわからない事ばかりする子供よ、まずはお前から望みを言ってみろ。キッチリと代価はもらうが、どんな願いでも叶え』
「なら地球っていう星の天体に、人が住める惑星を二、三個作ってくれ。資源は地球と同程度、大気は今より五十年昔の、綺麗な成分構成で頼む」
『叶えてやろ……。……え、なに？　地球？　惑星？』
　豪快な要求をするアンドロイドに悪魔が一瞬静かになる。
『ば、バカか貴様、何が惑星だ！　世界を二、三個生成しろと言ったのか⁉　どれだけ欲が深いのだ！』
　悲鳴じみた悪魔の反論に。

「お前が何でもっつったんだろ、願いの数を増やせだの裏技みたいな事を言ってるわけじゃねーぞ。じゃあ、エネルギー問題だけでも何とかしてくれ。クリーンでコンパクトなのが前提な。それでいて無尽蔵のエネルギー源をくれよ」

『エネ……。な、何？　その、もっとこう分かりやすいので頼む、金や宝石ではいかんのか？　もしくは権力が欲しいとか、憎い相手を呪って欲しいとか……』

　エネルギーが分からないのか、悪魔は代替案を提示する。

「金も権力も間に合ってんだよ。なら、この惑星の敵性生物を滅ぼしてくれ。魔王に魔族に蛮族に、後はモケモケや巨大魔獣……」

『大虐殺ではないか！　だ、ダメだダメだ、魂一つと引き替えに世界を滅ぼしかねない願いは叶えられぬわ！』

　過激な要求をするアンドロイドに悪魔がドン引きで声を上げた。

なんとなく悪魔に同情してきた俺はアリスに向けて、
「おい、もうその人に帰ってもらえよ……」
「願いを叶えるまで帰らねえって押し売りみたいな事言うんだ、しょうがねえだろ。かといって、こいつにも叶えられそうな願いは……　。……そういえばアジトのトイレが詰まってたろ、もうアレを直して帰ってもらうか」
　トイレ修理で帰されそうになった悪魔が冗談で言っているわけではないと気付き、いよいよ焦りの表情を浮かべ始めた。
　が、何かに気付いたようにハッと顔を上げ。
『……そ、そうだ、若さだ！　女なら誰もが望む、永遠の若さというのは……！』
「アンドロイドは年取らねえよ。経年劣化もバージョンアップで解決だ。……もういいから帰ってくんねえかなあ」
『　』

『…………』

出てきた時とは裏腹に、ショボンと項垂(うなだ)れた悪魔は無言のまま消え去った。

静寂(せいじゃく)だけが残されたその場に、なんとなく気まずい空気が漂(ただよ)っている。

そんな妙(みょう)な空気の中、俺はポツリと呟いた。

「……俺、酒池肉林とか願いたかったなあ」

「幹部になればそのぐらい自力で叶えられるだろ。あんな胡散臭(うさんくさ)いのに関(かか)わるなよ」

……明日(あした)から頑張(がんば)ろう。

アリスの言葉に、俺はこの星での更(さら)なる活躍(かつやく)を心に決めた——！

「ところでアリス、私がペテン師じゃないって信じてくれた？」

「…………………………」

【中間報告】

この惑星の生態系、及(およ)び魔法というものについて調査を実行。

この星の生物は巨大な物が多く、軒並(のきな)み好戦的なものばかりである。

中でもスポポッチのビンタは強力らしく、毎年多くの狩人(かりゅうど)が逆に狩(か)られているらしい。

スポポッチの天敵とされるモケモケは比較(ひかく)的気性(きしょう)が穏(おだ)やかで、共存が可能だと思われる。

鳴き声で仲間を識別するらしく、誠意を持って鳴き合えば友好も深められるだろう。

魔法についての報告だが、現在アリスがその存在について否定的であり、更なる調査が必要とされる。

なお、悪魔と呼称（こしょう）される存在は大した事がないと判明。
しかし、これも更なる調査が必要と思えるため、次の満月に再度呼び出しを行う。
その際にはまた結果を報告いたします。

報告者　モケモケ愛好家戦闘（せんとう）員六号

二章

腹黒系汚職騎士

1

　国王がポンコツなこの国では、第一王女であるティリスが内政を担っている。
　実質的な国のトップに城へと呼ばれ、中庭を通り過ぎた時の事だった。
　大きな機械の前に立ったティリスが、カッと目を見開いて……。

「おちんちん祭り！」
…………。
「やはりダメですか……。かといって、これを大勢の国民の前で唱えるのは……」

そう言って、ため息混じりに振り返ったティリスは俺を見て固まった。
俺は動かなくなったティリスに向けて。
「お姫様だってはっちゃけたい年頃だもんな。俺も遠征でホテルに泊まると、開放感から全裸になるし気持ちは分かるよ」
「違います、妙な納得をしないでください！　というか、私がこんなセリフを叫んだのも元はといえばあなたのせいではないですか！」
恥ずかしいところを見られたからか、顔を真っ赤にしたティリスが理不尽

な抗議をしてくる。
「おい、わけの分からない事言うなよ！　なんで俺のせいにされるんだ！」
「本気で言っているんですか⁉　アーティファクトを起動させる祝詞を、こんな言葉に変えたのはあなたでしょう！」
………何を言っているんだこいつは？
「なんで俺がそんなバカなパスワードに変えなきゃならないんだよ？　意味分かんない事言うなよ」
「嘘でしょう⁉　ついこないだの事なのに、まさか本気で忘れたんですか⁉　……そ、それよりも、お呼びしたのは他でもありません。六号様に話したい事があるのです」
　ここ最近の活躍で早くもお姫様ルートのフラグを立ててしまったか。
　しかし……。

「ごめんなティリス。好意を寄せられるのは嬉しいんだけど、腹黒い女はちょっと……」
「誰がそのような事を言いましたか!?　ちょっと相談したい事があっただけです！　あと、腹黒いはやめてください！　話というのは、このアーティファクトに関してです！」
　未だちょっと赤い顔のまま、ティリスが食ってかかってくる。
「確かそれって雨を降らせる機械だったよな？」
　俺が続きを促すと、ティリスはこくりと一つ頷き。
「昔は毎年水の必要な時季になると、このアーティファクトを起動させて雨を降らせてまいりました。しかし、ここ近年はアーティファクトの故障により、それもままならなくなっておりまして……」
　と、ティリスは真面目な顔になると。

「それで、六号様をここに呼び出した理由なのですが、実は護衛の仕事を頼みたいのです。アーティファクトが壊（こわ）れて以来、必要な水は隣国（りんごく）トリス王国で採掘（さいくつ）される水精石（すいせいせき）という稀少（きしょう）鉱石に頼（たよ）っていたのですが……。一応アーティファクトが直ったので、今年は輸入量を減らしてもらったのです。ですが……」

ティリスは渋（しぶ）い顔で目を逸（そ）らし。

「アーティファクトを起動させるのを今更（いまさら）になって嫌（いや）がったお父様が、姿をくらませてしまいまして……」

ティリスの説明によると、アーティファクトを起動させるには、王家の血を引く者が、祈（いの）りを捧（ささ）げる大勢の民衆の前で、祝詞を唱える必要があるそうな。

でもそれなら、別に王様じゃなく……。

「ティリスがみんなの前で叫べばいいじゃん」
「叫べませんよ、公衆の面前で女の子に何言わせるつもりですか！　……そ、それで、現在お父様の捜索を行ってはいるのですが、念のためにトリスへ外交官を派遣したいのです。とはいえ、輸入を減らしてくれと申し出たのはこちらの方です。それを再び増やして欲しいとお願いするのですから、普通であれば難しい交渉になるでしょう……」
　そう言ってティリスは祈るように両手を組むと、儚げな少女のように上目遣いで見上げてくる。
　だが俺は知っている。
　この王女様は黒いのだ。
　国のためであればきっとえげつない事を言い出すだろう。
「……トリスの第一王子は大変な好色で知られています。そこで、性格はア

レですが容姿だけは整っているスノウを、外交官として派遣しようかと……」
「俺もう、すでに話の続きを聞きたくないんだけど」
　この王女様は、よもや自分の家臣を好色な王子へ生け贄に捧げようってのか。
　悪の組織の俺ですらあまりの黒さにドン引きだ。
「話を最後まで聞いてください、私は護衛をお願いしたいと言ったのですよ？　あの子を売ろうという気はありません。ただ、美女好きで知られる王子の事、スノウを見ればきっと良からぬ事を考えるでしょうね。あの子が手籠めにされそうになったら現場を押さえて糾弾してください。外交官であるスノウに手を出せば国家間の大問題です。ええ、きっと有利に交渉を進められる事でしょう」
「これ、俺の国では美人局って言うんだぜ

「それ、俺の国では美人局って言うんだぜ」
俺の周りの人間は闇を抱えているヤツしかいないのか。
引いている俺に対し、なぜかティリスは感心したような表情で。

「つまり、これは六号様の国でも使われる外交戦略というわけですね？　そういう事なら話は早いです。あの子は強い子ですから大丈夫でしょう。なにせ六号様に、皆の前でパンツを下ろされた事もありましたし」
「なあティリス、あれはちゃんと理由があるんだよ。ていうか俺さぁ、巷でも良くないあだ名を付けられてんのよ。これ以上変な噂が定着しないよう、発言に気を付けてくんない？」
　そもそもスノウのパンツを下ろしたのは、この国を救うためにやったのだ。
　アレは英雄的行為であって、セクハラ扱いされては困る。

したし……
「護衛ねぇ……。俺はボディガードじゃなく戦闘員だぞ？　あんまり気乗りしないなぁ……」
独りごちる俺に向け、ティリスは楽しげに笑みを浮かべ。
「そんな事を言ってもいいんですか？　六号様とスノウは、口づけまで交わしたと聞いていますよ？　あの子が本当に手籠めにされてしまってもいいんですか？」
そう言って、意味ありげにニヤニヤしだした。
「いいよ、別に」
「えっ？」
俺の言葉が意外だったのか、ティリスが小さく声を上げる。
「気が短くて強欲なあの女、好みじゃねえもん。だから手籠めにされても俺は別に――

……」
「あの子の前では絶対に言わないであげてくださいね!? これは我が国からキサラギに対しての正式な依頼です! お願いだから請けてください!」
　そんな事言われてもなあ……。
「いつもならトリスとの外交は参謀に任せていたのですが、一体何があったのかつい先月、突然辞任を申し出てきまして……。それもあって、外交の人手が足りないのです……」
　参謀ねえ。
　誰だか知らんが、突然仕事を放り出すとは無責任な事だ。
　この国の連中によほど辛い目に遭わされたのだろうか。
「まあなんにせよ、今回の依頼はやめとくよ。俺は戦闘員だから戦う事以外は専門外だ。誰かを嵌めるのは大好きだけど、他を当たってくれ」
　それを聞いたティリスが焦ったように。

「お、お待ちください！　今回の依頼の報酬として、アリスさんから頼まれていたある情報をご用意したのですが……」

「……ある情報？」

　あいつが欲しがる情報ってなんだろう、この星の稀少な生物や劇薬でも欲しがってんのか？

　と、そんな俺の疑問に答えるように。

「この大陸のあちこちに残されている遺跡についての情報です。実は、これからスノウを派遣するトリスにも、入り口の封印を解く方法が分からず、未調査のままの遺跡がありまして。依頼を請けていただけるのであれば、その遺跡を調べる許可をトリスに頼んでさしあげましょう。……いかがですか？」

　ティノスがわざわざ上目遣いで言ってきた。

2

この街の郊外に、秘密結社キサラギという看板が掲げられた大きめの家がある。

ここは俺とアリスが借りた仮アジト。

秘密結社キサラギの、暫定的なグレイス支部である。

「――というわけで、なんとかいう国にまだ手付かずの謎遺跡があるんだと。でも太古の技術が解明出来てないせいで、入り口の封印が解けず入れないらしい。でもまあ、そこは行ってみてから考えようぜ」

城から帰ってきた俺に、アリスに先ほどの話を相談していた

「太古の技術とやらは、城の中庭に安置されていたオーパーツみたいな物の事だろう。電子的な認証（にんしょう）キーでロックされてるならどうにかしてやるから任せとけ。それより、六号がティリスから引き請けてきたもう一つの任務が問題だな」

「……ん？　もう一つの任務？」

だらしなく机に乗せた足をブラブラさせて尋（たず）ねると、

「外交官としてスノウを派遣するから、護衛をしろって言われたんだろ？　今のうちに言っとくが今回はアホな事をやらかすなよ？　いくら自分が高性能だからって、何度もフォローしてられねえからな」

心配しているのか何なのか、アリスがそんな事を言ってきた。

「なんだよその事か。任せろ、俺は飲みの席で初対面のおっさんと仲良くなる事にかけては得意なんだよ」

「だからといって飲みに行く度に知らないおっさん拾ってくるのはやめろよ。六号が連れてきたホームレスのおっさんが、アジトの庭に勝手にテント張って住み着こうとしてたんだぞ。追い払うのが大変だったんだからな」
あれだけ仲良くなったのにいつも朝になるといなくなってると思ったら、こいつそんな事してやがったのか。
「さすがはアンドロイドだ、悪魔に捧げた生け贄の時も思ったが、お前には血も涙もないのかよ」
「何度でも言うがアンドロイドにそんなもんねえよ。それより、アスタロト様からの侵略地拡大の指令もあるんだ。何度も言うがアホな事だけはやらかすなよ？　今月中には結果を出せって言われてんだからな？」
そんな、何度も念を押してくるアリスに向けて。
「お前は幹部連中に何を吹き込まれたのか知らんが俺の事を誤解してる

ぞ？　まあ見とけ、最古参の戦闘員は外交だって出来るんだ。そこんとこを見せてやんよ！」

「余計な事すんなって言ってんだ」

3

この惑星は地表の大半が広大な森に覆われている。

それ以外の開けた場所は、全て人が住むには適さない、赤茶けた荒野地帯だ。

俺達は今、そんな荒野のただ中を――

「[illegible]

「あはははは！　あははははははは！　私は風よ！　風になるわ!!　ねえ隊長、見なさいな！　あのデッドリーヘッグ達がまるでムラサキダイデンデンツムリよ！　今の私達には何者も追い付けないわ！」

「おいグリム、はしゃぐと落ちるぞ！　スノウ、ロゼ！　お前らも見てないでコイツを止めろ！」

サンルーフからテンションの高いグリムを覗かせ、大型バギーが疾走していた。

バギーの後ろには誰かが挑発しまくったせいか、大量のエイリアンみたいな四足獣が追ってきている。

グリムは一体何が面白いのか、先ほどからサンルーフから上体を出し、高笑いを上げ続けていた。

後部座席のスノウやロゼは、初めて乗る車からの光景が珍しいのか、窓にペタリと張り付いて赤い大地を眺めている。
「アリス、あんまりかっ飛ばすなよ？　車体が跳ねたらグリムが転げ落ちるからな。……っていうかお前、アクセルに足届いてなくないか？」
「自分は高性能アンドロイドだぞ。相手が機械の類いなら、コネクト挿せば支配下だ」
　その言葉にアリスを見れば、服の下からコードが伸ばされ、それがハンドルの下部に挿されていた。
「それより、ここからは道が悪くなる。そろそろグリムを引っ込めておけよ」
　アリスがそう告げると同時、車体がバウンと大きく跳ねた。
　と、同時にサンルーフからの高笑いが聞こえなくなり……。

「た、隊長、グリムが落ちました！　デッドリーヘッグにたかられて、えらい事になってます！」
「ほらみた事か、言わんこっちゃない！」
　アリスが急ブレーキを掛けると同時、俺達は車外に飛び出す。
　そこには転げ落ちた時のダメージで気絶したグリムが、魔獣にたかられ、餌として巣穴に持ち帰られようとしていた。
「コラッ、そのいき遅れは色んな意味で美味しくないぞ！　代わりにコレをやるからとっとと散れ！」
　囮代わりに携帯食を投げてやると、目の前のグリムを放り出しそちらに群がるデッドリーヘッグ。
　俺の言葉が分かったとも思えないが、どちらが美味そうかの区別は付くようだ。

携帯食に負けた地雷女を回収すると、グリムに逆襲した事で満足したのか、デッドリーヘッグ達は追って来なかった。
「……コイツ、毎回戦う前に戦闘不能になるのはどうにかならないのか？」
「齧られただけでまだ生きてますね。しばらくすれば元気になりますよ」
白目を剥いてぐったりしているグリムを寝かせ、バギーはそのまま疾走を続けた——
「——なあ六号、あのバギーという魔道具を私に預けないか？　珍しい物を高値で売るツテがあるのだ。なに、ほんの五パーセントほど分け前をもらえれば……」
「売らねーよ。あの文明の利器はお前らにはまだ早い。それに、アレを取り寄せるには結構な悪行ポイント使うんだからな」

せない組織が悪行ポイント　使い方がないか」
　早朝にグレイス王国を出た俺達は、日が沈む頃には隣国トリスに到着していた。
「悪行ポイント？　以前魔王軍の幹部と戦った際にもポイントが足りないだの騒いでいたが、お前やアリスが使う取り寄せ魔法はポイントとやらが必要なのか？」
　送ってもらっている装備の数々は別に魔法を使っているわけじゃないのだが、こっちの連中にはそうとしか映らないらしい。
「まあそういう事だ。悪行ポイントは、俺の日頃の行いによって貯まるんだけどな。切り札みたいなもんだから、ここぞという場面で使うわけよ」
「なんだかよく分からないが、つまりお前にくっついて回れば珍しい魔道具が手に入るのだな。……なあ六号、お前はトラ男殿のように剣は取り寄せられないのか？　物によっては、ある程度の行為までなら本で払う事もやぶ

さかではないのだが……」

「お、お前……」

こいつ金目の物や名刀のためなら躊躇なく体を売るのか。

スラム育ちだとは聞いていたが、一体どんな荒んだ生活を送ればこんな女になるのだろう。

こないだ、俺にお礼と称したキスで照れていたのは何だったんだ。

トリスに着いた俺達は、街の入り口でバギーを預け、早速城へと向かう事にした。

と、辺りを見回しながらグリムを運んでいたロゼが、前方に何かを見つけたようだ。

「隊長アレ見てください、アンドリューの串焼きが売ってます！　アンドリュ

ーってどんな魔獣なんでしょうね!?」

　ロゼが指さす所には、串焼きを売る屋台が見える。

「アンドリューは今から約十年程前、この国を震撼させた巨大魔獣だ。十年もの時が経つにもかかわらず、今なお食せるその肉は濃厚にして美味。この国の人間がそれだけ長い間食べ続けたのにまだ残っているほど、バカみたいな大きさの大魔獣だったそうだ」

「へえー！　隊長は物知りですね！」

　アンドリューについてロゼに適当な事を吹き込んでいると、串焼き屋の店主がツッコんだ。

「お客さん、変な噂流されちゃ困りますよ。俺の名前がアンドリュー。アンドリューが経営する串焼き屋って意味ですぜ」

「隊長酷い！　やっぱりお爺ちゃんが言ってた通り、人類とは欺きを重ねる

滅ぼすべき存在なんだ！」
恥をかかされたロゼからバシバシと叩かれながら、俺も街の様子を観察する。
トリスの街並みを見てみるに、この国もグレイス王国と文明レベルは変わらないようだ。
たまにアーティファクトと呼ばれる謎機械が見付かるが、今のところはキサラギの技術の方が優位だと言えよう。
と、そうこうしながら歩いていると、やがて城が見えてきた。
先触れから連絡を受けたのか、正門に着いた俺達を身なりのいい男が出迎える。
「グレイス王国の使者様方、トリスへようこそ！　このような時間のため王との謁見は叶いませんが、長旅を癒やすための宴を用意してございます。皆

様のお相手は、我が国の第一王子、エンクル様が務めさせていただきますので、どうかごゆるりとお過ごしください」

　この国の内政官なのだろう、年のいった男がにこやかに礼をしてきた。

　どう返そうかと考えていると、スノウが俺達の前に出る。

「ああ、よろしく頼(たの)む！　私はスノウ。グレイス王国近衛騎士(このえきし)団隊長にして、ティリス王女の専属騎士も務めていた者。つまり王女の懐刀(ふところがたな)というわけだ」

　こいつは何を言い出すんだと見ていると、スノウは満面の笑(え)みを浮(う)かべながら。

「トリスでは、水精石(すいせいせき)の輸出が主な産業だと聞いている。しかも、その稀少(きしょう)鉱石が地下資源として大量に埋(う)まっているとか。私はその石を見た事がないのだが、一度拝見したいものだな。いや、実に羨(うらや)ましい！」

「な、なるほど。では、帰りにお土産(みやげ)として少々水精石をご用意致(いた)しましょう

これ、なるほど。では帰りにはお土産として少々食料をご用意致しましょう
か。ティリス様にはどうぞ、よろしくとお伝え願えれば……」
　信じられねえ、こいつ賄賂（わいろ）を要求しやがった。
「ああ、もちろんだとも！　ティリス様にはトリスで素晴（すば）らしい歓待（かんたい）を受けたと報告させていただこう！　ちなみに私達は便利な乗り物で来ていてな。少々といわずとも、結構な量を持ち帰る事が可能なので……」
　内政官と話しながら城内に入っていくスノウに向けて、俺達はドン引きの視線を浴びせながら。
「……なあアリス。本当にあいつに外交を任せても大丈夫（だいじょうぶ）なのか？　護衛役として付いてきたわけだが、スノウがポカやらかしたら俺達も危なくねえ？　っていうか、あの女の強欲（ごうよく）さにはさすがの俺もドン引きなんだけど」
「アレでも一応は騎士団の隊長だったんだ、外交が初めてなわけでもねえだろ。未開な文明では賄賂なんて当たり前だ。そうだろ、ロゼ」

「やっぱりお爺ちゃんの言う通り、人類は強欲で滅ぼすべき存在なんだ……」
……変な事をブツブツ言ってるロゼを尻目（しりめ）に、俺は上機嫌（じょうきげん）で前を行くスノウの後ろを付いていった。

4

さて、歓待の宴である。
「隊長、この超（ちょう）ミニなドレスはどうかしら⁉　セクシー？　ねえセクシー？　ムラムラきて押し倒（たお）したくなるかしら？」
パーティー会場の前で出くわしたグリムが、黒のセクシードレスを身にまとい、自慢（じまん）しながら尋（たず）ねてきた。

「ババア無理すんなとしか言えねえ」
「偉大なるゼナリス様、この男に災いを！　不能の呪いに掛かるがいい！」
　グリムが指をさすのと同時に、俺はヘッドスライディングで身をかわす。
「外した……」
「外したじゃねえよ、恐ろしい女だなお前は！　俺は今、どんな強敵を相手にした時よりも恐怖を覚えたぞ！」
　邪神への対価に使ったのか、グリムの指輪が消え去った。
　日頃役に立たないくせに、このいき遅れはどうでもいい時にだけ恐るべき力を発揮する。
　強い想いが籠もった品を対価に、呪いを掛ける事が出来るのだ。

今俺にかけようとした呪いのように、失敗した際に降りかかる反動がデメリットとならない場合は成功率が落ちるそうな。
だが、それでも恐怖なのには違(ちが)いない。
「隊長が素直(すなお)じゃないからよ。以前私のパンツを覗(のぞ)いたクセに……」
「アレはお前がもどかしい事してくれたからだよ。そんな風にヒラヒラ見せびらかしてるとまたスカート捲(めく)るからな」
俺の言葉に警戒(けいかい)したのかグリムはジリジリと後ずさる。
と、そんな俺達の前に、同じく着替(きが)え終えた三人が現れた。
露出(ろしゅつ)が多く際(きわ)どいドレスを着たスノウが、これ見よがしに胸を張る。
「六号、この超ミニなドレスはどう思う!?　セクシーか？　どうだ、セクシーなのか？　ムラムラきて財産を貢(みつ)ぎたくなるか？」
ついさっき似たような事を口走っていたグリムを見ると、俺の視線から逃(のが)

れるようにそっと顔を俯かせた。
「……グリム、さっきお前は俺にこんな顔で感想を聞いてきたんだぞ」
「……隊長、私が悪かったわ。パーティーといえば出会いの場だから、テンションが上がったの。ちょっとだけ自重するわね」
と、一人だけいつものワンピースとあまり変わらない格好のアリスが、こちらに近づき耳打ちしてくる。
「おう六号、迷子になった子供のフリして城内を調べてきたんだが、この国にも文明に似合わない機械があった。人が多くてちゃんと調べる事が出来なかったから、パーティーが始まったらコッソリ抜け出していじってみよう」
「お前、そういうところは抜かりねえなあ……」
どうやらこの星にはあちこちに謎機械が存在するようだ。
一体この世界では、過去に何があったのだろう。

太古の遺跡とやらもまだ未調査らしいが、凄いお宝とか古代の超アイテムが見つかれば、その功績を手柄に幹部待遇も夢じゃないな……。と、その太古の遺跡と最も関係がありそうなキメラが、小ぎれいなドレスを着せられて上機嫌で鼻歌を唄っていた。

……コイツもパーティーでの出会いが楽しみなのか……。

「ロゼ、お前もかよ……」

「何がですか？　隊長、パーティー楽しみですね！　きっと美味しい物をお腹いっぱい食べられますよ！」

違った、コイツは食い気で浮かれてたのか。

お前だけはこの小隊の最後の良心でいてくれ。

怪訝な顔でこちらに首を傾げるロゼにそんな事を祈りながら。

貸し与えられたスーツの襟を正すと、会場へのドアを開け放った――

「──おい六号、どうすんだコレ。連れてくる人選を間違えたとか、そんなヌルいレベルじゃねえぞ」

　歓待の宴の会場は、実にカオスな状態と化していた。

　それも、主に俺の小隊の連中のせいで。

「すっごーい、そうなんですかぁあ！　ハーメルさんてば、そんなにお若いのに優秀（ゆうしゅう）なんですねっ！　しかも貴族の三男なら、煩（わずら）わしい跡継（あとつ）ぎ問題もない上に、親御（おやご）さんの老後を見る必要もないですしねっ！」

「え、ええ、そうなんですよ。でも、僕が第七騎士団の隊長に選ばれたのは、優秀な部下あっての事でして……」

　いつもよりワンオクターブほど高い声で、普段（ふだん）は使わないような言葉遣（ことばづか）い

[illegible]し。

をするいき遣れ
グリムが茶髪のイケメン騎士に、上目遣いで言い寄っていた。
いつもの不健康そうな姿とは違い、小綺麗な格好をした今の姿は立派な淑女だ。
「あの、ところで使者殿は、どうして裸足なのですか？」
裸足である事を除いてだが。
以前アイツが言っていた、靴を履けなくなる呪いとやらのせいなのだろう。
綺麗なドレス姿にもかかわらず、会場の絨毯の上をぺたぺたと裸足で歩くその姿は、異様な雰囲気を醸し出していた。
「やだぁー、ヘルメレさんてばぁ、ちゃんとグリムって呼んで？　だって、私達の

「それもハーメルさんではなくハニーって呼んで！　だって私達の仲じゃない！」
　クネクネと怪しい動きで媚を売るグリムだが、相手の男は引き気味だ。
「い、いえ、初対面の女性をいきなり呼び捨てにするというのは……。ちなみに、なぜ裸足なのかは聞かない方がよろしいのでしょうか……」
「宗教上の理由です。それよりハーメルさんてば奥手なのね！　でもそういうのって素敵だと思うわ、だって浮気とかしなさそうだもの！」
　相手からの質問にもほぼ食い気味に答えるグリム。
　グイグイ押される騎士の男は狼狽えながらも、相手が使者だという事で邪険にも出来ずに対応していた。
　しかし……。

「美味しいです！　こんなに美味しいお肉を、こんなにたくさん食べられたのは初めてです！」

「それはようございました。しかしロゼ様、豚の丸焼きは本来一人で完食する物では……。あの、骨は残した方がいいかと思いますが。ああ、お口の周りにソースが……」

　大皿に載った丸焼きを貪りながら、ロゼが涙目で美味しいと訴えていた。

　給仕のメイドが汚れた口元をハンカチで拭ってやるが、それにも構わずひたすら食らう。

「美味しいです！　美味しいです!!　骨もカリカリしてて、どこを食べても美味しいです!!」

こそ、それはようございました、喜んでいただけて何よりです。ロゼ様、続きまして、こちらはロマールエビとエチゴガニの網焼きです。磯の香が強いですが、その身はとても香ばしく……。ロゼ様、甲羅は残す部分です。ロゼ様？　ロゼ様！　ハサミは食べない方が……！」

こっちもこっちでグリムとは違う意味で目立っている。

そして何より……。

「エンゲル様はまだか!?　第一王子のエンゲル様が私の歓待をしてくれるのだろう!?　おい六号、もし王子をたらし込むのに上手くいったら必ず謝礼をさせてもらう！　だからエンゲル様を誑かす援護をしてくれ！」

「もうここまでいくと清々しいなあ……」

先ほどから欲望を隠そうともしないこの女。

ドレスはよく似合っているのに、その言動が全てを台無しにさせていた。

「いいか六号、よく聞けよ？　相手はトリスの第一王子にして次期国王。そしてこの国は、地面を掘り返すだけで金貨が出るとまで言われる資源大国だ。つまり、ここの王妃に収まれば一生左団扇の生活だ！」

　こいつ、本当にどうしようか。

　俺はティリスから美人局を依頼されたわけなのだが、依頼内容はこの女が一線を越えそうになった際、すんでのところで割って入って救出するというもの。

　だが、当の本人が一線を越える気満々な以上、俺が邪魔者になってしまう。

　と、そんな鼻息荒いスノウを見ていたアリスが俺に近寄り耳打ちした。

「おい六号。この国のエンゲルという男は、肥満体の好色でおススメ出来ない男らしいぞ。あまり期待させるとショックが大きくて面倒だ。あいつ、どうに

かしてやれよ」

　ほほう。

「それは逆に面白そうだな。あえてこのまま放置して、期待を煽ってから落としてやろうぜ」

「お前は本当にいい性格をしてるなぁ……」

　アリスが味のある表情を見せる中、執事の一人が声を張る。

「皆様、お待たせ致しました。第一王子エンゲル様がお見えになりました」

　会場の入り口に目を向けると、予想を超えたのがそこにいた。

「……アリス、これはさすがにねーわ。太った王子っていうからもっと若々しい、ぽっちゃりしたお坊ちゃんだと思ってたぞ」

「この国では未だ国王が現役だそうだ。親が引退しなけりゃ幾つになっても王子様だよ」

入ってきたのは四十を超えるであろう、肥え太ったおっさんだった。
不摂生の賜物か、歩くだけで息を荒げさせ、暑くもないのに汗をかいている。
いくらなんでも、期待していたところにコレではさすがに気の毒だ。
俺はスノウを励まそうと、
「エンゲル様、初めまして！　グレイス王国から参りました、近衛騎士団隊長のスノウと申します！　本日はお会いできて光栄です！」
王子様を見てショックを受けているかと思えば、スノウは目を輝かせ、花咲くような微笑みを浮かべていた。
……俺はどうやらこいつの事を舐めていたらしい。
「おお、これはお美しい外交官殿だ。ワシがこの国の第一王子、エンゲルであ

る。この度ははるばるお越し頂き、誠に」
「お美しいだなんてお恥ずかしい！　エンゲル様こそ男らしく恰幅のよいお体に逞しさを感じさせるお顔立ち！　わたくしクラクラしてしまいます！」
エンゲル様とやらが言い終わる前に、食い気味でスノウが褒める。
ちょっと欲の深い、刀剣マニアの変な女だと思っていたがとんでもねえ。この女は相手が大富豪であれば、オークだろうがスライムだろうが心の底から愛せるのだろう。
「……スノウ殿、そのように言ってくださるのは嬉しいのだが、ワシとて自らの容姿は理解している。世辞など言わずとも、我が国とグレイス王国は友好国。気を遣っていただかなくとも……」
「何を仰いますかエンゲル様、私の目を見てください！　貴方様は十分に

魅力的です、それだけは断言出来ます！　どうです？　これが嘘を吐いている者の目に見えますか⁉」

太ったおっさんを、正面から目を逸らす事なく見つめる銀髪美女。

このセリフと絵面だけを切り取れば、真実の愛に目覚めた美女と野獣みたいな感動の場面なのだが、もうこいつどうしよう。

「……た、確かに嘘を吐いている目には見えぬな。いや、ありがとう。そのように真剣な顔で褒められたのは初めてだ、ティリス王女は素晴らしい部下をお持ちのようで羨ましいな。さて、今回我が国に来られたのは水精石の輸出についてらしいが……」

「ど、どういう事ですかエンゲル様！　私がこんなにも情熱的に口説いているのに、なぜそのような話をしようとなさるのだ！」

気を取り直して真面目な話を始めたおっさんを、またもや遮る強欲女。

そのような話も何も、あいつは水精石の交渉に来たはずなのだが。
「い、いやスノウ殿、あなたが何を言っているのか分からんが、友好国の使者に手を出したとなれば、それは大変な外交問題に……」
　スノウに訳の分からない怒られ方をされ、おっさんがタジタジと後ずさる。
「なんと意気地のない！　エンゲル様は好色と聞いていたが、あれは何かの間違いだったのか!?　目の前に好意を寄せている女がいるというのに、まさか恥をかかせるおつもりか！」
「初対面の相手にいきなり好色とは無礼じゃないかね!?　というか、初めて会ったばかりなのに、この娘はなぜここまでグイグイくるのだ！」
　おっさんが後ずさるのに合わせてにじり寄り、もはや欲望蠢く顔を隠そうともしないスノウ。

「私はティリス王女の代わりとして参っております。その意味が分かりますね？　魔王軍から侵略を受けていた我が国ですが、つい先日、連中による大攻勢をはね除け、現在では小競り合い程度に収まりつつあります。ほうら、あそこで飲み物を片手に暇を持て余し、アホ面を晒しているあの男。名を戦闘員六号と言うのですが、ああ見えて戦う事に関してだけはなかなかのものなのです」

　こちらにまで聞こえてくる声量でそんな事を言いながら、スノウは俺をチラ見する。

「おいアリス、あの女今度は俺をディスってねえ？」

「戦う事に関してだけはなかなかのもんだと、ちゃんと褒めてくれてるじゃないか」

　そ、そうかなあ？

あまり褒められてない気がするんだが……。
「我が国は現在、ヤツのような傭兵を多数抱えております。凶暴そうなあの顔からも分かるように、暇を持て余すと問題ばかり起こす連中です。しかし、敵を与えて戦わせておけば、これが案外大人しくしているのですよ」
スノウの言葉におっさんがどこか怯えたような目でこちらを見ている。
やっぱこれ褒められてないだろ、いくら俺でもそれぐらいは分かるぞ。
俺達の力を背景に、スノウは悪い顔で脅しながらおっさんの肩に手を回し。
「なに、魔王軍と膠着状態になり暇を持て余してはおりますが、また直に戦端が開かれる事でしょう。ですが……。それまであの連中を抑えるためにも、周辺国とは仲良くしたいものですなあ」
「そ、それはもちろん！　ですからこうして、スノウ殿を盛大に歓待している

のだ……！」
……あの女とおっさんの黒いやり取りは聞かなかった事にしよう。

——と、その時だった。

「おのれ、よくも騙したな！　婚約者がいるなら最初から言いなさいな、ちょっとばかしイケメンだからって乙女心を弄んだ罪は許されないわよ！」
「そ、そんな事を言われましても……！　グリム殿、どうか落ち着いてください、皆が見てます！」
会場のド真ん中からそんな罵声が響いてきたのは。
何事かと思えば、ウチの隊のいき遅れが先ほどの騎士を呪おうとしていた。

「偉大なるゼナリス様、この男に災いを！　頭から水を被るがいい！」

グリムがそう叫ぶと同時、握り締めていた何かが消え失せる。

そして、タライをひっくり返したような大量の水がグリムの頭にぶっかけられた。

……どうやら呪いが失敗したらしい。

ずぶ濡れになったグリムは俯いたまま肩を震わせ。

「……ふ……ふふ……。笑いなさいよ。あははは、この憐れな女を笑いなさいよ！　すり寄ったイケメンに振られたあげく、呪いに失敗してみすぼらしい姿になった私を、笑いなさいよおおおおお！」

とうとう癇癪（かんしゃく）を起こし、絨毯（じゅうたん）に転がりジタバタと暴れ始めたいき遅れ。
あまり考えたくもないんだが、アレが俺の部下なんだよな……。
もうこれ以上は見ていられないとばかりにその場を後にしようとしたその時だった。
「そのように自分を卑下（ひげ）するものではありませんぞ、お嬢（じょう）さん。さあ、ずぶ濡れのまま泣いていては可愛（かわい）い顔が台無しだ。今すぐメイドの者に着替（きが）えを用意させるので……」
泣き喚（わめ）いていたグリムにハンカチを差し出しながら、背の高い中年の男が手を差し伸（の）べた。
随分（ずいぶん）と体格がいい事から、将軍職とかそういう関係の人なのかもしれない。
「……あの、ダンディーなおじさま？　よろしければお名前を伺（うかが）って

も……」
「先に申しておきますと妻帯者です」
　これ以上見ていられなくなった俺は、グリムを興味深そうに眺めているアリスを突くと、その場を後にする事にした。

5

「なあアリス。俺、前回大活躍したよなあ？　普通なら死線を越えた仲間達とフラグの一つも立つはずなんだが。あいつらはどうしてああなんだ？　どいつもこいつもイケメンか金持ちがいいってか？　せっかく地球外の惑星に来たってのに、なんでこんなとこだけ現実的なんだよ」
「お前だって美人で若くてスタイル良くて、ついでに一途なのがいいんだろう。

「お前が[illegible]
アンドロイドの自分からしたら、男も女もどっちもどっちさ。理想の女が欲しいなら、キサラギが直に売り出す予定の、十八歳以上限定アンドロイドで我慢しとけ」

酒で火照った体を冷ましながら、城内をさまよう俺とアリスは、そんな……。

「……おいアリス、今なんつった？　キサラギが、十八禁のドスケベ美少女アンドロイドを売り出すって言った？」

「言ってねえ。ドスケベなんて言ってねえ」

どうしよう、早く日本に帰りたくなってきた。

しかし、今地球に帰るとヒーロー達との激戦区に送られるらしいからなあ……。

と、そんな事を考えていると、アリスがふと立ち止まった。
「着いたぞ。見ろよ六号、コイツは一体なんだと思う？」
城の片隅に置かれていたのは、ド真ん中に大きなガラスケースが付けられた機械だった。
ケースの中は何かの液体で満たされており、現在も機械が稼働中なのが見て取れる。
「俺、これが何だか知ってるぜ。アレだ、このガラスの中でヤベーやつを培養するんだよ。具体的にはホムンクルスの美少女とか、もしくは誰かのクローン人間だとか。アリス、これを解析してスノウのクローン作ってくれよ。そしたら生まれたての綺麗なスノウを、パーティー会場にいる汚いのと取り替えるんだ」
「それも何だか面白そうだが、多分コイツは冬眠カプセルみたいな物だな。

この中で何かを眠らせていたんだろう。中にいた物は目が覚めて逃げ出したのか、今は空っぽみたいだが」
　アリスがケースをぺたぺたと触りながら、そんな事を……、
「いや、ぜってー違うって！　美少女を生み出す装置だってコレ、でなきゃなんで意味深にこんなとこにポツンとあんだよ！　ちょっと色々いじってみようぜ。ガチャポンみたいになんか生まれるはずだって」
「そこまで言うなら試してみればいい。構造的に生命維持装置だと思うんだがなあ」
　アリスの呟きにもめげず、俺は機械をいじくり回す。
　だがウンともスンとも言わない事に業を煮やした俺は、呆れるアリスに背中越しに。
「何百年もこのままで、きっと故障してんだよ。こういうのは叩けば直ると決

まってる」
「しょうがねえな、それでお前が満足するんなら好きにしろ。壊(こわ)れたら速攻(そっこう)で逃げるから、用意だけはしとくんだぞ」
　そんな言葉を聞きながら、俺が装置をぶん殴(なぐ)ろうとしたその時だった。

「やめろーっ！」
　薄暗(うすぐら)い廊下(ろうか)に悲鳴じみた声が響き渡(わた)る。
　何事かと思い後ろを見れば……。
「このバカ共が、キミ達はいきなり何をする気だ!?　その装置がどれほど貴重な物か分かっているのか!?」
　そう言って食ってかかってきたのは小学生ぐらいの少年だった。

整ってはいるがどこか生意気そうな童顔に銀色の髪(かみ)、左右で色の違うオッドアイ。
……というか、どこかで見たような風貌(ふうぼう)だ。
「なんだガキんちょ、お前この城の関係者か？　俺はグレイス王国でとても偉(えら)い立場にある、戦闘員六号さんだ。外交問題にされたくなければ言葉に気をつけろよ？」
「ボクはこの国の関係者なんかじゃない。というか……。戦闘員六号？　お前みたいなやつが？　……ふーん、こんなヤツにガダルカンドが負けたのか。アイツも見かけ倒(だお)しだったんだねー」
……なんだこの生意気そうなガキは、目上の人間への口の利(き)き方を教えてやろうか。
いや待て、今こいつなんて言った？

「ガダルカンドって俺がぶっ倒した魔王軍の幹部の名前だよな？　お前みたいなクソガキでも知ってるようなもんなの？」

少年は、フンと小馬鹿にしたように鼻で嗤うと。

「なるほどね。ハイネから聞いていた通り、頭の方は良くないみたいだ。ボクの名前はラッセル。そう、魔王軍四天王、水のラッセルとはボクの事さ！」

そう言って不敵な笑みを浮かべた少年、ラッセルは。

俺のアイアンクローに悲鳴を上げた。

「――なんだ、どうしたラッセル！　一体何事……。ああっ、お、お前っ!?」

魔王軍幹部を自称する子供を制裁してると、背後から聞き覚えのある声がかけられる。

俺は声の主に振り向くと――

「確保ーッ！」
「うわあああっ⁉　ちょっ⁉　待っ……！」
　そこにいたのはまごう事なき魔王の幹部、炎のハイネが立っていた。
なぜこんな所にいるのかは知らないが、俺はラッセルを放り出すと、驚き固まっていたハイネにタックルする。
「ハハハハハ！　なんでこんな所をほっつき歩いてるのかは知らんが、無防備に油断してたのが運の尽きだ！　おいアリス、今すぐ手錠を送ってもらえ！」
「がってんだ！」
「やめろ！　おい六号、お前は勘違いしてるぞ！　今日のあたしは人類を滅

ほしにきた敵じゃない、魔王様の使者としてここに来てるんだ！」
床に倒されマウントを取られたハイネが必死に叫ぶ。
「おい六号、手錠がきたぞ」
「でかしたアリス。ハイネを後ろ手にするからガチャッとやってくれ」
「ちょっ、話を……！」
ハイネが身動き取れないよう抱き締めながら、両手を無理矢理後ろに回させる。
「六号、手錠かけたからもう放していいぞ」
「だから話を聞いてくれって！　……お、おい六号？　あたしを拘束したんだからもういいだろ？　お、おい、なんか息が荒くなってきてないか!?　ラッセル！　ラッセル！　助けてくれ、ラッセル!!」
俺は[illegible]

俺はその場にて振り返り、抱き締めたハイネを盾にした

「ぐあっ!?　ラ、ラッセル……、お前……！」

「ハイネ!?　ち、違う、ボクはただ助けようと……！」

背後からの殺気を感じとっさにハイネを盾にしたのだが、どうやらラッセルが攻撃を仕掛けてきたらしい。

盾にされたハイネは背中に何らかの魔法を受け、苦痛に表情を歪めていた。

「このガキ、何しやがる！　会ったばかりの相手にいきなり襲いかかるとか、とんでもねえクソ野郎だな！」

「すげえな六号、お前は三分前の自分の行動も覚えてねえのか」

アリスがよく分からない事を言ってくるが、俺はハイネを盾にしたまま立ち上がる。

仲間を傷つけてしまい青ざめた顔をしているラッセルに、俺は盾を構えたままジリジリと距離を詰めた。

「おいハイネ、悪の組織だからって仲間は選べよ？　このガキ、初対面の相手に背後から突然襲いかかった上、お前を平気で傷つけやがったぞ。こんな外道は見た事がねえ」

「六号、お前さんは一度鏡を……。いや、もう自分は何も言わねえ」

　俺のハイネへの慰めに、またもや意味の分からない事を呟くアリス。

「まあ何にしろ、訪問した他国の城でエロ幹部ゲットだぜ。大手柄な上にお楽しみの尋問タイムだ。へっへっへ、ハイネさんよお？　敵に捕まった女幹部がどんな目に遭わされるのか、まさか知らないわけじゃないよなあ？」

「ろろろ、六号、待って……！　あ、あたし達は今回は本当に……！　あと、さっきから手が胸に当たってんだけど……！」

ハイネが鼻を鳴らすたび悪行ポイントが加算されますというアナウンスが頭に響く。

「いいぞ六号、お前はもう堕ちるところまで堕ちていけ。自分に、姑息で卑怯な小物の真髄を見せてくれ」

涙目で震えるハイネと横でうるさいアリスを無視し、俺はラッセルに視線を向けた。

「で、お前は一体なんなんだ？　魔王軍ってのはこんな姑息な卑怯者のガキを幹部にするほど人手が足りていないのか？」

「お、お前はさっきから何なんだ！　ボクを卑怯者だの姑息だの、その言葉は人間にだけは言われたくないぞ！」

《悪行ポイントが加算されます》

ラッセルは煽り耐性が低いのか、顔を真っ赤にして反論してくる。
「いい加減ハイネを放せよ！　お前の事は聞いているぞ。難攻不落で知られたダスターの塔を落としたとか、ガダルカンドを倒したとかさ！　それらも、どうせ卑怯な手を使ったんだろ⁉」
「よせラッセル、この男を挑発するな！　それと六号、アンタは何か喋るたびに一々体をまさぐるのはやめろ！　ちょっ、やめっ！」
《悪行ポイントが加算されます》

　俺はハイネを引き寄せながら、腰から銃を引き抜いた。
「いいかガキんちょ。俺は世に蔓延る幹部の中で、お前みたいな子供幹部だけは受け入れられないんだよ。どうせ、『ねえ、コイツ僕のオモチャにしてもいい？』とか、『あーあ、つまんないの。なんかもう飽きちゃったから壊しちゃおっかな』とか言っちゃうんだろ？　俺知ってるんだー

「そんな事は……！　た、たまにしか言わないよ！　それよりいい加減ハイネを放せ！　ボクと戦いたいって言うのなら相手をしてあげるよ。だからそれ以上仲間に触るんじゃない！」
《悪行ポイントが加算されます》
　どうやらコイツは俺の手にしている武器を理解していないようだ。
　敵の幹部とはいえ子供をやっちまうのは気が咎めるが、これも悪の組織の世知辛さ。
　俺がラッセルに銃口を向け、引き金を絞ろうとしたその時……。
「なあ六号、あたしの話を聞いてくれって！　この国には正式に使者として来てるんだ、それを攻撃すればあんたの国と、この国の関係が厄介な事になるぞ！　あといい加減乳を揉むな！」

人質(ひとじち)にされたハイネが必死に訴(うった)えかける中、やっぱりポイント加算のアナウンスが響いてきた。

6

「オラアアアアアア！　おいおっさん、どういう事だか説明しろや！　てめーキサラギ舐(な)めてんのか！　裏切り者は制裁だコラ!!」
「ななな、何事だ!?　衛兵！　衛兵ーー！」
　会場に戻(もど)った俺はエンゲルに食ってかかった。
「何事だじゃねえよおっさんよお！　お前んとこの国は魔族に水精石(すいせいせき)とやらを売ってんのか？　あ？　そんでもって、あいつらと同盟組むんだってな？　アレか、魔族と組んでお前らもウチに攻(せ)めてこようってか？　お？」

「ああ、この城に滞在中のハイネ殿と会ったのか。確かお前は名を六号とか言ったな、話を聞くのだ」
　会場の真ん中でひざが悪いのか豪勢なイスにかけ、スノウに張り付かれていたエンゲルは、宥(なだ)めるように首を振(ふ)る。
　それを耳にしたスノウが、ギョッとした顔でエンゲルへと食ってかかった。
「エンゲル様、それは一体どういう事ですか!?　というかなぜこの城に炎のハイネがいるのですか!?　六号の言うことが本当であれば、我が国としては黙(だま)っている事は出来ませんぞ！」
「スノウ殿、それは今から説明しよう。六号殿の言う魔族との同盟というのは間違いだ、正確には不可侵(ふかしん)条約だな。魔族とて、我々と会話もできれば知能も高い。彼らと交渉(こうしょう)してみたところ、これが意外と話が通じるのだ」
　なるほど、このおっさんは日和見(ひよりみ)に入ったわけか。
　思えば地球においてもこういう国はいくつかあった。

キサラギが悪の組織だと分かっていても明確には敵対せず、どっちつかずの状況(じょうきょう)を保ち、勝敗が見えてきたら勝ち馬に乗る。
それが外交というやつなのだろうが、そういった国の末路は大抵(たいてい)がろくな事にはならないものだ。
後々あれこれと難癖(なんくせ)を付けられ、不平等な条約を結ばされたあげく、国を乗っ取られたりするのだ。
なにせ俺達がそうだったのだから間違いない。
「無論、貴国に敵対するつもりはない。そもそも、魔族が戦争を仕掛けた理由は知っているかね？　巨大魔獣(きょだいまじゅう)【砂の王】に国土を侵蝕(しんしょく)され、他(ほか)に選ぶ道がなかったのだそうだ。いっそ我が国が橋渡(はしわた)しをするから、貴国も魔族達と和解をしてはどうかね？」
エンゲルはそう言って同情的に頭(かぶり)を振るが、スノウが語気を荒げて食って

かかった。
「砂の王がいる以上、魔族の国はやがて居住出来る土地がなくなります！　連中が土地を欲(ほっ)している以上、和解などは不可能です！」
砂の王とやらが何なのかは知らないが、どうやらそいつがいると魔族の国はやがて砂漠(さばく)になるらしい。
なら新たな土地を求めるには他を侵略するしかない。
そう、この惑星(わくせい)を侵略に来た今の俺達のようにだ。
「いいや、そっちがその気ならあたし達は停戦する事だってやぶさかじゃないさ」
その声に会場の入り口を見れば、未(いま)だ後ろ手に手錠(てじょう)を掛(か)けられたハイネ

が立っていた。

　そういえばアイツの話を聞いた後、手錠を外す間もなくここに来たんだった。

「貴様、何が和解だぬけぬけと！　先の戦でどれだけの兵が死んだと思っている！　みんなとてもいいヤツだった。共に公金の横領を企んでいたヒース……。私に袖の下を贈ってくれたモレク……。そして何より、貴様には我が愛剣アイスベルグを溶かしてくれた恨み、未だに忘れてはいないぞ！」

　頭に血が上ったスノウがちょこちょこ聞き捨てならない事を口走る中、ハイネは妖艶な笑みを浮かべ、エンゲルの隣にスッと立つ。

「あたし達もガダルカンドを倒されたんだし、それはお互い様ってもんだろ？　それに、エンゲル様の協力のおかげで砂の王もどうにかなりそうなの

さ、というのも、この国の古代遺跡に砂の王に対抗可能な物があるらしくてね。あたし達がここに来ているのも、その遺跡を調査するためさ」

……古代遺跡？

それってティリスが言っていた遺跡の事か？

と、俺の疑問に答えるように、エンゲルが説明を引き継いだ。

「つまりは、砂の王さえどうにか出来れば魔王軍は我々と争う必要がなくなるのだ。どうだね、スノウ殿。我が国は裏切ったのではなく、むしろ一時期押されていたグレイス王国を助けようと、このような提案を持ちかけたのだよ。しかし……」

と、そこで悲しげに表情を曇らせ。

「しかし、スノウ殿には我々の誠意が伝わらなかったらしい。いや、それどころか我が国を脅しに掛かるとは……」

そう言ってわざとらしく頭を振るエンゲルに、スノウが言葉を詰まらせた。
　ハイネはそんなエンゲルの隣で、からかうように笑みを浮かべる。
「エンゲル様から聞いたよ、あんたらは水精石の輸入を一旦止めたんだろう？　あたし達は、トリスが売り先に困っていた水精石を引き取ってやったのさ。それを今更、やっぱり輸入を再開してくれって頼んでんのかい？」
　なるほど、水精石がダブついたおかげで、そこを魔王軍の連中につけ入られたのか。
「確かスノウとか言ったね。フフッ、そんな強気な態度に出ていいのか？　最悪、魔王軍とトリスの両方を敵に回しちまうんじゃないのか？」
「う……。ぐ、ぐぐ……！」
　不利な事を悟ったのか、スノウが悔しげに歯ぎしりする。
　だが、何を思ったのかエンゲルの腕を取ると、その身を寄せて　。

が、何を思ったか[illegible]の腕を取ると、その身を寄せて……

「エンゲル様は我がグレイス王国を選んでくださいますよね？　ええ、先ほどは多少強い言葉になってしまいましたが、エンゲル様の事を信じておりますとも。ささ、友好の証（あかし）として私と仲良くいたしましょう！」

「お、おいお前、国のためにそこまでするのか!?　エ、エンゲル様、あたしだってその、仲良くというか……」

なぜか突然始まったエンゲル様の取り合い合戦。

なんだこれ、違（ちが）うだろ。

「おいハイネ！　貴様エンゲル様に色仕掛（いろじか）けとはそれでも魔王軍の幹部か、恥（はじ）を知るがいい！　エンゲル様、私の方が魅力（みりょく）的ですよね!?」

「あ、あんたの方こそ色仕掛けしてるじゃないか！　エ、エンゲル様とはあたしの方が先に出会ったんだ、むしろそっちが引くべきだろ！　エンゲル様はあたしを選んでくださいますよね!?」

色々とおかしいだろ、間違ってるだろ。
こんな感じで美女達に取り合いされるのって、普通おっさんじゃなく俺の方だろ。

ハーレム系主人公みたいな状況になったエンゲルは、だが二人にデレる事なく、至って素の表情で。

「いや、お二人の気持ちは嬉しいがな。こういった事で外交を左右するのはどうかと思うのだがね」

「一体どうなされたのですか!?　あちこちで聞いていたエンゲル様の噂とはほど遠いのですが!?」

「昨日まではあたしの胸ばかり見てたのに、なんで急に悟ったような顔してんの!?　この短い間に何があったのさ!?」

賢者みたいな表情をしたエンゲルは、二人の色仕掛けにも動じる事なく。
「いや、なぜかこのパーティーが始まる直前辺りから、急に生まれ変わったような気分でなぁ。今までのワシは、なぜあんなにも女性の事しか考えない俗物だったのかと、ほとほと嫌気がさしておって……」
「エンゲル様、本当にどうなされたのですか!?　ティリス様から事前に聞いていた話とはまるで別人なのですが!?」
「昨夜は無遠慮にあたしにセクハラ発言しまくってたクセに、急にそんな態度を取られると釈然としないんだけど！」
エンゲルは二人に迫られるも素っ気ない。
同じ男としては歯ぎしりするほど羨ましい状況なのだが、このおっさんは案外只者ではないのかもしれない。
だが……。
「エンゲル様！　[illegible]

エンゲル様！　このスノウ、性格に難ありですが顔と体には自信がありま
す！　どこぞの魔族などよりも、やはり人間同士が一番かと！」
金蔓（かねづる）を逃（のが）してなるかとばかりに血走った目で迫るスノウ。
性格に難ありなのは一応自覚してたのか。
「ええ!?　エ、エンゲル様！　このハイネ、意外と尽（つ）くすタイプで、あ、あたし
の方が……うう………………」
そんなスノウに引きながらも、ハイネも負けてられないとばかりに赤い顔
で色仕掛けを慣行する。
だが二人にすり寄られている本人はといえば……。
「やれやれ、困った娘（むすめ）達だ。まったく、ワシは興味がないと言っているのだがな
あ……」
そんな、性欲皆無（かいむ）系主人公みたいな事を言いながら、俺をチラリと見る
と勝ち誇（ほこ）ったように苦笑（くしょう）を浮かべ……。

……敗北感というのはこういうのを言うのだろう。

限定品の行列に並んでいた際に、俺の前の客で売り切れた時。

キサラギの幹部が入浴中だと聞きつけ覗きに行ったら、むくつけきトラ男の裸体を拝まされた時。

後に入った戦闘員達が、俺を飛び越えて次々と出世していった時。

そして、ヒーローに蹴散らされた時。

だが、それらが取るに足らない事に思えるほどに、目の前の男への敗北感は凄まじかった。

「どうした六号、そんな覚悟を決めたような顔をして。またくだらない事を考えてるんじゃねえだろうな」

そんな俺を後ろからアリスが突き、注意してくるが。

「悪いなアリス。これから俺は無茶するが、見守っていてくれないか？　男にはやらなきゃならない時があるんだ」

「……よく分からんが、自分はお前の相棒で、悪の組織の同僚だ。たとえどんな悪事をやらかそうとも、最後まで付き合ってやるから安心しろ」

俺の覚悟を察してくれたのか、そんな泣けてくる事を言ってくれた。

大丈夫だ、俺には頼もしい相棒がいる。

どんな事になったとしても、きっと何とかしてくれる。

「おのれ魔王軍幹部ハイネ、思えば貴様の事は初めて会った時から気に食わなかったのだ！　無駄にデカい乳を放り出し、男に媚を売るその姿！　私と被っているのはキャラだけかと思えば、狙っている男まで……！」

「放り出してはいないし、媚を売るとか失礼だよ！　そもそも、アンタなんかとキャラ被ってるとか決然とこんなかんじだけど！　あとさ、そこまで次深く

かとテュ祝ってるとか和祭としたいんだけど　おかしいそこまで谷深く
ないよ！」
　自分を取り合い今にも摑み合いを始めそうな二人をよそに、当の本人はといえばやはり余裕の表情だ。
　俺は、そんなエンゲルの下に近づくと。
「エンゲルの旦那。場の空気が悪くなってきたんで、一つ、宴会芸を披露してもいいですかね？」
「宴会芸？　ほう、お主は戦いに関しては優秀だとスノウ殿から聞いていたが、そのような事も出来るのだな。では、ぜひとも場を盛り上げてほしいものだ」
　形勢が逆転したからか、エンゲルの口調がいつの間にか変わっていた。
　あまり期待していなさそうな顔のエンゲルから許しを得ると、俺はみんなの注目を浴びながら　。

の涙目を流てかかい……
「貴様など、以前私と戦った際に、六号に卑猥な画を撮らせていたドスケベ女ではないか！　エンゲル様、このような慎みのない女はやめた方がいいです、その点私は、まだユニコーンに乗れる清い体で……！」
「ふ、ふざけんなよ、あたしが好きであんな姿を晒したとでも思ってんのか！　アンタんところの六号が……！」
　ヒートアップしていく二人をよそに、俺は不思議そうなエンゲルの後ろに回る。
「ん？　それではワシが六号殿の芸を見られないのではないのか？」
　その言葉を聞き流しながら、ジッパーに手をかけた俺の姿に、何をするか予想が付いたのだろう。
「おい六号。お前、まさか……」
　アンドロイドのクセに、困惑気味の表情を見せるアリスの声を聞きながら

――！

「それではいきますぜ旦那。こいつは俺の国に伝わる、おそらくは最も有名な必殺芸だ！」

「――チョンマゲ！」

《悪行ポイントが加算されます》

自主
規制

【宣戦布告】

貴国の使者からの、長年の友好国に対しての威圧的な振る舞いと、エンゲル王子に対しての無礼な行為はもはや看過できず、我がトリス王国は、この布告文書をもってグレイス王国に対し開戦した事を通達する。
ついては大使の帰国、水精石の輸出の差し止め、およびあらゆる経済制裁を行う。
グレイス王国に謝罪の意志がある場合は、当該の使者二名を引き渡す事。
それが成されない場合は、貴国に対し武力の行使も辞さず、血をもっての報復とする。

三章

肉食系女子キメラ

1

グレイス王国の謁見の間。

「……スノウ、顔を上げなさい」

「………………はい」

王様はまだ捕まらないのか、玉座のティリスが震えるスノウに命令した。

トリスから無事に脱出……ではなく帰国してきた俺達は経過を報告。
その結果、さっきから穏やかな笑みを浮かべたティリスに目を合わせまいと、スノウが平身低頭土下座していた。
恐る恐る頭を上げながら顔色を覗うスノウに。
「おいスノウ、もう済んだ事はしょうがないじゃん？　いつまでもクヨクヨしてないで切り替えていこうぜ」
「貴様というヤツは、貴様というヤツはああああああーッ！」
俺の慰めを聞いたスノウが、その場に跳ね起き食ってかかった。
──あの時放った必殺芸はパーティー参加者の時を止め、その場の騎士達をバーサーカーに変貌させた。

アリスがエンゲルを人質に取るという機転を利かせ、どうにか城を脱出して逃げ帰ってきたのだが……。

「まさか、友好の使者としてスノウを送り出したら宣戦布告状を送られるとは思いませんでしたよ」

そう言って笑いかけるティリスだが、口調は穏やかなのに目がちっとも笑ってない。

「ティリス様！　違うのです、私の方はエンゲル様を陥落させるまであと一歩という状況だったのです！　このスノウ、万が一ユニコーンに乗れない体にされれば、我が国はトリスに貸しが出来るし私は贅沢三昧だと、体を張って誑かそうとしたのですが……！」

「そ、そうですか。多少の色仕掛けは期待していましたが、まさかそこまでの

覚悟(かくご)だったとは思っていませんでした……」
　軽く引くティリスに訴(うった)えるように、スノウはこちらを指さすと。
「しかし、この男が！　六号、貴様はどうしてあんなバカな事をやらかしたのだ!?　一体どんな心の病を抱(かか)えれば、王の頭にあんな物を乗せられるのだ！」
「バカな事ってなんだ！　あれは俺の国に伝わる伝説の宴会芸だぞ。国が違えば文化も違う。世の中ってのは広いんだ、自分の常識がすべてだと思うなよ」
　とはいえ、ちょっとだけ悪い事をしたかなと思った俺も、反省の意を示すため正座中だ。
「ろ、六号様は、なぜそのような宴会芸を……？」
「ムシャクシャしてやった。反省はしている」
「もっと心を込めて謝らんか！」

「もっと心を込めて謝らんか！」

もうやっちまったもんは仕方がないのだからそろそろ勘弁してほしい。

「宣戦布告文には、エンゲル様への無礼な行為の他、威圧的な振る舞いがあったとありますが……」

宣戦布告文に視線を落としていたティリスがチラリとスノウに目を向ける。

「あっ、それはコイツ！　この女、あのおっさんをちょこちょこ脅してたんだぜ！　あと向こうの外交官に賄賂を要求むぐっ……！」

「き、貴様！　違うのですティリス様、威圧的な振る舞いといいますか武力を背景に交渉ごとを有利に運ぶといいますか……！　それに賄賂を要求などとはとんでもない、アレは向こう側に揺さぶりをかけて反応を見てみるという、外交策の一つでして！」

俺の口を塞ぎながら無茶苦茶なハッタリをかますスノウ。

何の口を塞ぎたから無茶苦茶な言い訳を始めるスノウ、

だがティリスは、そんなスノウを椅子の上から見下ろすと。

「近衛騎士団隊長、スノウ。あなたからは騎士団隊長の位を剝奪します。配属先は今のまま、小隊の補佐を務めなさい」

「あああ……元の地位に返り咲いたのに、また降格……」

ハラハラと涙を溢すスノウをよそに、ティリスはため息を吐きながら。

「まったく、困った事をしてくれましたね……。六号様、一体どうするおつもりですか？　今回の件に関しては我が国に一方的に非があります。戦争に突入しても、周辺国はトリスに味方すると思われますし……」

「アリスいわく、トリスが魔王軍と不可侵条約を結んだ事を周辺国に言いふらせってさ。それを理由に人類の敵扱いして、ウチはそんな事してない、言い掛かりだって逆ギレ気味に糾弾してやれってよ」

ティリスは一瞬動きを止め。
「……私も人の事を言えた性格ではないですが、アリスさんも大概ですね。ですが、周辺国への説明はそれで押し通しましょうか。魔王軍との不可侵条約は本当の事ですしね……」
　その提案に軽く引きながらも了承する。
周辺国にこう言っとけば、一方的にウチが悪者にされる事もないだろうとのアリスの予想だ。
「トリスも戦争準備が必要ですから、すぐに侵略してくる事はないでしょう。こうなってしまっては仕方ありません。守りを固め、魔王軍やトリスからの攻撃に備えましょう」
　気持ちを切り替えたのか、ティリスは真面目な顔をふと崩すと。
「しかし、困りましたね……。そうなると水をどうやって確保するのか……」

そう言って、憂いを帯びた表情を見せ……。
それを見たスノウがここぞとばかりに顔を上げた。
「ティリス様、それに関しては私に考えがあります！　この男は自分の国から物を取り寄せる事が出来るとか。なら、国元から大量の水を送ってもらいましょう！　それがうまくいった暁には、再び元の地位に戻していただければなー、と……」
「ふざけんな、一国の水をどうにかするとかどんだけポイント食うと思ってんだ！　大体、お前があのおっさんを落とすのにモタモタしてたのが悪いんだぞ！　エロい体しか取り柄がないんだから最低限の仕事はしろよ！」
その言葉にスノウの眉がきりきりと吊り上がり……！
「言わせておけばこの男、誰のせいで降格させられたと思っている！」
「おっ？　何だコラ？　やんのかコラァ！　俺はつえーぞ!?」

取っ組み合いの喧嘩を始めた俺達に、ティリスが呆れたように息を吐く。と、俺と手四つの体勢で掴み合っていたスノウが、ハッと何かに気付いたように。

「そうか！　ティリス様、よく考えてみれば雨を降らせるアーティファクトは、使用は可能な状態です！　陛下が見つからない今、ここはティリス様に一肌脱いで頂いて……！」

「しかし、困りましたね……。そうなると水をどうやって確保するのか……」

スノウの言葉をガン無視し、ティリスが先ほどと同じセリフを繰り返す。

俺はスノウと組み合ったまま、小さな声でヒソヒソと。

（おいスノウ、俺がティリスを捕まえるからさ、お前は人を集めて来いよ。これはティリスへの裏切りじゃない、国のためになる事だ。中庭に民衆を集めたら、今からティリスがアーティファクトを起動するって宣伝しちまえば）

（なるほど、後に引けないようにしてしまうのか！　そうだな、これは裏切りではなく国を救うための行いだ。最後にはきっと、ティリス様も分かってくれる……）

「良い案が浮かびました！」

俺達の囁きを遮るように、ティリスが上擦った声を上げる。

どことなく焦っているように見えるのは気のせいだろうか。

「騎士スノウ、あなたに任務を与えます」

俺の視線に気付いたティリスはキリッと顔を引き締めると、跪き、命令を待つスノウに向けて。

「砂の王が縄張りとしている不毛の地、テザン砂漠。この砂漠の中央に、なぜか木々が生い茂っている事は知っていますね？　そして、その木になっている

ただただ生い茂っている事は知っていますわ。　そして、その木になっている実にはどのような効果があるのかも」
「ハッ！　水の実と呼ばれるそれは指先ほどの大きさにもかかわらず、搾（しぼ）るとプール一杯（いっぱい）分にもなる水分を含（ふく）むとか……。…………あ、あの…………ティリス様？　まさかとは思いますが……」
　青い顔で小さく震えるスノウに向けて、ティリスは真顔でキッパリ告げた。
「採ってきなさい」
「嫌（いや）ですす嫌ですす嫌ですよー！　砂の王って魔王も逃げ出す大魔獣（だいまじゅう）じゃないですか！　そんなヤツの縄張りに入るなんて自殺行為ですよ！」

泣き喚いて嫌がるロゼが、街の城門にしがみつく。
「大丈夫だロゼ、砂の王と戦うわけではないのだから！　それに、ヤツは昼しか活動しないらしいぞ？　夜のうちにちょっと行ってすぐ帰ってくるだけだから！　な？　帰ったら美味しい肉を奢ってやろう！」
「こらっ、俺だって巻き込まれたんだから諦めろ！　スノウが美味い肉を用意するなら、俺は珍しいお菓子をやるぞ！　飴ちゃん舐めた事あるか、飴ちゃん！　それに前回の任務失敗はここにいる皆の連帯責任だからな！　今更一人だけ逃がさねえぞ！」
　スノウや俺が説得するも、ロゼは城門に爪を食い込ませて離れない。
「美味しい物さえ与えとけば言うこと聞くと思わないでください！　それに任務失敗の連帯責任って言われても、あたしは何もしてないじゃないですか！　でも飴ちゃんって何ですか!?　一応どんなお菓子かだけ教えてくだ

さい！」
目尻に涙を溜めながら意外と余裕のありそうなロゼに向け、アリスが何かを取り出した。
「二人が美味を用意するなら、自分はパワーアップアイテムをくれてやろう。さあ、コレは一体何だか分かるか？」
少しだけ興味が湧いたのか、ロゼはピタリと泣き止むと。
「……何ですか？」
「コイツは乾電池っていってだな、いわば電気エネルギーの塊だ。ほら、試しに食ってみろ。もれなく電気ブレスが吐けるかも……」
「食べませんよそんな物！　明らかに食べ物に見えないじゃないですか！」
ロゼが顔を背けるが、俺とスノウは目配せすると、
「まあまあ、好き嫌いは良くないぞ。ほら、私が食べさせてやろう。コイツを食

べて強くなれば砂の王も怖くないだろう？　な、頼むロゼ、ほらあーんして……」

「くっ、こ、コイツ、俺の戦闘服の力に抵抗するとはなかなかやるな……！　だが諦めろ、お前は今日から、怪人電気キメラを名乗ってもらう……！」

「行きます行きます！　私も行きますから食べさせないで！」

――バギーに乗り込んだ俺達は、暗視機能が付いたアリスの運転の下、暗い夜道をひた走っていた。

「うっ、うっ……。帰ったら、美味しいお肉と飴ちゃん貰いますからね……。あたしは忘れませんからね……」

　メソメソするロゼの隣からは、ブツブツと小さな呟きが漏れてくる。

「許せない　許せない　私と散々親しく会話しておいて婚約者がいた

……許せない……許せない……私の[illegible]
ハーメルも、あれだけ優しくしながら妻帯者だったギルバートも、泣いて暴れる私にドレスが汚れますよと手を差し伸べてくれたくせに同性愛者だったアイザックも、あの国の男達はみんなみんな許せない……！」
俺達の騒ぎもよそに早々とバギーに乗り込んでいたグリムは、トリスでの玉砕をまだ根に持っているらしい。
勝手に好きになっておいてなんとも身勝手な話だが、この地雷女にそんな理屈は通用しないようだ。
と、そういえば。
「なあグリム、お前にちょっと聞きたいんだけど」
俺はコイツに聞いておきたい事があったのだ。
「なによ隊長、今の私は魔王軍よりやさぐれてるし、ブラッド・ザ・ヘッジホッグより尖ってるから気を付けなさい。くだらない質問をしたら呪うわよ」

「聞きたいのはその呪いの事だよ振(ふ)られ虫。……わ、悪かったよ、振られ虫は言い過ぎた！　ガン見しながら人形握(にぎ)るなよ、こえぇよ！」

そう、尋(たず)ねたいのはコイツの呪いだ。

こないだトリスに行った際、あの王子様の様子が変だった。

いや、正確には変というか、前評判とはまるで正反対の性格をしていたのが気になっていたのだ。

そして、それに関して引っかかった事がある。

「なによ、ひょっとして誰かを呪いたいの？　奇遇(きぐう)ね、ちょうど私も誰かを呪ってやりたい気分だったの。隊長、どうする？　この任務が終わったら、私と辻呪(つじのろ)いデートに行く？」

「行かねえよ、何だよ辻呪いって、お前誰かに振られるたびにその辺の人を呪ってるんじゃねえだろうな」

俺は膝を抱えてこちらを見ながら、首を傾げるグリムに向けて、
「お前さ。トリスの城の中で俺に呪いを放ったよな？　ほら、不能になる呪いってヤツ。あれってさ、呪いの対象の俺が避(よ)けた場合はどうなるの？　生け贄(にえ)に捧(ささ)げた指輪はちゃんと消え去ってたじゃん？」
「呪いは本来避けられるものじゃないんだけどね。例えば魔王軍の幹部、ハイネを呪った時も、あの女はゴーレムを盾(たて)に隠(かく)れていたわ。つまり、魔法で擬(ぎ)似(じ)的な命を吹(ふ)き込まれた存在を壁(かべ)にするならともかく、普(ふ)通(つう)は生物にぶつかって呪いが発動しない限り……」
と、俺の質問に答えていたグリムはそこまで言って言葉を止めると、徐(じょ)々(じょ)にその顔色を青くしていく。
「あの呪いどこ行った」
「遊びに出かけたんじゃないかしら」
目を逸(そ)らしたグリムの顔を引っ摑んで、俺は小指で耳打ちした。

目を逸らしたグリムの頭をわし掴むと、俺は小声で耳打ちした。
「お前はトリスの王子様の評判や噂（うわさ）は聞いてるか？」
「知らないわ。だって私、友達がロゼしかいなかったもの。噂話なんて聞かないわ」
何気無しに重い発言をするグリムに向けて。
「あのおっさん、本来ならえらく好色で美女に目がないんだと。スノウもそれを聞いて張り切ってたんだが、今回は全く相手にされなくてさ…………」
そこまで言った俺の唇（くちびる）に、グリムが小さく微笑（ほほえ）みながら、そっと人差し指を当ててくる。
「ねえ隊長。二人だけの秘密って言葉に憧（あこが）れない？」
俺はその手をはね除（の）けた。
「憧れねえよ！　おいみんな、聞いてくれ！　この女とんでもねえぞ、ヤバい事やらかしやがった！」

「隊長待って！　まだ私の呪いかは分からないじゃない！　他の理由かもしれないじゃない!!　その、たまたまあのおじさんの体調が良くなかったとか！　それか、スノウがちっとも魅力的じゃなかったとか!!」
「おいグリム、今聞き捨てならない事を言ったな！　私の魅力がどうしただと!?」
　あのおっさん、グリムの呪いにやられて不能になってやがったのか！
「さすがの俺でもドン引きだよ！　スノウの欲と業の深さにもちょこちょこ引くが、お前のはやっちゃいけない類いのヤツだろ！」
「こ、こう考えたらどうかしら！　私はスノウの貞操を守ったのよ！　そう、あのままじゃスノウが、賞味期限間近の惣菜並みに自分の体を安売りしていたわ！　女の子はね、体を大事にしなきゃいけないの！」
　苦しいいいわけを始めたグリムに、

「でもお前、俺には自分からパンツ見せてたじゃん」
「あ、あれは……！　ほら、あの時は隊長が優良物件に思えたのよ！　若いのに小隊を任されてたし！　それがまさか、お金の管理も出来なければ出世もしない、ダメ男だっただなんて……」
…………。
「大体、女の子は体を大事にしなきゃいけないって……。お前、もう女の子って年じゃ」
「偉大（いだい）なるゼナリス様、この男に災（わざわ）いを!!　自慰行為（じいこうい）が出来ない体になるがい……」
「やめろぉ！　その呪いが発動したら体で責任取らせるからな！」
慌（あわ）ててグリムを取り押さえると、隣からクスクスという笑い声が聞こえてきた。

今から砂の王の縄張りなんてとこへ行くのに、この非常事態の何がおかしいんだとそちらを見れば、ロゼが楽しげに笑っている。

「隊長。砂の王は怖いけど、こうしてみんなでわいわいするの、あたし嫌いじゃないです。なんだかピクニックみたいですね！」

無邪気(むじゃき)な言葉に毒気を抜(ぬ)かれた俺とグリムは、顔を見合わせ苦笑(くしょう)を浮かべた。

3

「ねえロゼ。さっきはピクニックに行く気分って言ってたわね。本当に？　コレを見ても、まだそんな事が言えるの!?　のんきな事を言っていたのはこの口かしら！」

[illegible]」

「痛い痛い、ごめんなひゃいごめんなひゃい！」

俺達の乗っていたバギーは、蟻地獄(ありじごく)みたいな巨大(きょだい)生物の顎(あご)に捕(つか)まっていた。

「おい、バカやってないで何とかしろよ！　このデカいのは何なんだ！」

夜の闇(やみ)をライトが照らし、グロテスクな虫の姿が映し出される。

斜(なな)めになった車体の中、俺は座席に掴(つか)まりながら、ロゼの頬(ほお)を引っ張っているグリムに呼びかけた。

「コイツはヒュージアントリオン！　テザン砂漠(さばく)に巣を作り、通りかかる生物を捕食(ほしょく)する凶悪(きょうあく)な魔獣よ！　こういうのは可憐(かれん)で儚(はかな)げなグリムさんが相手をするべき敵じゃないわ！　ていうか私、虫苦手なの！」

「いひゃい、いひゃい！」

ロゼの頬を引っ張るグリムの手に力が籠(こ)もる。

「どど、どうする六号、やるのか!?　コイツは結構な強敵なのだ！　降格されてしまった私としては、手柄は確かに欲しいのだが……！」
「俺だって手柄は欲しいが、こんなの相手にするのは嫌だよ！　……そうだ、殺虫剤か！　キサラギに強力アリキラー、ムシコロリンを送ってもらおう、それでコイツを……！」
　パニックに陥り端末を弄ろうとする俺に、ギアをカコカコと鳴らしていたアリスが呼びかける。
「こんなデケエのにどれだけの殺虫剤が必要なのか分かってんのか。お前ら、吹かすから掴まってろよ。キサラギ製の車両は高性能なんだ。こんな虫コロに負けるかよ」
　同じ機械として思うところでもあるのか、アリスがバギーのエンジンを吹かして加速させる。

高速で回転するタイヤに体を削られ、巨大生物がたまらず顎を開く。
柔らかな砂を踏みつけながらバギーが巣から脱出すると、車内に安堵の息が漏れた。
『なあアリス、大森林といい砂漠といい、この星危険な生物が多過ぎねえ？　ウチの幹部連中はこんな土地欲しがるか？　もうこんなとこ放棄して地球に帰ろうぜ』
『どんな荒れ地でも土地は土地だ。今のペースで人口が増えれば、地球は十年以内に人の住める土地が無くなるぞ。危険生物は駆除すりゃいい。荒れた土地なら改良すればいい。我々に出来ない事なんてない。キサラギの技術は凄いんだ、なんせ高性能な自分を作ったんだからな』
自らを作り上げたキサラギの技術に自信と誇りを持っているのか、日本
[illegible]る。

話で話しかけた俺にアリスが力強く断言する。
珍しく自己主張する相棒の言葉に、
『……そうか。そうだな。砂の王だか知らんが、キサラギの力の前にはただの獲物だ。それに、そいつさえくたばれば商売敵も大人しくなるんだろ？　だったら、ここで狩っちまうのも一つの手だな。そうすりゃソレを手土産に、連中に土地の一部を寄こせと迫ってもいい』
『えらいぞ六号、上から言われた命令も忘れてなかったのか。今月中にキサラギの侵略地を増やすぞ。今の自分達の土地は、あのちっぽけなアジトのみだ。アスタロト様が怒り出さないウチにノルマを果たせ』
俺とアリスはそう言って、口元にあくどい笑みを浮かべて見せた。

――地球の物より大きな月が夜の砂漠を静かに照らす。
十分な光量に照らされているおかげで、目的の木々は簡単に見つかった。

十分な光量に照らされているおかげで、目的の木は簡単に見つかった。
バギーから降りた俺達は、足下の地面を踏みしめる。
何度かバンバンと足を鳴らすが、この辺りの大地は木の根で固められているからか、まるで岩みたいに頑強だ。
「砂漠のド真ん中に本当に木が生えてるんだなあ。葉っぱは無いみたいだけど、サボテンみたいなもんなのかな？」
「この辺りには地下水が溜まってるのかもしれねえな。お前らは実の採取を進めてくれ。自分は地下をサーチしてやる」
そう言って探査を始めるアリスをよそに、俺は辺りを見回した。
「この星は動物だけじゃなく植物まで不思議だな。こんな小さな実に、本当に水が詰まってんのか？」
木になっていた実を一つ摘まみ、それをしげしげと観察する。
「その実は魔力で覆われ圧縮されているらしくてな。魔力除去の魔法をか

けて搾(しぼ)ってやれば、大量の水を得られるのだ。見える限りの実を摘んでいけば、私の降格を取り消してもらえるほどの大手柄だぞ！」

　興奮するスノウの言葉にアリスがピクリと反応した。

「出たな魔力。そのうさん臭(くさ)いオカルト語を聞く度(たび)に、自分の存在が否定されそうでイラッとすんだよ」

「このチビっ子はまだ魔法の存在を信じないの!?　そもそも私が呪いを掛(か)けるところも見てるでしょう？　代償(だいしょう)として人形が消えたり指輪が消えたりした事を説明なさいな！」

　この二人は事あるごとに魔法を巡(めぐ)って喧嘩(けんか)するな。

　アリスはめんどくさそうに顔を上げると端末をいじりだす。

　ほどなくして、その手元には地中探査用の道具が現れた。

「ほら、何も無いとこから道具が出たぞ。ちなみに魔法じゃねえからな。自分も同じ事が出来る以上、グリムの代償とやらも根拠に欠ける」
「ちょっと待って、あなた達がいつも見せているソレ、魔法じゃないの!?　大体、私が靴を履けない呪いの代償はどうやって説明するのよ！」
　科学とオカルトはよほど相性が悪いようだが、魔獣が寄ってくるかもしれないからもう少し静かにしてほしい。
「だから呪いなんてものは催眠術だって言ってんだろ。失敗した時の代償とやらも、催眠術の効果を高めるための自己暗示だな」
「なんて頑固な子供なの！　いいわ、そこまで言うのなら私の呪いを掛けてあげる！　その上で催眠術だなんて言えるのなら、言ってみればいいわ！」
　グリムが人形を握り締め、アリスをキッと睨み付けるが――

「おい六号、グリムを今すぐ拘束しろ。キサラギから靴を送って貰うから、それを無理矢理履かせてやる。いい加減車椅子での移動も面倒なんだよ。呪いや代償なんてもんは無いと証明してやる」
「よし、任せろ」
「いやあああああ！　ちょっと嘘でしょ、靴なんて履いたら私の体が爆裂四散よ!?　そんなエグイ姿見たくないでしょう!?　三日はご飯が食べられないわよ！」
　マジかよ、代償を無視すると爆発すんのか。
「自爆は悪のロマンだからな。グリムが爆発したら、立派なキサラギの構成員として認めてやろう。墓にはキサラギバッジを供えてやるよ」
「隊長、この子を止めて！　スノウ！　ロゼ！　実の採取なんかしてないで助けなさいよ！」
　俺に捕縛されたグリムが喚く中、アリスが端末をいじり始め――

と、その時だった。

「うおっ!?　じ、地震か!?」

突如起こった足下の揺れに、思わずグリムの拘束を解いてしまう。

他の連中も大地の揺れにたたらを踏んでしゃがみ込む中、一人解放されたグリムだけは、俺達と距離を取ると。

「ほらみなさい、ゼナリス様の天罰よ！　私に無礼を働くから大地を揺らして知らしめたのよ！」

ドヤ顔で胸を張りながら、アリスを指さしそんな事を……。

だがアリスはグリムも地震も無視すると、地中のサーチ作業を行い始めた。

「このチビっ子め、いくら何でも自由すぎるでしょう！　ほら、グリムお姉ちゃんごめんなさいって……」
　グリムがそこまで言いかけた、その瞬間。
　まるで大声に反応するかのように地揺れが起こり、辺りがシンと静まり返った。
「……おいお前ら、今すぐにバギーに乗れ。声を出さず、静かにだ。引き揚げるぞ」
　地中をサーチしていたアリスの言葉に、嫌な予感を覚えながらも素直に従う。
　ただ事でない雰囲気を察した皆も、声を出さずに乗車した。
　アリスは全員の乗車を確認すると、無言のままにバギーを吹かし――！

『おいアリス、もう俺この星嫌だ、帰りたい！』

『つれない事言うなよ相棒、この惑星は実に興味深いじゃないか！』

　先ほどまでとは比べようもない大きな地揺れを感じながら、バギーは一気に加速する。

「ねえ、地面が盛り上がってきたんだけど、一体どうなってるの⁉」

「自分達が今いるのは砂の王とやらの背中の上だな。この周辺をサーチしたら、辺り一面が生体反応だった」

　アリスが説明する間にも、遠ざかる木々は盛り上がり、それと共に膨大な量の砂が流れ落ちる。

　月夜の下に照らされたのは、背に木々を生やした巨大なモグラ。

体育館ほどの大きさのそれは　砂の王と呼ばれる大魔獣だった

「あたし、砂の王って初めて見ました！　大きいとは聞いてましたが、こんなにでっかいんですねえ……」

ロゼがのんきな感想を述べる中、スノウが採取した実をしげしげ眺め、

「なあ六号。という事は、この実は砂の王の……」

「水を溜めておく器官じゃねえの。それ持って来ちゃって良かったのか？」

そんな俺の疑問に答えるように、ゆっくりと時間をかけて体を起こした砂の王が、俺達の乗るバギーに振り向いた。

案外可愛い姿のそのモグラは、鼻をヒクヒクと動かすと……。

「六号、砂の王が追ってきたぞ！　どど、どうする!?　巨体の割にかなりの速さだ！　このままでは追いつかれるぞ！」

巨体に似合わない素早さで、バギー目がけて迫ってきた。

巨体に似合わない素早さで、六号目がけて迫ってきた

「アリス、もっと飛ばせねーのか⁉　キサラギの技術は凄いんだろ⁉　俺達に出来ない事はないんじゃなかったのかよ⁉」

「大丈夫だ六号、キサラギが誇るセーブとロードは最強だ。次からは上手くやる」

「それで復活可能なのはお前だけだろ！　畜生、こうなりゃヤケだ、戦うぞ！」

あの巨体ではライフルでも大した効果は見込めないだろう。

なら必殺のRバッソーで急所を切り裂いてやるしか……！

「まあ待て六号。これから自分が合図をするから全員外に飛び降りろ。そしたら一切声を出すなよ。後、何があっても身動きすんな」

妙な事を言い出したアリスはドアのロックを解除すると、急ハンドルを切

りカーブを描(えが)いた。

「出ろ!」

アリスの合図をきっかけに、車内から飛び出し砂漠(さばく)に転がる。

砂の王は俺達に襲(おそ)いかかってくるかと思いきや、カーブを描いて別方向に向かったバギーの方を追っていく。

遠ざかっていくバギーと砂の王。

それはおそらく、砂の王がバギーに追いつき攻撃(こうげき)したのだろう。

遠く彼方(かなた)から、何かが爆発する音が響(ひび)いてきた――

「――ここまで来れば、ひとまずは安心かな?」

砂の王にバギーを壊(こわ)された俺達は、徒歩で街へと向かっていた。

煌々と輝く月に照らされながら、砂に足を取られる事もなく軽快に先頭を歩くアリスが呟く。
「今のところ近くにはいないみたいだな。モグラは目が良くない分、音と振動で獲物を捕らえるからな」
「ちくしょう、砂漠を歩いて横断とか一体何の罰ゲームだよ！　バギーも壊されたし、アレにどれだけポイント使ったと思ってんだ……」
砂の王に追いかけられた地点から、既に数時間の距離を歩いていた。
「おい六号、今のポイントはどれだけある？」
「今は十ポイントしかねえよ。これでテントを送ってもらったらスッカラカンだな。先月はマイナスまで下がってたけど、コツコツ真面目に悪事を働いて、一時は結構貯めたんだけどなあ……」
「ま、真面目に働く悪事とはなんなのだ……」
[illegible]

バギー一台に掛かるポイントが三百にと
ここ最近の小競り合い、そして、トリスに向かう際に移動用にバギーを送ってもらった事で、貯まっていたポイントの大半を使ってしまった。
何かの乗り物を出して砂漠を一気に横断したいが、今のポイントではそれもままならない。
「ねえロゼ、帰ったらお肉とお菓子を奢ってもらえるのよね？　なら、私は野菜をたくさんご馳走するわ。だからオンブしてもらえないかしら。夜の砂漠の冷たい砂は、裸足の身には応えるのよ。私の愛機も部屋に置いてきちゃったし」
「グリムはどうして靴が履けなくなる呪いなんて掛けたの？　もうちょっとマシな呪いは無かったの？」
俺達の後ろではグリムがロゼにオンブをねだっている。
「それを説明するのなら、とても長い話になるわね……。そう、アレは今か

ら……年前」
「今から何年前ってところがよく聞き取れなかったんだけど……」
つい先ほど砂の王に襲われたとは思えない平和な会話に、なにやら難しい顔をしていたスノウが苦笑した。
「逃げる際に実を落とし、たった一つしか持ち帰る事が出来なかったが……」
そう言って小さな実を摘まみ上げると。
「見ろ六号。砂の王から水を得て、しかも一人も欠けずに生き残れたのだ。これは十分な戦果だな。……お前達もそう思うだろう？」
この惑星特有の大きな月の光にかざし、楽しげに笑みを浮かべた。
そんなスノウにつられるように、そして、砂の王から逃げ切れた安心感に、

いつしか皆の顔にも笑みが広がる。

地球から遠く離(はな)れた星の、夜の砂漠で――

「……そうだな！」

俺も思わず苦笑を浮かべた。

4

【砂漠横断初日】

ひ　ざ

砂漠の陽射しに照らされながら、重い足を前に進める。
「暑い！」
昨夜はちょっと良い感じの事を言っていたスノウが、何度目かになる罵声を上げた。
「うるせーぞ、暑いのは皆一緒だ！　暑いって聞くと余計暑苦しくなるだろ！」
幻想的な夜が明け、灼熱の太陽に晒される事になった俺達は、昨夜とは打って変わって険悪ムードになっていた。
「暑いのは貴様の見た目だ！　その、真っ黒な鎧を脱いだらどうだ！　見ているだけで暑苦しい！」
「コイツには体温調節機能が付いてんだよ！　砂漠の真っ只中だが、コレを着てるだけでもマシなんだ！」

俺が着ている戦闘服は、昼間の砂漠や極寒の寒冷地でも野宿が出来るという優れ物だ。

　何年もメンテナンスに出していなかったせいで内蔵クーラーの調子が悪いが、それでも他の連中よりはまだマシだろう。

「なっ……！　ズルいぞ貴様、上半身だけでもいいから鎧を寄こせ！」

「コレは俺の体に合わせて作られてんだから意味ねえよ！　それよりお前こそ、そんなに暑けりゃ裸になれよ！」

　と、テザン砂漠の真ん中で不毛な喧嘩を始めた俺達に、

「二人とも、喧嘩していると喉が渇くしお腹空きますよ！　ほら、きっともう少しですから頑張りましょうよ！」

　横断初日だというにもかかわらず、既にぐったりと動かなくなったグリムを背負い、ロゼが明るい声を上げた。

「おら、一番年下なのに大人なロゼを見習えよ！　この中でお前が一番うるさいんだぞ！」
「つい数分前までは、グリムが一番うるさかったではないか！」
邪神（じゃしん）の信徒にして半アンデッドみたいなグリムは太陽に弱いのか、強い陽射しで体を干され、早々に脱落（だつらく）した。
これ以上干（ひ）からびないようにフードを被（かぶ）せてはいるのだが、早く蘇生（そせい）させてやりたいところだ。
「まあ幸いなのは、砂漠で水に困らない事だな。自分は水を必要とはしないが、お前らは飲まないと死ぬからな。たった一つとはいえこの謎（なぞ）の実が採取出来たのは助かったな」
先頭を歩くアリスが機嫌（きげん）良さそうに言いながら、手の中の木の実を弄（もてあそ）ぶ。

スノウはそれを不思議そうに眺めると。

「アリスについての説明を聞いたが、本当にゴーレムなのだな。見ただけではとても人間と見分けが付かんぞ……」

「正確には自分はゴーレムじゃねえけどな。まあ似たようなもんだと思えばいいさ」

現在、体内地図とやらが内蔵されているというアリスに街までの道案内を任せ、さらには水の管理をしてもらっている。

こいつがいなければ砂漠の真ん中で方向もわからず、野垂れ死んでいる事だろう。

早々に干からびたのとは違(ちが)い、ちょくちょく頼(たよ)りになる相棒だ。

「水はともかくとして、何か食べる物が欲しいです……」

そうぐう　まじゅう

「……そうだな。最悪、これから遭遇した魔獣を食うしかねえな。サバイバルは戦闘員の基本中の基本だ。生きるためだ、食えないなんて許されねえ。次に出会った魔獣は食う！　いいな！」

有無を言わさぬ俺の言葉に、皆は神妙な顔で頷いた。

【砂漠横断二日目】

「無理無理無理、無理だって！　お前コレ頭付いてんじゃん！　ていうか人型は無理だってえ！」

「隊長が言ったんですよ、次に出会った魔獣は食うって！　好き嫌いしないでください、ちゃんと食べなきゃ死んじゃいますよ！」

「普段やたらと気が強いくせに、こんな時だけ情けない！　ロゼ、コイツの口を開けさせろ。俺が無理矢理食わせてやる！」

を開けさせろ！　私が無理矢理食わせてやる！」
夜の砂漠のド真ん中で、オークが鍋（なべ）で煮（に）られていた。
「オークは嫌（いや）だ！　だってこいつら、俺達と話が通じるじゃん！」
ロゼの怪力（かいりき）に抵抗（ていこう）する俺に、スノウが安心させるように笑いかけ。
「そういう事なら安心しろ。共通語で話す魔王軍所属のオークと違い、野生のオークは蛮族語（ばんぞくご）しか喋（しゃべ）れない。話は通じないから食べられるぞ」
違う、そういう意味じゃない！
「アリス助けて！　こいつらにオークを食わされる！」
「安心しろ、成分を調べたが良質なタンパク質だ。毒も無いし問題ない」
知的生命体を食えねえって言ってんだ！
「貴様はいつもの酒場でもっと凄（すご）い物を口にしていたではないか。今更（いまさら）オークごときで怯（おび）えてどうする！」

「そうですよ、隊長はあたしですら引くぐらいのあんなのをムシャムシャしてたじゃないですか！　オークなんて今更ですよ！」

えっ。

「ちょっと待てよ、俺普段何食ってたんだ？　ロゼですら引くって何だよ」

思わず尋ね返す俺の口に、スノウがオークを近づける。

「ほら、直々に食べさせてやるぞ。あーん……」

「待てよ、オークは無理だって！　ああああ、せめて頭部は止めて肩肉にしてくれえええええ！」

【砂漠横断三日目】

日中はテントを張って日陰を作ってやり過ごし、寒い夜の行軍に切り替え

た。
　そして現在、照りつける陽射しを避けていたのだが。
「おい六号、このままじゃ色々マズい。そこでお前に頼みがある」
「言ってごらん」
　クソ暑いテントの中、真面目な顔のアリスが言った。
「ちょっとスノウのパンツを下ろしてくれ」
「いきなり何を言っている！　アリス、しっかりしろ！　このメンツの中ではお前だけが頼りなのだぞ！」
　突然のアリスの発言に、
「分かったよ相棒。お前の望みを叶えてやるさ」
「叶えるな！　おい、何だその手は近付くな！　アリス、この暑さで壊れたのか⁉」

「隊長、この非常時に何しようっていうんですか！　アリスさんも悪ふざけは止めてくださいよ！」
　スノウとロゼの抗議を受けて、アリスは相も変わらず真面目な顔で。
「いいかお前ら良く聞けよ。六号は、悪行を行えばそれに応じてポイントが加算される。そして、そのポイントがあれば……」
「「あっ！」」
　そういやそうだ、なんでこんな事に気付かなかった。
　別に街での悪行に拘らなくても、ここに良いのがいるじゃないか。
　俺はスノウに向き合うと、真面目な顔でキッパリ告げた。
「暑いだろうから脱がしてやる」
「死んでしまえ」

「死んじまう」

無理矢理にでも脱がそうとする俺に、スノウが剣を抜いて身構えた。

「狭いテントの中で止めてください！　ほら、隊長もスノウさんも落ち着いて！　そういうのはいよいよ後がなくなった時にしましょうよ！」

ロゼの必死の制止により、とりあえずその場を収めるが……。

「今の状況で既に後がないと思うんだけどなぁ……。それに俺とスノウって、もう乳揉んだりパンツ下ろしたりした間柄じゃん」

「うるさい、黙れ！　大体そういう事態になったなら、生け贄選びは私だけではなくじゃんけんだ！　ロゼ、もちろんお前も入ってもらうぞ！」

「ええっ!?」

言い争う俺達を尻目に、アリスが俺においでおいでと手招きしてくる。

「……？」

わけも分からず近付く俺に、寝ている グリムのスカートへ、アリスがグッと親指を向けた。

…………。

《悪行ポイントが加算されます》

「六号、お前！　……さ、さすがの私もそれは引くぞ……！」

「た、隊長……最低です……」

「ち、ちが……！　いやだって、これはアリスが……！」

スカートをめくった俺に向け、スノウ達の冷たい視線が突き刺さった。

【砂漠横断四日目】

夜の砂漠はほとんど魔獣と遭遇しない。
食べる物に困ってきたがオークは嫌だ。
グリムのスカートめくりでさらにポイントを稼ごうとしたのだが、息が無い女性へのいたずらは悪行と言うより姑息で卑劣とカウントされたらしい。
遠い地球のアスタロト様が、どこかでこっちの様子を監視してるんじゃないだろうなと疑った。
しょうがないから起きている連中のスカートめくろう。

【砂漠横断五日目】

今日も魔獣に遭遇しなかった。
スノウが何か言いたそうな顔でこちらを見ている。

ロゼは違った目でこちらを見ている。
いや、ロゼの場合は俺だけじゃなく、動かないグリムもチラチラ見ている。
何だよ、言いたい事があるならとっとと言えよ。

しかし腹が減ってたまらない。
今ならオークも食える気がする。
以前、ポイントがマイナスになっても物資を送ってもらえた事を思い出し、試（ため）してみたが反応が無かった。
こないだはちゃんと前借り出来たのになんでだよ。
やっぱりアスタロト様の悪意を感じる。
地球に帰ったら悪行ポイント稼ぎの標的にしてやろう。

【砂漠横断六日目】

スノウが、グリムのスカートをめくらないのかと言い出した。
緊急時だから黙認すると言いながらそっとテントの外に目を逸らした。
こいつグリムを売りやがった。
寝ている人間のスカートめくり程度じゃもうポイントが増えないと伝えると、スカートぐらいなら耐えてやると言い出した。
試しにスノウのスカートをめくってみたがやっぱりポイントは増えなかった。
本人が嫌がらなければ悪行とはみなされない事を思い出し、お前スカートめくられて喜んでんのかと言ってしまい、殺し合い寸前にまで発展した。
腹が減ると心が殺伐としてきて困る。
なにせ最近ではロゼが喧嘩を止めてくれないのだ。

むしろ、俺達が喧嘩を始めると何かを期待した目で俺を見る。
というかどこかで見た記憶のある目付きだ。
そうだ、アレは確か、肉食系女子で知られる怪人クモ女さんが俺を見る目だ。
人は極限状態に置かれると生存本能が刺激され、子孫を残すため性欲が高まるとか聞いた事がある。
そうか、ロゼの目付きが危ないのはムラムラしてるからなのか、安心しろ、俺もだ。
というかテント生活辛い、個室が無いのが辛い。
試しにグリムのスカートめくってみた。
案の定ポイントは入らない。
このシステムどうなってんだろう。

というか、悪行ポイント加算の計算は感情に左右されるとか聞いた事もある。
ひょっとして今が非常事態だからダメなのか？
確か命に関わるレベルの緊急状態では、犯罪行為も犯罪では無くなるとか聞いた気がする。
そう、雪山で遭難中とかそういう類いだ。
そうか、グリムのスカートをめくる行為はもう犯罪としてカウントされないのか。
最近では俺がスカートめくっていても誰も何も言わなくなった。
スノウにいたっては時折、「どうだ？」とかポイントの増加を聞いてきやがる。
俺が言うのもなんだけど、[illegible]のか。

俺が言うのもなんだけど、お前ら本当にそれでいいのか

【砂漠横断七日目】

辺りが段々暗くなり、そろそろ行軍の時間が迫ってきた。

そして俺達もいい加減限界が近付いてきている。

一人元気なアリスいわく、もう後何日もすれば街に着くらしい。

だが、そうは言ってもそろそろ無理だ。

お腹空いた、何か食いたい、キンキンに冷えたビールを飲みたい、プライベートな空間が欲しい、五分でいいから一人になりたい。

そんな事を考えながら歩いていたら、ロゼが自分の尻尾を齧っていた。

腹が減った子供が指をしゃぶるみたいなもので、ちょっとだけ空腹が紛らわせるのだろう。

わせるのだという

コイツの貧乏な過去を思いちょっとだけ切なくなったが、そのトカゲみたいな尻尾ってちょん切ったら生えてこないのかと聞いたら、真剣な顔で悩み出した。

というか、俺は体温調節が可能な戦闘服があるからいい。

ロゼも本人いわく、熱や寒さには強いそうだ。

アリスはもちろん大丈夫。

既に手遅れなのが一人いるが、そちらに関してはアリスが防腐剤をシュッてしてたから大丈夫だと思いたい。

となるとやはり、問題はスノウ一人となる。

俺は、ヤバい目をしたスノウに向けて、意を決して口を開いた――

5

「緊急事態だ、お前を剥く」
「いいだろう。そろそろ私も限界だ、掛かってこい」
　コイツも極限状態なのだろう、据わった目で剣を抜き、隙の無い構えを取った。
　空腹と引き替えに五感が冴え渡っているのか、いつになく強敵のオーラを発している。
「いいかスノウ、よーく聞け。このままじゃ皆で共倒れだ。ここでちょっと我慢して俺に色々いたずらされれば、手に入れた悪行ポイントでお腹も膨れてお前は幸せ、俺も色んな意味でとても幸せ。どうだ、誰もが幸せになれるとい

う、互いに悪くない取引だと思うんだが」

「極限状態の私の頭でも、さすがに騙されている事ぐらいは分かる」

　口ではそう言いながらも、スノウの顔にはどことなく葛藤の表情が見える。

「お前だって死にたくないだろ？　お腹いっぱいご飯が食べたいとは思わないか？」

　俺が囁く甘言に、だが反応したのはロゼだった。

「食べたいです！」

「今はお前には言ってない。……どうだスノウ、今ならもれなく、食べ物だけじゃ無く珍しいアイテムも付けてやる。ほら、こないだ言ってたろ？　魔道具を横流し出来る場所があるって。金に困ってるんだろう？　ちょっと我慢するだけで、剣のローンが払えるんだぞ？」

「あううう……」
　スノウが激しく葛藤する中、ショットガンの中に入った砂を小まめに取り除きながらアリスが言った。
「今更何を悩むんだ、お前さんはエンゲルっておっさんには体を売る気満々だったじゃねえか」
「あの時は、富裕国の全財産という餌に目が眩み、どうかしていたのだ！　しかもあの場合なら何かあった際にちゃんと責任を取ってもらえる。だがこの状況は……」
　スノウは何か言いたそうな顔でチラリと見てくる。
「俺、責任取れって言葉が嫌い」
「人がせっかく説得してるのにこのクソ野郎」

アリスの辛辣な言葉を聞きながら、俺は改めてスノウに身構えると——
とうとう限界を超えたのか、スノウが突然ぶっ倒れた。
「お、おいマジかよ！　グリムだけでもお荷物なのに、ここでお前にまで倒れられたら運んでいくのも厳しいぞ！」
「うう……。も、もう……無理だ……」
劣悪な環境での睡眠不足と空腹で、もはや立つ力も残っていないらしい。
「おい六号、今がチャンスだ。意識があるウチに襲っとけ襲っとけ」
「い、いやだって、それはさすがにマズいんじゃあ……」
今しがた襲おうとしていたクセに何言ってんだと言われそうだが、弱って動けなくなった女を襲うのは越えてはいけない一線な気がする。

と、その時だった。
「隊長、あたし……。もう我慢出来ません……」
砂漠の熱に浮かされているのか、赤い顔をしたロゼが息を荒げて呟いた。
「ロ、ロゼ？　待て、お前の番はまだ早い。こういうのはエロ担当で、性格的にもあまり酷い目に遭わせても良心が痛まない、スノウを先に……」
予想外のロゼの言葉に、本来なら喜ぶべきとこなのに戸惑ってしまう。
これが、グリムやスノウが言ったのであれば動じなかったのだが……。
「でも、これ以上は……！」
何かに耐えるような切なそうなロゼの表情に、俺の理性は旅に出た。
そうだ、今は互いに極限状態。
さっきから興味深そうにアリスが見てるが、ちょっとだけテントから出てもらおう。

「分かった、悪かったな恥をかかせて。いきなりの事で取り乱した」
「恥をかかせるだなんてそんな……。あたしも、コレは越えちゃいけない一線だっていうのは十分に理解してます。でも……！」
　そうか。
　そうだな……。
　俺達は同じ小隊の仲間だった。
　そこに男女の関係なんてなく、命を預けあった仲間なのだ。
　この線を越えてしまえば今後の任務に支障をきたす。
　きっと最初は顔を合わせる度（たび）に気まずい思いもするだろう。
　だが……！
「ロゼ、今は非常事態だ、気に病（や）むな。それに言ってみればこれは本能だ。極限状態において、別におかしな事ではないんだよ」

そう、これは死に際に性欲が高まる生存本能。
徹夜明けは妙にアレが元気になるのと同じ現象だ。
俺の言葉を聞いたロゼは、自分に言い聞かせるように、そして納得させるように復唱する。
「本能……。非常事態で、別におかしな事じゃない……」
「そうだ、人間の三大欲求の一つなんだ！　我慢出来なくても罪じゃない！」
俺がキッパリと言い切ると、何か吹っ切れたような笑みを浮かべ。
「はい、あたし何だかスッキリしました！　こんな状況ですし、しょうがないですよね！」
「ああ、しょうがない！　一つ問題があるとすれば、互いに合意の上でってと

こだな」
　そう、合意では悪行ポイントが発生しない。
「？　合意の上だと何かマズいんですか？」
「い、いや、ストレートに言われると何もマズくない気もしてきたが……。まあ、そこまで求められると正直なところ嬉しいけどさあ。お前って大人しい顔して肉食系だったんだなぁ」
　俺の呟きを受け、ロゼの顔が赤くなる。
「に、肉食系は嫌いですか？」
「いや、俺はむしろバッチこいだ。とはいえ皆を助けるためだ、素直にお前に頂かれるわけにはいかない。そう、必然性ってやつが重要だ」
　多少なりとも嫌がる素振りを見せてもらわないと、悪行ポイントが発生しない。

その言葉にロゼはこくりと頷くと、
「はい、自然の摂理というヤツですね。大丈夫です、その方があたしも罪悪感が少なくて済みますから。隊長も本気で抵抗してくださいね」
「罪悪感って……。え、何？　俺が襲われる側って事？　いや、そういうのも嫌いじゃ無いんだけどさ、むしろ大好物ではあるんだけど……」
いつになくグイグイくるロゼに俺の方が戸惑ってしまう。
いや、年下のロゼにここまで言わせたんだ、ここで尻込みしてどうするんだ。
「それに隊長とは、一度全力でやってみたかったんです。こんな時じゃないとお互い本気になれないと思いますし、遠慮しないでください！」
「全力でいいのか!?　俺は優しくしようと思ってたんだが、まあお前がそう

いうのなら……」

俺の溢れんばかりの欲望をこんな少女に全力でぶつけるとか不安になるが……。

だが俺も男だ、ここまで言ってくれているロゼの覚悟に応えよう。

「分かった、それじゃあせめて、濡れタオルで体を拭かせてくれ」

せめてものエチケットだ。

「ごめんなさい隊長、あたし、もう我慢出来ません……！　それに、隊長はそのままでいいですよ？　その……。前々から思っていたんですが、隊長って、とてもいい匂いがしますから……」

「い、いい匂いってお前、今日は本当にグイグイくるな！　それでいいのなら俺は構わないけど、ちょっとマニアック過ぎないか!?」

こんな年下の少女の発言に、一々頬が熱くなり、心臓の鼓動が激しくな

こんな年下の少女の発言に二人顔が熱くなり、心臓の鼓動が激しくなる。
まあいい、ここまで来たら後はやるだけだ。
俺は面白そうに眺めていたアリスに、気を利かせてくれとばかりに視線を送ると……。
「ロゼと六号に聞きたいんだが、今から何をするつもりなんだ？」
「襲うんだよ、食うんだよ！」
「そうです、隊長を食べるんです！」
似た事を口走り、互いに顔が赤くなる。
アリスはそんな俺達に。
「お前ら多分、会話が嚙み合ってるようで嚙み合ってないぞ」
やっぱり面白い物を見るような視線で言ってきた。
「今からロゼとエロい事をするんだろ？」

「今から隊長と殴り合うんですよね？」

……。

「お前は何を言っているんだ、殴り合いって何なんだ。いきなり上級者プレイかよ」

「隊長こそ何を言ってるんですか、自然界の生存競争にのっとって、負けた方を食べるんですよ」

……。

「食べるって、性的な意味でだろ？」

「食欲的な意味ですよ？」

……。

「ふざけんな、その発言はシャレにならねえぞ！　今までぶっ飛んだ怪人に出会ってきたけどさすがの俺もドン引きだわ！」

「何ですかいきなり、隊長が言ったんじゃないですか、三大欲求の一つなんだから我慢出来なくても仕方ないって！」
「言ったけど！　それは確かに言ったけど!!」
　そういう意味で言ったんじゃない、それも三大欲求の一つだけど、そうじゃない！
　既に我慢の限界なのか、ロゼの目の色が本気でヤバい。
「隊長、今は非常事態だから気に病んでる場合じゃないです」
「確かにそれも言ったけどそうじゃない！　あと何日かすれば街に着くんだ、もうちょっとだけの我慢だぞ！」
　この惑星の連中は、知的生命体のオークも食える。

つまりそれが意味する事は……。

ロゼが顔を赤らめながら、モジモジして言ってくる。

「あたし、もうこれ以上我慢出来ません……。隊長が、肉食系は嫌いじゃないって言ってくれて嬉しかったです……」

「言葉って難しいな、これが文化の違いってヤツか！」

俺が知ってる肉食系女子とは意味が違う！

出来るだけロゼを刺激しないよう、テントの入り口へ後ずさる。

そんな俺に、ロゼが捕食者の目を向けながら。

「隊長って、とてもいい匂いがします……」

「シチュエーションって大事だな、さっきと同じセリフなのに、今は別の意味で動悸が収まらねえよ！」

俺の言葉に頬をちょっぴり赤らめながら、

「隊長、吊り橋効果って知ってますか？　それって恋ってやつかもしれませんね……」
「そうだな、このドキドキは恋かもしれないな！　よしいいぞ、掛かってこい！　俺ももう吹っ切れた、返り討ちにしてやる！」
　悪の組織の戦闘員が、こんなチビっ子にビビってたまるか！
「お爺ちゃんが言ってました！　人は恋をすると、好きな相手と一つになりたいと思うものだ、って……」
「爺さんの言ってる事は正しいが、お前の解釈は間違ってる！」
　ツッコみながら身構える俺に向け。
「それじゃあ、後は若い二人でごゆっくり」
　そう言ってテントを出て行くアリスの後ろ姿を見送ると——

「この戦いは、きっと私達が生まれる前から決められていた運命（さだめ）……。グレイス王国遊撃（ゆうげき）隊所属、戦闘キメラのロゼ！　参ります！」

「秘密結社キサラギ社員、戦闘員六号だ！　もうお前でポイント稼（かせ）いでやるよ！」

　遠い星の砂漠のテントで、熱い夜が始まった――！

《悪行ポイントが大量に加算されます》

「――おっ。六号、喜べ。見えてきたぞ」

「……………………」

　アリスの嬉しそうな呼びかけに、俺は答える事なく息を吐（は）く。

行く[illegible]。

新しく送ってもらったバギーの助手席で

『なあアリス。俺もう地球に帰りたい』

『何言ってんだ、昨夜はお楽しみだったじゃねえか。おかげで新品のバギーが手に入ったんだ、そこは喜んでおけよ』

……………………。

『お楽しみ!?　お楽しみってか！　アホか、最後の一線も越えてねーし、せいぜいセクハラ止まりだわ！』

『それにしては随分稼いだじゃねえか。よくやった。これからは定期的にロゼとやり合ってくれ』

　昨夜は完全におかしくなったロゼと戦い、合間に色々やって大量のポイントを得た。

　戦闘中に得たポイントで隙を見て食べ物を送ってもらい、それを餌にしてコビの無力化に成功したが　。

『サの第一作は成功したか……
『戦闘キメラって恐(おそ)ろしいな。こいつ、本気になった俺と渡(わた)り合ったぞ』
『それはなかなか興味深い。ますますこの星の古代遺跡(いせき)とやらの調査を進めないといけなくなったな』
後部座席を振(ふ)り返ると、白目を剝(む)いた三人がぐったりしていた。
なんかもう、既に色気もクソも見当たらない。
『しかし、ティリスからの依頼(いらい)は成功とは言い難(がた)いな。手に入れた謎(なぞ)の実も途中(とちゅう)でかなりの水を使っちまったし。それにこの実はキサラギに送って研究したい。こいつの異常な吸水性は応用出来れば役立ちそうだ』
『そういえば任務の事を忘れてたなあ……』
と、俺がこれからの事を考えてウンザリしてると、やがてグレイスの街が見えてきた。
しかし何だか様子がおかしい。

まるで、以前魔王軍が攻めてきた時のような――

6

「トリスと魔王軍が手を組み、侵攻の動きを見せています」

街に帰ってくるなりティリスの下へ通された俺とアリスは、開口一番に告げられた。

俺達が砂漠で遭難している間に、連中は戦争準備を終えたらしい。

「なるほど、俺の力を借りたいってわけだな？　戦うのは戦闘員である俺の仕事だ。でも、この六号さんの腕は安くないぞ？」

「トリスが敵に回ったのは、六号様が原因なのを忘れていませんか？」

ジト目のティリスが言ってくるが。
「俺は過去を振り返らない男なんだ。昔の事なんて覚えてないさ」
「すげえな六号、それって先週ぐらいの出来事だぞ」
アリスにツッコまれるも聞き流す俺に、ティリスは困ったように息を吐く。
「こうなってしまった以上は仕方ありません。ですが、六号様には責任を取っていただきます」
「俺、責任取れって言葉嫌い」
「本当に清々しいまでのクソ野郎だな。話が進まないからこれ以上混ぜっ返すなよ」
ティリスはこめかみをひくつかせながらも、忍耐強く言葉を続けた。
「現在、キサラギ社からの派遣戦闘員のおかげで、戦力的には魔王軍に劣っ

てはおりません。ですがトリスを敵に回した以上、長期化すれば敗北は必至です。なにせ、水の問題がありますからね……」
「だからティリスが民衆の前で」
「農業に必要なだけの水の実採取は、失敗したとの報告を聞きました！　このままでは我が国の危機です！　私達は全力でお父様の捜索を行います、六号様にはある任務をお願いしたいのです！」
ティリスは俺の言葉を遮ると、一枚の地図を取り出した。
「これはトリスへの護衛任務が成功していた場合、報酬としてお渡しする予定だった遺跡の地図です。聞けば、現在二人の魔王軍幹部がこの遺跡を調査中だとか……？」
そういえばうやむやになったが、ハイネとラッセルがトリスにいたのはそんな理由だったな。

「おう、何でも強力な古代兵器が眠ってるらしいな。そいつを使って砂の王を倒すとか言ってたぞ」

俺の言葉に、ティリスは一つ頷くと、

「お二人には、その遺跡へ向かっていただきたいのです」

「……つまり、連中が古代兵器を手に入れるのを阻止しろと」

まだどんな兵器なのかは分かっていないが、ハイネ達があれほど自信ありげだったのだ。

確かにこのまま敵の手に渡すのは面白くないが……。

と、その時だった。

『おい六号、この話はぜひ請けよう。でないとマズい事になる』

『お前がそこまで言うのは珍しいな。どうした？　古代兵器とやらを警戒してんのか？』
　アリスが突然日本語で話し始めた事に驚きながらも、ティリスは何も言わずに見守っている。
『トリスには謎のガラスケースがあっただろ。そして中身は空だった。そこに突如現れたのは、古代遺跡とケースに詳しい魔王軍の幹部。どうだ、ピンとこないか？』
　いつになく真剣なアリスの語り口に、俺はゴクリと唾を飲み込み。
『……つまり、古代遺跡にはあのガラスケースがたくさんあって、美少女型ホムンクルスが大量生産されている、と……？』
『違うわい。……ラッセルっていう妙に遺跡に詳しいガキは、元々あのケース

に入ってたんじゃねえかと思ってな。お前がケースを叩こうとした時もえらく怒ってたじゃねえか。大切な物を壊されそうになって慌てて止めたって感じだったろ』

　そういえばそんな事もあったっけ。

『あいつはロゼと同じく、昔作られた戦闘キメラの可能性がある。しかも過去の記憶もちゃんと覚えている状態のな。で、そいつが言うわけだ、古代兵器があれば砂の王を倒せると。……お前といい勝負をした戦闘キメラのロゼ。恐らくはそれと同じぐらいの力を持つヤツに、そんな厄介な兵器を持たせれば……』

『俺達の商売上がったりやんけ！』

　アリスの説明でようやく事態を把握した。

　キサラギの戦闘員が魔王軍と渡り合っているのは、現代兵器というアドバンテージがあるからだ。

バンテージがあるからだ
　それが向こうにもハイテク兵器が配備されれば、大変マズい事になるのは理解出来た。
　ティリスは俺の叫（さけ）びと表情で結論が出たと判断したのか、
「どんな話をしているのかは分かりませんが、どうやら決まったようですね」
「そうだな。どうやら俺達にとっても他人事（ひとごと）じゃないみたいだし。その兵器は跡形（あとかた）もなくぶっ壊してやるよ」
　俺がそう言って頷き返すと、ティリスの表情がややわらいだ。
「どうかお願いいたします。水不足が手遅（ておく）れにならない内に解決出来る事を期待していますので……」
「水の問題に関しては、ティリスの協力があればすぐにでも解決するんだけどな」
　そう、民衆の前でアレさえ唱えてくれれば……。

「もうしわけありません、私の力が及ばないばかりに……。ですが、私の魔力と魔法適性では、水の精霊を一瞬だけ呼び出すのが限界なのです。なので、残念ですが……」
「違うよ？　魔法での協力なんて期待してないよ？　ティリスが皆の前で叫んでくれればいいだけだよ？」
ティリスは俺の言葉をスルーすると、
「それでは六号様、アリス様！　古代兵器の破壊任務、ぜひとも成功させてくださいね！」
「おい、さっき俺に責任取れって言ってたじゃん。ならティリスも王族としての責任取れよ。一言叫ぶだけで解決じゃん」
と、俺が目を逸らすティリスを追及していた、その時。
「いや、破壊するのは待ってくれ。どうせならその兵器、いただいちまおう」

悪の組織のアンドロイドが、大変合理的な事を提案してきた。

7

アジトに帰ってきた俺達は、トラ男に経過を報告。

「そんなわけでトラ男さん、この国の防衛は任せました。俺達はトリスの遺跡に侵入してくるっス」

「おう、おめえらだけズリいぞ、俺もそっちの方がいいにゃあ……」

アジトに設けられた会議室という名の一室で、トラ男がつまらなそうに言ってきた。

古代遺跡に潜入し、商売敵どもが狙っている兵器を俺達がいただく。

そして、その兵器を使ってそのままトリスを占領するというのがアリスが立てた作戦だ。

今のところ、いち早く侵攻してきた魔王軍とは違い、トリスは慎重に軍を進めているらしい。

古代兵器とやらが敵の手に渡ってしまえば現状はマズくなる。

隊の連中が死にかけてなければ、今すぐにでも出発したいところだ。

と、アリスが地図を取り出すと。

「トリスの遺跡ってのはこの位置だな。遺跡の調査を行っているだろうラッセル達の後をつけ、遺跡内部を先行させる。遺跡の中には防衛装置や罠があるかもしれんし、そういった物の排除は連中にやらせよう。そして最奥にたどり着いたところを襲撃し、兵器を横取りするんだ」

「「いいなそれ」」

俺とトラ男の声が思わずハモった。
連中が戦闘や罠の解除でボロボロになりながらもゴールに着いて、目的の物を見つけてホッと油断したところを襲う。
悪の組織のお手本のような素晴らしい作戦だ。
「トラ男さん、語尾のにゃんが抜けてるっス」
「今はお前らしかいねえんだしいいじゃねえか。しかし、遺跡内部での尾行は体のデカい俺じゃ厳しそうだ。しょうがねえ、今回は留守番してるにゃん」
トラ男がそう言って尻尾を揺らす中、アリスが地図の上に石を置く。
「トラ男の仕事も楽じゃねえぞ。お前はここから侵攻してくるだろう魔王軍を食い止めることだ。ここを抜かれたら、おそらくはそれに合わせてトリス軍も一気に攻めてくる。兵器の強奪が上手くいけばそれをネタに脅しという名の交渉もできるが、失敗したらなし崩し的に二国相手の決戦だ。責任重大だが任せたぞ」

言えたな任せたぞ」
「この待ち伏せポイントは森じゃねえか。俺は密林の王者トラ男だぞ？　森での防衛戦なんて目を瞑っていても勝てるにゃん」
「トラ男さんさすがっス。にゃんにゃん言いながらもキモかっけーっス」
怪人カメレオン男とトラ男。
性癖と人格に関してはどちらもアレなのだが、森での戦闘に関してはこの二人がキサラギのツートップだ。
アリスは俺とトラ男に視線を向けると。
「よし。それじゃあもう一度トリスに行くぞ。なんせ向こうには魔王軍の幹部が滞在中だ。トリス王国内は戦争準備だなんだと混乱してるだろうが、連中としてはさっさと遺跡の調査を済ませたいだろうからな」
そう言って、拳を握って振り上げながら。

「自分達は悪の組織だ。せいぜい上手い事ヤツらを利用し、美味しいところを横取りだ！」

「「おーう！」」

威勢よく声を上げる俺達は拳を合わせた。

【中間報告】

些細な文化の違いにより、隣国と戦争状態に突入。

日本では好まれる宴会芸も、真面目な国では悪しきものとして扱われる模様。

文化の違いといえばこの星の肉食系女子は地球よりも遥かに行動的だ。

危うく食われるところだったが、場の雰囲気に流される事なく関係を持つことを回避。

おそらく自分でなかったら食われていたと思われる。

つきましては、今後遭難などの緊急時だけでも水と食料の無料転送を提案します。

命に関わる事なので検討ください。

強い相棒と賢い相棒

1

翌日。

死屍累々（ししるいるい）と化していた三人が復活したので、ティリスからの新しい任務を説明したのだが……。

「うっ……。うっ……。うえっ……。うええっ…………」

現在俺達はアリスが操る新品のバギーに乗り込み、夕暮れの荒野の中を再びトリスへ向かっていた。
車内で説明を受けたロゼが、どこか呆れたような顔で言ってくる。
「王様にあんな事しておいてまたすぐにトリスに向かうだなんて、隊長ってたまに思うんですけど結構なアホですよね」
「お前も大人しそうな顔しながらたまに結構な毒吐くよな。しかも肉食系だし」
助手席にはスノウが座り、残った俺達は後部座席だ。
こないだはバギーの速さにハイテンションだったグリムは、長期間干からびていたのが脳に悪影響でも及ぼしたのか、座席の上で膝を抱え、遠い目をしながらブツブツと何かを呟いている。

そして……。

「うっ……うっ……。うぇぇぇぇぇ……っ……。賃金が……。私の給金があ……」

「おい六号、さっきからメソメソとうっとうしいコイツをどうにかしてやってくれ」

助手席に座るスノウが、先ほどからずっと泣き続けていた。

水の実の採取任務を失敗した事で、先日の降格に続き減俸（げんぽう）を言い渡（わた）されたらしい。

「……ったく。おいスノウ、給料下げられちまったもんはしょうがねえだろ？　なあ、俺を見ろよ。俺なんて、給料は貰（もら）った週に全部使っちまうからな。それでも結構楽しく生きていけてるし、やっぱ人生金じゃないって」

「楽しくやれてるのは自分が小遣いやってるからだろ」
「お、お前、アリスのような子供に小遣いなど貰っていたのか……。人としていいのかそれで……」
　慰めてやったはずなのに、なぜか俺が責められる羽目に。
「いや、それでも今回の減俸は痛い。痛すぎる……。うう、以前魔王軍幹部のハイネに溶かされ亡くなった、氷結剣の二代目をと思っていたのに……」
　再び涙にくれるスノウに向けて、アリスが面倒くさそうに呟いた。
「仕方ねえなあ。おいスノウ、今回の任務で役に立ったら自分が小遣いを出してやる。更に、遺跡に眠るある物を手に入れられたなら給料三ヶ月分のボーナスだ。それでどうだ？」
「アリス様あああああああ！」
　こいつの扱いが分かってきた気がする。

運転中にもかかわらず縋り付くスノウをアリスは迷惑そうに押しのけながら、
「今回は潜入が目的だからな。遺跡ではいつもの短気ぶりを見せるなよ」
「分かりましたアリス様！　このスノウ、必ずやお役に立ってみせますとも！」
　ついさっきまで俺に人としてそれでいいのかと蔑(さげす)んでいたスノウは、コロッと手のひらをひっくり返した。
「なあ、お前ってばどれだけ業(ごう)が深い女なんだ？　前世でどんな悪い事をしたらそんな道を歩めるんだ？　どんな人生を送ればお前みたいになれるんだよ？」
「うるさいぞ、アリス様に小遣いを貰っている身のお前が言うな。お金という物は何よりも大切なんだ。私は金のためなら同僚(どうりょう)だろうが知り合いだろうが、それこそ顔も知らない親だって切り捨ててみせる」

だ。それなら顔も知らない親だって切り捨ててみせる」
「最低な発言の最中に口を挟んですまんが、自分の事をアリス様と呼ぶのはやめろ」
　この強欲女は俺なんかよりよほどキサラギに向いてるんじゃないだろうか。
　これ以上は関わらないでおこうと、俺は隣で干し肉を齧っている肉食系キメラに視線を向ける。
「ところでロゼ。お前、本当に砂漠での事を覚えてないのか？」
「隊長、またその話ですか？　何度も言いますが覚えてませんよ。お腹が空いて気を失いそうになって、気が付いたらお城のベッドで寝てましたから。っていうか、私が隊長に襲いかかるわけがないじゃないですか、さすがに食べるのはオーク止まりですよ」
　そう、コイツは俺に襲いかかってきた事を覚えていないと言い出したのだ。

俺を物理的に捕食しようとした事を謝れと、目が覚めたコイツに説教をかましたのだが……。

「っていうか隊長の言う事が本当なら、あたし色々されたって事になるんですが。一体何されたんですか？」

「…………覚えてないのならそれでいい。まあ、ちょっとだけ役得だったな」

「隊長、あたし何されたんですか!?　怒りませんから言ってくださいよ！　場合によっては責任取ってください！」

ロゼが俺の肩を両手で摑み、ユサユサと揺さぶりながら、

「俺、責任取ってって言葉が」

「嫌いなんですね、最低です！　自分でもよく分かんないんですけど、なぜだかそれだけ記憶にあります！」

余計な事だけ覚えていやがる。

『なあアリス、コイツ本当に大丈夫なのか？　俺、任務中に齧られるとか嫌だぞ』
『検査の結果は何ともなかったな。キメラなんていう謎の生き物だし、人と違うから何とも言えんが。まあ空腹にさせなければ大丈夫だろ、ちゃんと餌付けしておけよ』
　アリスは気楽に言ってくれるが、食われかけた身としては気が気でない。
と、日本語で会話を始めた俺とアリスに、スノウが顔を寄せてきた。
「……前々から思っていたが、お前達がその母国語で会話するのは怪しげな事を企んでいる時なのだろう？　なあ六号、私はこう見えて頭の固い騎士連中とは違い、清濁併せ呑む事が出来る女だ。だから、お前達が何か企んでいてもティリス様を裏切る行為でさえなければ協力出来るぞ？」
　コイツ、いきなり何言い出すんだと俺が訝しんでいると、スノウは何を勘

違いしたのか頭を振り。
「ああ、みなまで言うな！　騎士としてそれでいいのか、それでも元近衛騎士団の隊長なのか。民に尊敬されている女騎士スノウが、そんな事でいいのかとの思いはあるだろう」
「ないよ」
　思わずツッコむ俺にもめげず、スノウはオーバーアクションで拳を握り。
「だがしかし、私は真にこの国を愛する者！　グレイス王国を繁栄させるためであれば、他国がどうなってもいいし悪事にだって手を染められる。だから六号、アリス、言ってくれ。お前達は今から向かう遺跡で調査をするとか言っていたが、一体何を企んでいるんだ？　ほら、私にも一枚噛ませろ。なに、それなりの分け前を寄こせなどとは言わない、ほんのちょっとだけ甘い汁を吸わせてもらえればそれでいい」
完全に目の色を欲望の色に変えながら、何か勘違いしているスノウが笑み

完全に目の色を欲望色に変えながら、何か勘違いしているスノウが[illegible]た笑みを浮かべ。
「トリスの遺跡には一体何が眠っているのだ？　ある物を手に入れられたらボーナスを出すと言っていたが、そのある物とは何だ？　それが財宝なら、お前達がその一部を経費として接収する事にも目を瞑らなくはないぞ？」
　この女、俺達が狙っているのがお宝だと思って、ティリスに全額渡さずちょろまかそうと持ちかけてやがるのか。
『なあアリス、コイツもキサラギに勧誘するか？　悪の組織の戦闘員の素質はあると思うんだが』
『スノウからは悪というより、お前に通じる姑息な三下臭がするぞ。欲をかいて失敗し、どんどん堕ちていくタイプだな』
　再び日本語で会話を始めた俺達に、また何を勘違いしたのかスノウはにこにこと笑みを浮かべている。

魔王軍が城に襲撃してきた際、命懸けで敵と戦い、ロゼやグリムのために俺に頭を下げてきた、誇り高くも仲間想いだった女騎士はどこに行ったんだろう。

口づけした後照れたように笑い、俺との付き合いを前向きに考えるだのと言っていた、年相応の反応を見せた美女は……。

「どうだ、決まったか？　大丈夫、出所不明の宝物を捌ける場所なら私にちょっとした伝手があるのだ。スラム街にそういった物を扱う店があってな。へ、へへ……、どうだ、互いに悪くない話じゃないか……？」

俺は黒い笑みを浮かべる女を眺めながら、あの時のスノウは死んだのだと諦めた。

「一応言っとくけど、遺跡に眠ってるのはお宝じゃないぞ。なんかよく分からん兵器だそうだ」

「ふふ、そんなに警戒する事はないではないか。六号、私とお前の仲だろう？　口づけまで交わした間柄なのだ、もっと信用してくれてもいいんだぞ？」

自分を信用しろと言いながら、俺が本当の事を言っているのにちっとも信じようとしないスノウが囁いてくる。

……こいつもなかなか面倒くせえな！

2

それからどれだけの時間が経ったのだろう。

すっかり日が暮れた夜の道を、砂漠で蟻地獄みたいな魔獣に襲撃を受け

た事を教訓に、アリスがバギーの灯りを消して走行中だ。
　暗視機能付きのアンドロイドはこういう時は大変便利だ。
　と、暗闇を見つめながら運転していたアリスが、ふと目を細めて呟いた。
「そろそろ遺跡とやらが近いはずなんだが、灯りが見えるな。あれは商売敵の連中が野営でもしてるのか」
　アリスの言葉にそちらを見れば、小さな灯りが遠くに見える。
　徐々に速度を落としながら近付くと、やがてその灯りに照らされて、巨大な建物が浮かび上がった――
「……デケエな」
　サイズは東京ドームほどか。
　この世界の文化と比べると、浮いた形の建造物だ。

思わず声が漏れた俺に、アリスが感心したように

「こりゃあ古代文明とやらもバカに出来ないかもなあ。おい六号、これほどの建造物を建てられる文明だ。中に残されている古代兵器も案外期待出来るかもしれんぞ」

「そんで、その古代兵器が暴走して、手に入れようとした俺達に牙(きば)を剥(む)くんだろ？　俺知ってるんだ、そういうのたくさん見たもん」

　連中に見つからないようその場にバギーを停車させた俺達は、今後の動きを相談する事にした。

「できれば夜のうちに遺跡の調査を終えたいわね。でないと私の持つ強大な力の恩恵(おんけい)はあまり期待できないわよ？」

　日が落ちた事で完全に復活したのか、夜行性のグリムがテンション高く言ってくる。

「アリスみたいに否定するわけじゃないけど、最近お前のオカルト能力が役に立った記憶がないんだけど。お前の活躍の場はちゃんとあるのか？」
「ま、待ちなさいよ！　大司教のグリムさんよ？　ピンチの時には頼りなさいよ！」
　ここのところ完全なお荷物と化していたグリムだが、ちょっとぐらい良いところを見せてほしいものだ。
　と、遠く見える野営の灯りを見ていたスノウが口を開いた。
「よし、それではこれからの行動だが……。連中もまさか、私達がトリスから逃げ帰った矢先に再び舞い戻ってきているとは思いもしないだろう。そこで、だ。今から少々卑怯な作戦を提案する」
　スノウは、言いながら黒い笑みを浮かべると。
「連中はおそらく油断している事だろう。なにせここはトリス王国内。警戒

が必要なのは知性のない魔獣くらいなものだ。そこで、遺跡の調査ではなく、いっそ連中を夜闇に乗じて……！」

「スノウさん、ここんとこ隊長に毒され過ぎていませんか？」

「ねえスノウ、あなたは私やロゼとは違ってちゃんとした騎士でしょう？　いくら相手が敵とは言っても、寝込みを襲うのはどうなのかしら……」

　そんな自信満々の提案をロゼとグリムに否定され、スノウが闇の中で小さく震えた。

「し、仕方がないだろう、相手は魔王軍の幹部が二人だぞ!?　なあ六号！　アリス！　お前達なら分かってくれるだろう？　この作戦が有効な事を！　ほら、お前達は無力な補給部隊を襲ったり、ダスターの塔をめちゃくちゃな方法で攻略したりと、どちらかといえば私側のノリだろう？　な？　私の案に賛成だよな!?」

　味方を求めるように必死に呼びかけてくるスノウだが。

「おいスノウ、俺を誰(だれ)だと思ってるんだ？　キサラギの戦闘員がそんなしょっぱい事出来るかよ」
「さすがだ六号、よく言った。それでこそキサラギの戦闘員だ」
　俺達のまさかの裏切りに、スノウが目を見開いて驚(おどろ)いた。
「ま、待て！　私は、ここ最近お前達と共に行動していて趣向(しゅこう)を理解し、それに合わせてだな……！」
　必死になって言い繕(つくろ)うスノウに向けて、俺達はやれやれと首を振(ふ)り、
「聞いたかアリス、俺達に合わせたんだってよ。まったく、キサラギもずいぶんと見くびられたもんだぜ」
「まったくだ。おい六号、ここはズバッと言ってやれ」
　散々な言われように徐々に涙目(なみだめ)になっていくスノウに向けて。

「今夜はここで朝まで休憩を取り、連中の後を尾行する。道中の罠や警備の類（たぐ）いはヤツらに倒（たお）してもらうんだ。そして疲弊（ひへい）しながらもゴールにたどり着き、喜んで油断しているところを襲撃する。これだけのお膳立（ぜんだ）てがされてるんだ。夜襲だけなんてしょっぱい作戦で済ませられるか」
「さすがだ六号、よく言った。それでこそキサラギの戦闘員だ」
　俺とアリスは頷（うなず）きあうと、泣きながら暴れ出したスノウを放置し寝（ね）る事にした。

3

　翌朝。

「おい六号、いつまで寝ている！　起きろ！　連中の姿が見えないぞ、既に遺跡に入ったみたいだ！」
　車内で眠っていた俺は、スノウの罵声で目が覚めた。
「なんだよー、朝っぱらから大声出すなよー……。ワンテンポ遅らせて後を追った方が、尾行に気付かれにくいってば……」
「いいから起きろ！　遺跡内の財宝を先に奪われたらどうする！」
　俺達が探しているのは財宝なんかじゃないと言っているのに、コイツちっとも聞きやしねえ。
　朝からテンションの高いスノウに急かされ、俺達は朝食を手早く済ませ、ハイネ達の後を追う事にした。
　本来なら封印されているはずの遺跡の扉は、ラッセル達が開けたのか、開きっぱなしになっている。

入り口からそっと中を見回すと、厚く積もった床(ゆか)の埃(ほこり)が、長い間この遺跡が封印されていた事を教えてくれた。

「見ろよアリス。ずっとファンタジーだったくせに、ここだけSFって感じだぜ」

そう、遺跡(いせき)の内部には未(いま)だあちこちに灯りが灯(とも)り、謎(なぞ)の素材で出来た壁(かべ)や通路がサイバーパンクな雰囲気(ふんいき)を醸(かも)し出していた。

「やはりこの星は文明レベルにズレがあるな。過去に発展した文明があり、一度崩壊(ほうかい)したと考えるのがしっくりきそうだ。そもそも……」

そこまで言ったアリスが何気なくロゼを見るので、俺も同じく視線を合わせる。

「な、何ですか？　どうしてあたしを見るんですか!?」

なるほど
「コイツ自体があり得ない生き物だもんなあ」
「そういうこった、この星の生態系は色々おかしいとは思うがロゼに関しては極めつけだ」
「何の事を話しているのか知りませんが、二人して失礼ですよ⁉」
騒ぐロゼに向け、シーッと人差し指を立てる。
そして身を屈めると、その場に残されていた足跡を顎で指した。
「見ろ、厚く積もった埃で連中を尾行するのは簡単そうだ。そこで……。おい、スノウ」
「む？　なんだ、どうした。私に用か？」
俺に呼ばれて近付いてきたスノウに向けて、
「脱げ」

「まだ砂漠での遭難気分が抜けていないのだな。よし、ハイネの前にお前を斬(き)ってやる」
　スノウが端的(たんてき)な一言であっという間に沸点(ふってん)に達した。
「そのガチャガチャうるさい鎧(よろい)を脱げと言ったんだ。お前尾行する気あんのかよ」
「うっ……。し、しょうがない、ちょっと待ってろ……」
　遺跡の隅(すみ)で鎧を脱ぎだしたスノウをよそに、日が昇(のぼ)っているためか、うつらうつらしているグリムに近付くと、
「よし、お前はそれから降りろ」
「ちょっと隊長何言ってるの!?　かよわい私の足裏を埃まみれにするつもり!?」
　グリムは抗議(こうぎ)のつもりなのか、足の指先をぴこぴこさせてジワジワと車椅子(くるまいす)をバックさせる。

「車椅子で遺跡探索とか正気の沙汰じゃねえだろ。階段とかあったらどうするつもりだ、とっとと降りろ！」
「あああ！　砂漠で足裏を火傷してから、もうこの子からは絶対降りないって決めたのに！」
駄々を捏ねるグリムを無理矢理降ろし、自分の足で歩かせる。
アリスはそんな俺達に眉根を寄せて。
「おいバカども静かにしろ、見つかったらどうすんだ。準備が出来たら、連中がゴールに着くまでに追いつくぞ。……ロゼ、どうした？」
と、アリスの言葉にそちらを向くと、ロゼが遺跡内部をキョロキョロしながらしきりに首を傾げていた。

「いえ、何でもないです……。ただ、私が見つかったのとは別の遺跡のはずなのに、壁の形や模様なんかが、どことなく見覚えがあるような……」

この遺跡はつい最近まで封印が解かれる事はなかったはず。

しかし本人がここの外壁に見覚えがあるという事は、やはりロゼは古代文明の産物だと考えた方が良さそうだ……。

と、その時。

古代文明の遺産というロマン溢れる言葉に浸っていると、スノウの歯ぎしりが聞こえてくる。

「くっ……！　は、外れない……！」

「スノウさん、何やってんですか！　照明剝がしちゃダメですよ！」

金になると判断したのか、スノウが外壁に埋め込まれた灯りを剝がそう

としていた。
　あの女は一体どこまで堕ちれば気が済むのだろう。
「……おいアリス、アイツはもう置いてった方がいいんじゃないのか？」
「……役に立ったらボーナス出すと言っちまったしなあ……」

4

　遺跡の内部は基本的に一本道だった。
　途中小さな部屋がいくつもあるが、通りかかった部屋の中には何かの残骸が転がっている。
『おいアリス、これってどう見てもロボットだよな』
『えらく経年劣化が激しいが、まあロボットだなあ』
　それは警備用のロボットだったのだろう。

それは警備用のロボットだったのだろう

まるで道しるべのように奥へと続く残骸に、面白いように探索が……。

「待て六号、こいつなんかは持ち帰ればそれなりに……！」

「いいから行くぞ、追いつけねえだろ！　そんなもんは全て解決してから改めて取りに来い！」

進むことはなく、欲を出したスノウのおかげで足止めされていた。

転がっている残骸に何らかの価値を見出したのだろう。

「おいアリス、お前からも言ってやれ！　ボーナスをやらねえぞと脅してやれば……」

「興味深いな、こいつらの動力源はどうなって……。ん、どうした六号。口を開けてるとマヌケに見えるぞ」

……お前もかよ。

見ればアリスまでもが残骸に興味を示し、あちこちいじり回していた。

と、ロゼが動かなくなったロボットの残骸のそばで、しきりに首を傾げている。
「どうした、お前までそいつが気になるのか？」
「……いえ、そういうわけではないんですけど。あたし、この子達と遊んだ事があるような……」
ロゼが意味深な事を呟(つぶや)きながら、ロボットの胸に手を置いた、その時だった。
薄暗(うすぐら)い前方から誰かの声らしきものが聞こえ、カッと赤い光が瞬(またた)いた。
俺達は顔を見合わせ頷き合うと、音を立てないように慎重(しんちょう)に歩を進め……。
やがて進んだその先には。

残骸と化した警備用ロボットの前に佇む、ハイネとラッセルの姿があった——

「——ここまで随分苦労したけど、そろそろゴールが近そうだねぇ。ラッセル、あんたも大分魔力を使ったみたいだけど休憩取らなくてもいいのかい？」

「ボクはまだまだ平気だよ。戦闘キメラの魔力は無尽蔵だからね。食べ物さえ切らさなければ一日中だって水魔法を放てるさ」

俺達の視線の先ではハイネとラッセルが警戒もせず話し込んでいる。

おそらくは警備用のロボットを撃退したばかりなのだろう。

ハイネの炎の魔法のせいか辺りの温度はかなり高く、額からじっとりと汗

が出てきた。
　しかし、今あいつ戦闘キメラって口にしたな。
　アリスがこの遺跡の関係者だと予想していたが、どうやら当たりだったらしい。
「それじゃあとっとと攻略しようか。もう野営するのも飽きたしね。こんな不気味なところからは早く出て、魔王城でゆっくり寝たいよ」
「ボクにとってはここは故郷みたいなものなんだけどね……。まあしょうがないか、ハイネは現代環境に適応した魔族だしね」
　ラッセルがちょこちょこ気になる事を口にしているが、今はそれより二人の尾行だ。
　俺は皆に合図を送ると、最高のタイミングで襲撃するべくコソコソと後をつけていった──

「――ハイネ、そっちの通路から新しいガーディアンが向かって来てる！　こっちはボクに任せて！　向こうは頼むよ！」

「任せな、あたしの炎で焼き払ってやるよ！　しかしどうにもこうにも数が多いね！」

　さすがは魔王軍の幹部達。

二人は危なげなく警備用ロボットを屠り続け、どんどん奥へと進んでいく。

「――くっ、罠か！　大丈夫かいラッセル、怪我は!?」

「ハイネがとっさに庇ってくれたから大丈夫さ、それより自分が怪我してるじゃないか！　治療するから傷を見せて！」

　時には罠にかかり、怪我を負い。

「こんなもんは掠り傷さ。それにラッセルに死なれちゃ困るからね。砂の王退治は魔族の悲願、それをどうにかできるのはあんただけなんだからさ」

「ハイネ……。そうだね、みんなのためにも、この使命を果たすまでは死ぬわけにはいかないな……」

「バカ言うんじゃないよ、使命を果たしてからだって死なせないさ。あんたはまだまだ子供なんだからね。子供を守るのは大人の役目さ」

　時には仲間の絆を確認し合い。

「またボクを子供扱いして！　いいさ、今に見てなよ？　ハイネがピンチの時はボクが守ってあげるからね」

「あははっ、そりゃあ楽しみだね。期待して待ってるよ！」

　そんな、楽しげなやり取りを見守りながら……。

（へっへっへっ……。やつら、何も知らずに油断してやがる。ゴールにたどり着い

た時が楽しみだぜ！）
　その後をつけている俺達は大変楽をさせて貰っていた。
（……おい六号、こうしてあいつらの頑張りを見ていると、お宝を横取りするのに躊躇してしまうのだが……）
（今さら何を言ってやがる、相手は魔王軍の幹部だぞ。連中から目的の品を強奪する事こそが正義なんだ。良心なんてどっかに捨てろ！）
　スノウの囁きに返している間にも、ハイネ達は前に進んでいく。
（それよりグリム、この距離からコッソリ呪う事は出来ないか？　あいつらは二人とも魔法使い系みたいだし、次に警備用ロボットが出てきたら、一時的に魔法が使えなくなる呪いをかけてやるのはどうだろう。苦戦する事間違

いなしたぞ？）
（誰かを呪う場合には、それなりの声量で言葉にしないと効果がないわ。でもなかなかいい手ね、隙があれば使ってみるわね）
（隊長、あたし、もういたたまれないんですが……）
グリムに襲撃の相談をしていると、同族と思わしきラッセルが気になるのか、先ほどから大人しいロゼが零す。
（ロゼ、覚悟を決めろ。この作戦には国家の命運が掛かっている。俺達に失敗は許されないんだ、ここはグッと我慢しろ。帰ったら美味い飯をたらふく食わせてやるから）
（前々から思ってたんですが、あたしはご飯さえ与えておけば何でも言う事聞くと思ってませんか？　今回は従いますけど！）
ロゼを食事でたらし込んでいる間にハイネ達の戦闘は終わったようだ。
こうして観察しているとあいつらの強さが良く分かる。

やはり真っ正面からやり合うのは避(さ)けたいところだ。
――それから、どれだけ進んだのだろう。
ふと、先行していたハイネ達が足を止める。
「どうやらここがゴールみたいだね……」
小さな部屋をいくつも通り、ハイネ達が最終的にたどり着いたのは広々とした大部屋だった。
その部屋の中央には、巨大(きょだい)なガラスケースの中に、大きな何かが寝(ね)かされている。
遠くからでも一目で分かる。
それは巨大なロボットだった。
しばらくの間ケース内のロボットに魅入(みい)っていたハイネは、ハッと気を取り

直すと明るい声で語りかけた。
「これが砂の王に対抗出来る切り札かい？　またとんでもない大きさだね……！」
そんなハイネの言葉にラッセルは。
「ああ。本来コイツは、地上に繁殖した猿どもを駆除するための兵器さ。これで砂の王を駆除した後は、うざったい人類を根絶やしに出来るね」
ここまで来ればもういいだろう。
俺はアリスと頷き合うと、ほかの連中に合図する。
そんな俺達の動きに気付く事もなく、ハイネはラッセルを宥めるように、
「またあんたはそんな事を……。そこまで人間が憎いのかい？」
「ああ、憎いね。それがボクを作った創造主の願いだし。ハイネはあいつらが憎くないの？　何度も酷い目に遭わされたって聞いたけど」

ラッセルの問いかけに、ハイネは苦笑を浮かべてみせる。
「そりゃあ苦汁を味わわされたけど、これは戦争だしね。一々あいつを憎んでいたら、いつまで経っても戦争を終わらせられ……。いや、やっぱり憎いわ。あの男だけはどうにかしたいわ」
「そ、そう。あの男っていうのはトリスで会ったあいつの事だろ？　機会があったらトドメは譲るよ」
　二人がそんなやり取りをしている間に、俺はコッソリと背後に忍び寄ると。
「ま、コイツが動けば戦争にも決着が付くだろうけどね。じゃあラッセル、期待してるよ」
「任せてよ。……うん、状態もいいしどこかが故障している様子もない。この分なら……」

無言のままに距離を詰め……！
「死にさらせえええええええ！」
「ほっ!?」
油断しきっていたラッセルの股間を背後から蹴り上げた。

5

「魔王軍幹部、水のラッセル討ち取ったあああああ！」
「ラッセルーッッッ!?」
膝から崩れ落ちたラッセルに、ハイネが悲痛な叫びを上げた。

距離を詰めた俺達はそのままハイネを取り囲む。
「おらっ、大人しく両手を上げろ！」
「ろろ、六号⁉　なんであんたがこんな所に……⁉」
まだ混乱から回復していないハイネは俺とアリスに銃を突きつけられ、言われるがままに手を上げた。
「残念だったな、この巨大兵器は俺達が回収する。下手な抵抗を見せれば、お前じゃなくそこに転がっているガキんちょを先に攻撃するぞ」
「「うわあ……」」
ちゃんと作戦を説明していたはずなのに、なぜか部下達はドン引きだ。
俺の言葉を聞いたハイネは状況を理解してきたのか徐々に驚きの顔になり、
「おお、お前ってヤツは！　いやちょっと待て、ひょっとしてあんた達は、ずっと

後をつけてたのか⁉　で、最後の最後で美味しいところをかっさらおうと⁉」
「おっ、よく分かったな。そうだよ、お前らが露払いした後を悠々と付いてきた」
「酷すぎるだろ！　そんなのズルい！　やっていい事と悪い事が……！」
ハイネが目に涙を浮かべ、今さらながらに抗議する。
いや、そんな事言われても俺達は悪の組織だし……。
それに悪行ポイントが加算されなかった事からも、今のは大した悪事でもないだろう。
「細かい事はどうでもいい。大人しく捕虜になってもらおうか。……それよりハイネさんよお？　あんたさっき、『いや、やっぱり憎いわ。あの男だけはどう

にかしたいわ』って言ってたが、そりゃ一体誰の事だ？」
「ひい⁉　べべ、別にあんたの事じゃあ……」
　俺にネチネチといびられながらも、ハイネはチラチラと倒れたままのラッセルを気にしている。
　そうそう、この子供が色々知ってるんだったな。
　コイツを起こして情報を聞き出さないと。
「おいアリス、そのガキんちょから色々情報引き出してくれ」
「任せとけ。……って、おい」
　打てば響くような返事をしたアリスは、ラッセルのそばにかがみ込むと。
「コイツ息してねえぞ。クリティカルヒットだな、やるじゃん六号」
「ラッセルー！」
　アリスの言葉にハイネが叫ぶ。
「え、マジで⁉　お、おいヤバいじゃん、こ、こらっ、起きろ！　アリス、こいつを

どうにか出来ないのかよ!?」
「一応カンフル剤打ってみるが、ダメだったら諦めろよ」
　俺とアリス以外が完全にドン引きする中、治療のかいがあったのか、やがてラッセルが息を吹き返した。
「う……、一体何が……？」
「おう、おはよう。目が覚めたか？　お前は俺の一撃で瀕死の重傷を負ったんだ。でもまあ勝敗は付いたからな。優しい俺達は治療を施してやったってわけさ」
　未だ青い顔をしたラッセルを間近で覗き込みながら、俺は経緯を説明してやる。

（おい、あの男あんな事言っているぞ。不意打ちの果てに慌てて治療していたクセに）

（勝敗は付いたとか、勝手に決めちゃってますね……）

（さすがのゼナリス様もドン引きされているご様子よ。ねえ、私達はこれから先も隊長について行って大丈夫なのかしら）

外野がヒソヒソと囁き合う中、辺りを見回していたラッセルは、

「……なるほど、不意打ちを食らったのか。で、キミはこの兵器を横取りするためにボクの復活を待っていたんだね」

「そういうわけだ。おっと、余計な事は考えるなよ？　変な動きを見せたなら、その機械ごとお前に攻撃を仕掛けるからな」

「お前、魔族のあたしが言うのも何だけど人としてそれでいいのか⁉」

ハイネがなにやら騒いでいるが、今はそれより巨大兵器だ。
「まずはコイツを開けてもらおうか。その後は俺達の言う事に従って、このデカブツの操り方を教えてもらう」
（スノウさん、あたし極悪人になった気分です。これ以上見るのは無理ですよ）
（わ、私に言うな……。これは国のため、そう、国のためなんだ……）
（ねえスノウ、私の目を見て言ってご覧なさいな）
　ヒソヒソとうるさい外野は聞き流し、俺はラッセルの説明に耳を傾けた。
「起動方法は簡単だよ。この施設の関係者なら、実は誰にだって動かせる」
　素直にガラスケースを開封させたラッセルは、拍子抜けするほどアッサリ話す。

命を失いかけた強力な俺の一撃に、恐れをなしたのかもしれないな。

「で、具体的にはどうやって動かすんだ？」

「こうやってさ」

俺の疑問に答えるように、ラッセルは一瞬輝くと、その姿が突然消え……!?

「おい六号、今のは何だ!?　水のラッセルが中に吸い込まれたぞ!?」

スノウが慌てた声を上げる中、俺は機械を叩き壊した。

が、中に収められていたロボットは、脈動するかのように明滅を繰り返し……！

「ちくしょう、これはもう手遅れ臭えな……！」

「二六号、とりあえず一旦離れろ！　コイツの回収は諦めて破壊に移行だ！」
アリスの警告を受け素早く下がると、蓋が開けられたガラスケースから巨大な手が突き出される。
突き出されたその片腕だけでも、大人を握り潰せるほどのサイズがあった。
その兵器は、俺達がヒーロー達と戦った際に何度も見てきた代物だ。
そう、ガラスケースから身を起こしたのは、人型をした巨大なロボットだった。
「動くなああああ！」
俺は銃を構えたまま、起き上がった巨大ロボに声を張り上げた。
最初はそれを無視するかと思えたラッセルは、だが俺が構える銃口を見

て動きを止める。
　コイツは銃を知らないはずだが、今まさに銃口を突きつけられているハイネの反応で、それが危険な物だと察したのだろう。
「ろ、六号、お前、それは人としてダメだろう……」
　スノウがドン引きしながら呟くが、今は正直それどころじゃない。
　両手を挙げたハイネを人質のように見せつけながら、背中に銃口を押し付けていた。
　でもなぜだろう、敵はおろか味方にまで引かれている気がする。
　と、銃を突きつけられているハイネが深々と息を吐いた。
　そして……。
「ラッセル、後は任せていいかい？」
「ああ、コレさえあれば楽勝さ。先に帰って待っててよ」

二人の会話にピンときた。
この流れはハイネが何らかの道具か力を使って逃(に)げるパターンだ。
俺の予想を裏付けるように、ハイネは胸元(むなもと)から石を取り出し……！
「いいか六号、今回は引き分けだ！　次に会った時こそ……えっ!?　ちょっ……！　きゃあああああああ！」
「させるかあああああ！」
ハイネの胸元に手を突っ込み先に石を奪(うば)おうとしたのだが、残念な事に一歩遅(おそ)かった。
おそらくはテレポートの類(たぐ)いが可能なアイテムだったのだろう。
ハイネの姿がかき消えて、後に残されていたのは……。
「おっ、やったな六号。お宝ゲットじゃねえか」
手の中に残されていたのはハイネが身に着けていたブラだった。

「そ、それは……。そうか、ハイネは転移石を使ったのだな。六号に摑まれた下着だけ、転移に失敗したのだろう」

スノウが転移石とやらの説明をしてくるが……。

「それって、ハイネはトップレスで魔王城に転移したって事よね」

「ハ、ハイネ……」

グリムが無情にもキッパリ告げ、それに伴い(ともな)ラッセルが、頬(ほお)を引き攣(つ)らせて小さく呟く。

そして俺の頭には、それを裏付けるかのようなアナウンスが響き渡(わた)った。

《悪行ポイントが加算されます》

大部屋から逃れるように、来た道に向けてひた走る。

「待て！　ハイネを辱めた猿め、踏み潰してやる！」

巨大ロボに乗ったラッセルが、俺を猿呼ばわりしながら追って来ていた。

「うるせー、そんなにハイネの下着が欲しいのかよマセガキが！　ほら、ブラは返すからあっち行けよ！」

追ってくる巨大ロボに、半ばヤケクソ気味に下着を投げる。

「ば、バカが！　ボクとハイネはそんなんじゃ……」

そう言いながらもラッセルは、ヒラヒラと舞い落ちる下着に目を奪われ一

瞬だけ動きが止まった。

その隙に小部屋へと逃げ込んだ俺達は、獲物に逃げられた事に腹を立てたラッセルを遠巻きにしていた。

「とりあえずは避難出来ましたけど、これから一体どうします？　戦うにしてもさすがにあの大きさは……」

ロゼが息を切らして言ってくるが、確かにあの大きさを相手に対抗出来そうな武器はちょっと思い当たらない。

「そもそも、アイツはここから出られるのか？　見たところ外への出口はこの小部屋を通るしかなさそうだが……」

「それならいいけど、古代人もさすがにバカじゃないでしょう。あの巨人を外に出すための出口があるんじゃないかしら」

スノウやグリムが色々と推測する中、アリスは帰り道の方を指さすと、

「とりあえず入り口まで戻ってみるか。アイツが外に出られないようならそのまま帰っちまえばいい。自分達を追って出てきたら、その時はここに立てこもって長期戦だ」

「そうしよう。あんなデカいのが補給もなしで無尽蔵に動けるとも思えないしな」

アリスの言葉に従って、俺達は遺跡の入り口へと引き返す。

だが、そこには予想通りというか、最悪の結果というべきか……。

「遅かったね、待ちくたびれたよ。悪いけどここから逃がしはしないよ。あと、この遺跡はコイツに耐えられるほど頑丈じゃないからね。立てこもろうとしても無駄だよ！」

遺跡の入り口で待ち構えていたラッセルが、巨大ロボの中でニヤつきながら宣言してきた――

「――さて六号、これからどうする？」

遺跡を破壊する音と共に鈍い振動が辺りを揺らす中、アリスは床にあぐらをかき、こんな状況だというのに気楽に言った。

俺はうーんとしばらく悩むと。

「アイツ気が短そうだし、謝っても許してくれないよな？　ハイネだったら、魔王軍に降りますとか言えば見逃してくれそうなのに」

「今頃ハイネは自分の部下達の前でトップレスだぞ。今のお前は殺したい相手の筆頭ではないのか？」

俺のぼやきにツッコみながら、スノウは辺りを見回している。
脱出経路でも探しているのかと思いきや、スノウはこの非常時にもかかわらず、辺りに散らばった照明や何かの部品などを回収しだした。
危機的状況にもかかわらずブレる事のないこういう部分は、果たして見習うべきなのだろうか。
「私の呪いを試してみる？　アレが仮初めの命を持つ魔法生物のゴーレムなら、一応呪いは効果があるわよ？」
「アレって魔法の類いじゃなく、多分ロボットだと思うけどな。……おいグリム、アリスに呪いを試してみろよ。コイツは正確にはゴーレムじゃない。あのデカいヤツと似たようなもんだ」
俺の出した提案に、二人がそれぞれ反応を見せる。
「おう、例のペテンか。いいぞ、やってみろ。アンドロイドに催眠術が効くわけ

ねえがな」

「上等よ、私の力が本物だって事を見せてあげるわ！」

二人はそう言って立ち上がると、アリスに向かって指をさす。

「あ、おいグリム！　失敗した時の事を考えて、一応軽めの呪いに」

「偉大なるゼナリス様、この不心得なチビっ子に災いを！　瓦礫に強襲されるがいい！」

同時に響く、ゴッという鈍い音。

降ってきた瓦礫で頭を強打し、グリムが床に転がった。

「何でコイツはいつもいつも、戦う前からやられてるんだよ!!」

「隊長、何だか壁がヤバいです！　破片が落ちてくる量も増えてますよ！」

早々にリタイアしたグリムに頭を抱える暇すらない。

ロゼの言葉の通り、遺跡の崩壊速度が速まっていた。

「お、おい六号、何かないのか！　見ろ、このお宝の数々を！　これらを持ち帰る事が出来れば一財産なのだ、ここで諦めてたまるか！」
「このバカ、そんなもん捨てていけ！　逃げるもんも逃げられなくなるぞ！」
　ちくしょう、どうすりゃいいんだこの状況は！
　と、俺が悩んでいたその時だった。
「……隊長、あたしってもしかするとあの人の同類っぽいですし、交渉してみましょうか……？　それにほら、ついでに自分の素性が分かるかもしれませんし……」
　見てくれだけはいいスノウを献上品として差し出し、見逃してもらおうかと考えていると、コゼがおずおずと口にする。

いきなり何を言い出すんだと思ったが、よく考えてみればありかもしれない。

「よし、ダメで元々だ！　いいかロゼ、仲間意識を高めさせるために、お前がたまに言っていた『お爺ちゃんが言ってた通り人類は敵なんだ』云々ってのを強調してだな……」

……そこまで口にした俺は、言葉を止めた。

明るい表情と気楽な口調で提案してきたロゼだが、よく見ると小さく震えている。

一体何に怯えているのかは分からない。

自分の素性を知るのが怖いのか、それともラッセルが乗る兵器に怯えているのか。

いや、好戦的なコイツの事だ、実は武者震いってヤツで、そもそも怯えているわけではないのかもしれない。

しかし……。

「お前はここで役立たずのグリムを守ってろ。アイツは俺が何とかするから」

「何とか出来るんですか？」

ロゼがノータイムでツッコむが。

「おい見習い戦闘員、お前キサラギ舐めてんだろ。キサラギの技術は凄いんだ。俺達にかかれば、あんなデカいだけのウスノロなんざ楽勝よ」

「待ってください、あたしいつの間に見習い戦闘員にされたんですか!?　その話は断ったじゃないですか！」

ロゼの抗議を聞き流し、俺はアリスを振り向くと。

「というわけだアリス。起死回生の良い手はないか？」

「一つ手がない事もない。とはいえリスクは大きいぞ。まず、あのロボの回収は諦めろ。それと、以前みたいにポイントがマイナスになる覚悟はあるか？」

打てば響くようなアリスの言葉に、

「あの裏技みたいなのってもう使えなくなったんじゃないのか？　俺が端末いじっても、マイナスになる場合は物が送られてこなかったぞ」

本来であれば悪行ポイントがマイナスになれば制裁部隊というものがやってくる。

だが、俺がこの星にいる間は制裁されるはずもないと気楽に考え、ここぞとばかりに散財しようとしたのだが……。

「ポイントの借金なんて許したら、お前は底なしに散財するだろ。緊急事態以外はマイナスに出来ないよう申請したんだ。まずは自分への借金を返してから言え」

「俺の事をよく分かってくれてるみたいで嬉しいよ。借金返済

「俺の事をよく分かってくれてるみたいで嬉しい。借金返済にもう少しばらく待ってください」
だがまあ、ポイントのマイナスなんて今更(いまさら)だ。
そんなものはリスクのうちに入らないだろう。
と、疑問が顔に出ていたのか、アリスは俺を試すように。
まるで、答えは分かってるが一応聞いておくとばかりに尋(たず)ねてきた。
「最後のリスクは時間稼(かせ)ぎだ。お前一人でアレを相手にしてもらう事になる」
俺は自信ありげにふふんと嗤(わら)うと。
「時間稼ぎなら任せとけ。俺はしぶとさには定評のある古参兵、戦闘員六号さんだぞ。何を取り寄せるのか知らないが、後は任せるぞ、賢(かしこ)い相棒」
「頭と性格に関しては不安しかねえが、戦う事に関してだけは信頼(しんらい)してるよ、強い相棒」

く弱し様様」
こんな時だけ頼もしい、口の悪いアンドロイドは。
俺の背中をバシッと叩くと、キサラギ製の端末を手に取った。
「おいアリス、私は何をすればいい!?」
「お前はロゼと一緒に自分の手伝いだ。指示通りに動くんだぞ、組み立てが遅ければ遅いほど、六号の生存率が下がると思え！」
組み立てってのは何の事だ？
……いや、考えるのはよそう、頭を使う仕事はコイツに任せた。
──俺は外に飛び出すと、遺跡に張り付いているラッセルに。
「秘密結社キサラギ社員、戦闘員六号だ！　ガンガンうるせえんだよクソガキが！　壁殴りならラブホでやれ！」

戦闘服の筋力増強機構を全開にすると、その足を殴りつけた……！

7

ラッセルが乗る巨大ロボを殴った俺は。

「何だよお前は！　ちょこまかと逃げ回るぐらいなら、最初から出てくるなよな！」

「うるせえ、コレは賢い俺の作戦なんだよ！　どんなエネルギーを使ってるのか知らないが、その図体なら長くは持たねえだろ！」

その後はひたすら回避に努め、足下をチョロチョロと逃げ回り、ひたすら挑発を続けていた。

「コイツの燃料は操縦者の生命力さ！　常人ならすぐに尽きるとこだけど、ボクみたいなキメラが乗れば長時間の起動も問題ない！　いい加減邪魔だよ！」

ラッセルがイライラと何度も足踏みし、その度に地面が揺れてこけそうになる。

だが、エネルギー切れを待つつもりは毛頭ない。

わざわざ出てきて逃げ回っている理由付けのため言ってみただけだ。

「そんな事言いながら随分焦ってるんじゃないですかねえ⁉　敵の言う事を鵜呑みにするバカがいるかよ！　こっちは持久戦には慣れてんだ、何時間でも逃げ回ってやんよ！」

「この……っ！　もういい、弱虫はそこで見てろ！　先に仲間を潰してやる！」

ラッセルは吐き捨てるようにそう言うと、再び遺跡を破壊しようと……、
「うわっ!?　お、お前は何がしたいんだ！　頭にきた、絶対に踏み潰してやる！」
したところで、ガラス張りになっている操縦席の部分に拳銃による銃弾を受け、俺を追いかけ回す作業に戻った。
時間稼ぎとはいえ一瞬一瞬に神経を遣う。
何より反撃手段が無いのが一番痛い。
「ああもう！　何も出来ないくせに、お前いい加減しつこいぞ！　もう諦めて降参しなよ！」
……いや、あるといえば一応はあるか。
業を煮やしたラッセルが背を向けた瞬間に、俺は腰の後ろに下げてある愛用の武器を取り出すと、

「油断してると斬(き)り刻んじゃうぞー！」
　傷を負わせる事は出来ないと油断しきっていたのだろう。
　俺の姿を見失っても慌(あわ)てようともしない巨大ロボに、Rバッソーで斬りかかった！
「うわっ!?　な、何を……!?」
　足首に斬り傷を負わされた巨大ロボは、バランスを崩(くず)し尻餅(しりもち)をつく。
　危(あや)うく巻き込まれそうになったが紙一重(かみひとえ)で回避した俺は、
「おっ、なんだよなんだよ、古代兵器って言ってもとんだ見かけ倒(だお)しだな。雑魚(ざこ)もいいとこじゃないですかー！」
「こ、コイツ、いい加減にしろよっ！」
　何度目かになる俺の挑発にラッセルは逆上するが、これ以上俺に構うより、仲間を人質(ひとじち)にした方が手っ取り早いと考えたのだろう。

視線だけをこちらに向けて、遺跡の破壊作業を開始した。

さすがに時間稼ぎだと気付かれたか。
くそ、そうは言ってもこのまま遺跡を壊されるのもマズいし……！

その一瞬の葛藤が仇になったのだろう。
遺跡の破壊を行っていた巨大ロボは、その体が傷付く事も構わずに、こちらに向けて身を投げ出した。
酷い衝撃を受けたと思ったら、ふと目の前が明るくなる。
いや違う、ほんの一瞬だとは思うが、どうやら気を失っていたらしい。
逃げなければと思っても、右腕しか動かない。

ああ、これはヤバいやつだ。

口先でどうにか逃げられないかとラッセルを見るも、先ほどからの挑発がよほど腹に据えかねていたのだろう。

巨大ロボットの操縦席で子供特有の残酷な笑みを浮かべながら、ラッセルはことさら勿体ぶるように近付いてきた。

「楽に終わると思わない事だね」

そんな、三下悪役にありがちなセリフを吐いたラッセルに、

「バカだなお前。そういう事言っちゃうと、大抵上手くいかないんだぜ」

ぐったりと身を横たえたまま、悪の先達として忠告してやる。

ラッセルはそれを嗤いながら、俺に向かって手を伸ばし――
――遺跡の中から響(ひび)いてきた音に、動きを止めた。

その音が気になったのだろう。
俺を見下ろしたラッセルが、警戒(けいかい)を露(あら)わに口にした。
「これは一体何の音だ？」
「あいつ、またエラいもん呼び出したなぁ……」
それは戦闘員であれば誰(だれ)もが聞いた事のある重低音。
味方が聞けば頼もしく、敵が聞けば震え上がる、長くキサラギで働いている者であれば聞き間違える事のないエンジン音。
同時に遺跡の内部から、何かを打ち付けるような音も聞こえてきた。
それは、ラッセルが遺跡の壁(かべ)を殴りつけていた音に酷似(こくじ)している。

これは、さっき[illegible]が遺跡の壁を砕いていた音に酷似している。
徐々に大きくなる破壊音と振動にラッセルが困惑の表情を浮かべる中。
遺跡の壁を粉砕しながら、それは姿を現した。

「な、な……」

それを見たラッセルが口をパクパクさせている。
『待たせたな、相棒。後は自分に任せとけ』
それに備え付けられた外部スピーカーからは、まるでヒーローみたいなセリフが響く。
ラッセルが唖然とするのも無理はない。
男前な相棒が、ラッセルの巨大ロボに匹敵する物に乗って現れた。
「な、なな、なんだこれ……」

突如遺跡の壁をぶち破って現れたのは、キサラギの誇る巨大多脚型戦闘車両。

一体誰が名付けたのか、通称デストロイヤーと呼ばれるクモ型兵器がそこにいた。

口をあんぐりと開けたラッセルが言葉もなく混乱する中。

いつかアリスが、ガダルカンドと対峙した時にやったように。

痛む体を無理矢理動かし、俺はデストロイヤーに乗ったアリスに向けて。

「やっちまえ！」

右手の親指を突き上げた――！

8

目が覚めると、俺の目にとんでもない光景が飛び込んできた。

「…………おいアリス」

「お、目が覚めたか。治療用のナノマシンをぶち込んでおいたが、どこか痛いところはあるか？」

そこはアジトのベッドの上だった。

俺は少しだけ身をよじり、体の具合を確認する。

「いや、特に痛みは感じないなあ……」

「そうか、そりゃ良かった。頭を打ったかもしれないし、後で精密検査をしと

「そうだ、そりゃ良かった。頭を打ったかもしれないし、後で精密検査をしてやるよ。これ以上頭が悪くなられると、さすがの自分も困るからな」
病み上がりの人間に対し、相変わらず辛辣なアリスに向けて。
「色々尋ねたいんだけど、聞いてもいい？」
「おう、何でも答えてやるぞ」
即答するアリスに、まずは一つ。
「お前が操るデストロイヤーがあいつに襲いかかったところまでは確認したんだけど、あれから一体どうなったんだ？」
「そりゃあもちろん勝利したぞ。スペックは向こうの方が上だったが、操縦者の差ってヤツだな。こっちも多少のダメージは受けたが、あのロボはスクラップにしてやった」
楽しげなアリスの言葉を聞いて、まずは安心する。
信じてはいたが、さすがは俺の相棒だ。

普段は口の悪いポンコツだが、ちゃんとやる時はやってくれる。
「多少のダメージを受けたって、大丈夫なのか？」
「おう。お前がポイントをマイナスにしてまで手に入れた、大事なデストロイヤーだからな。修理に時間が必要だが、ちゃんと使えるようにしてやるよ」
俺が気になったのは操縦していたアリスが無事だったのかどうかなのだが、この分だと大丈夫そうだ。
「六号が気を失った後、巨大兵器をぶっ壊して中にいたラッセルとも交戦してな。あのガキはスノウとロゼが取り押さえたぞ」
「おっ、そりゃありがたいな。実はあのガキんちょの使い道を考えてあるんだよ。で、その後はどうなった？　魔王軍やトリス軍は？」
「近くにいたトリス軍なら、デストロイヤーに乗ったまま脅してやったら退散したよ。魔王軍の方はトラ男と戦闘員がゲリラ戦を仕掛けて追い払った。ド

サクサ紛れに魔王軍とトリスの土地を一部ぶんどっておいたからな。これでアスタロト様から課せられた任務も達成だな」
　俺はアリスからそこまで聞いて、ようやくホッと息を吐いた。
「姫さんいわく、トリスとはなるべく平和的に解決したいらしいが、向こうさんが強気でなあ。水精石の輸出って外交カードを持ってるせいか、和解案で揉めてるらしいな」
「なるほど」
　となれば後は、水の問題をどうにかすれば解決か。
「まあ今のところはこんなとこだ。他に質問はあるか？」
　そんなアリスの言葉に対し、俺は一番気になっていた事を尋ねる事にした。
「じゃあ聞きたいんだけどさ……。…………お前、何で俺のパンツ脱がして

るの？」

そう。

目を覚ますと、コイツは俺のパンツを脱がせていたのだ。

「脱がせてないぞ、穿かせてたんだ」

「どっちでもいいわ！　何で寝てる間にパンツ穿かせてんだよ！　アレか？　何にでも興味を示すお前も、俺のご立派様が気になったのか？」

半分ほどずり落ちた状態のパンツを上げて、きちんと定位置に収めてやる。

「お前のちゅんちゅん丸になんざ興味ねえよ。下の世話をしてやってたんだ」

「ちゅんちゅん丸って呼ぶな！　せめてもうちょっと攻撃力の高そうな……。

え？　下の世話？　お前俺の下の世話なんてしてたの？」

　アリスの言葉にふと気付く。

「俺、どんだけ眠(ねむ)ってたんだ？」

「三日ほどだな。まあそれだけ寝てれば小便も垂れるしクソも漏(も)らすさ」

　マジかよ……。

「俺、もうお婿(むこ)にいけない……」

　顔を覆(おお)ってさめざめと泣き出した俺に向け。

「その際には、お前がジジイになって動けなくなったら、くたばるまでは自分が面倒(めんどう)見てやるよ、相棒。だからクヨクヨすんなクソ漏らし」

　と、そんな励(はげ)ましてくれているのか煽(あお)っているのかよく分からない事を言ってきた。

「……そうだな。アスタロト様はちっともなびかないし、グリムは地雷(じらい)でロゼは怖(こわ)い。[illegible]

に怖い。ス[illegible]に関しては論外だし、もうお前で妥協するよ……」
「もうとかお前で妥協するとか、言ってくれるじゃねえかクソ野郎（やろう）」
　口では辛辣な罵声（ばせい）を浴びせてくるアリスだが、普段動かされる事のないその表情は、なぜかちょっとだけ楽しそうに見える。
「ていうかお前、もっと巨乳（きょにゅう）で高身長ボディに改造してもらえないのか？　そのついでに、TENGAも内蔵してもらってこいよ」
「自分がアンドロイドで良かったな。これが普通の女なら、ぶっ殺されても文句言えない発言だぞ」
　呆（あき）れたようなアリスの言葉に、俺はハッと気が付いた。
「アンドロイド……。そうだよ、なんで気が付かなかったんだ！　ほれ、こないだグリムが悪魔を呼んだろ！　アイツに頼（たの）んでみればいい！　口の悪い

アンドロイドから人間の美少女にバージョンアップさせてくれって……」
「病み上がりでまだまともに動けない体のクセに、お前の後始末をしてきた自分に面白(おもしろ)い事ばかり言ってくれるな。その喧嘩(けんか)買ってやろうじゃねえか！」
アリスにズボンを投げつけられながら、俺はある事を思い出す。
「まあ待てアリス。まだ後始末は済んでいない。今からちょっと付き合えよ」
怪訝(けげん)そうな顔のアリスに向けて、俺はニイッと口元を歪(ゆが)めてみせた。

――アリスに案内されながら薄暗い階段を下りていく。

俺達二人の後ろには、交渉が上手くいかなかった時のためスペシャルゲストに来てもらっていた。

階段を下りた先にあったのは、すえた臭(にお)いを漂(ただよ)わせる牢獄(ろうごく)。
そして……。
「よう、元気そうだな」
牢獄の中には、両手を長い鎖(くさり)で繋(つな)がれた少年、魔王軍幹部水のラッセルが囚(とら)われていた。
俺の呼びかけを受け、ラッセルはつまらなそうに鼻を鳴らす。
「ボクがあれだけボロボロにしてやったのに、まだ生きていたのか、しぶといな？」
「しぶといのが取り柄(え)の六号さんだからな。っていうか、上司にもそれ言われて結構気にしてんだからやめてくれよ」
それを聞いたラッセルは、嘲笑(あざわら)うかのような視線を向け、
「やっぱりお前みたいな下品なヤツに負けたのが納得(なっとく)いかないなぁ……。い

や、ボクが負けたのはそこの小さいのだったね。むしろ、ボクの操る兵器に手も足も出なかったお前は、そんな勝ち誇った顔をしない方がいいよ。というか、ボクみたいな子供に負けて恥ずかしいとか思わないの？」

あのとき散々挑発した俺を怒らせるのが目的なのだろう。

ラッセルは挑発的な言葉を並べ、口元を歪ませた。

「そうだな、俺は確かに雑魚の下っ端戦闘員だな」

「……なんだよ急に。つまんないの、自分で認めちゃうんだ。あーあ、本当に、なんでこんなヤツにガダルカンドは負けたのか意味分かんない」

その言葉をアッサリ認めると、ラッセルは頭の後ろに手を回し、もう興味は失せたとばかりの態度を取る。

俺はそんなラッセルに指をさし。

「でもお前は、その雑魚の下っ端戦闘員に負けたクソ雑魚だ。あれだけ粋が

ってたクセに、今となっては囚われの身だもんなあ。おい、人を雑魚呼ばわりしておいて、そいつに見下ろされている今はどんな気持ちだ？　ほら何とか言ってみろよこの負け犬が！　バーカバーカ!!」

「ぐ、ぐぐぐぐ……！」

「おい六号、子供相手に喧嘩してどうする。コイツに用があるんだろ？」

　ここぞとばかりにラッセルを挑発していた俺は、アリスの言葉で我に返る。

「そうだった、こんな事しに来たんじゃない、お前には聞きたい事と頼みたい事が」

「やだね」

　正気に返った俺の言葉を、ラッセルが一言で切って捨てた。

「……おいコラクソガキ、この温厚(おんこう)な六号さんが優(やさ)しくお願いしている内に、

言う事聞いておいた方がいいぞ。さもないと」
「いいよ。何をする気かしらないけど、やってみなよ。ボクはこう見えて拷問（ごうもん）の類（たぐ）いには強いんだよね。キメラの特性なのかは分からないけど、暑さや寒さ、痛みなんかには鈍（にぶ）いんだ」
　開き直りとも取れる態度で、ラッセルはなおも挑発してくる。
なるほど、確かにロゼは砂漠（さばく）の暑さや寒さにも強かった。
　となるとコイツの言っている事も本当なのだろう。
「先にいっておく。お前にはえらい目に遭（あ）わされたが、でもお互（たが）いに敵同士、言ってみれば戦争だからな。だからその事に関しちゃ恨（うら）んじゃいない。でも今のお前は捕虜（ほりょ）だからな。従順な態度が取れないのなら、それに合わせた待遇（たいぐう）になる」
「だから、やるんならやればあ？　ボクはキメラだからね。昔実験で色んな事を試（ため）されたし、今さらといえば今さらなんだよ」

参ったなあ……。
そのキメラ云々の話も詳しく聞きたいんだけどなあ……。
「なあ、拗ねてないで聞けよ。この国は今、水に困っているのは知ってるな？
で、お前に頼みたい事ってのは……」
「あーうるさい！　お前らの頼みなんて聞くつもりはないって言ってるだろ！　やるんならやれよ！　それとも口だけ？　ボクみたいな子供を拷問するのには抵抗があるの？　口だけじゃないのなら、やってみせなよ！」
……………………。
「分かった。俺には無理だ。降参だ」
「……本気で言ってんの？　ああそうか、つまりそこまで水不足で困ってるんだね。頭を下げてお願いするって事？　確かに水のラッセルと言われたこのボクなら、一国の水不足ぐらい解決出来るさ。でも残念だね、たとえどれ

だけ頼まれたって……」

ラッセルが、そこまで言ったのを遮(さえぎ)って、俺は深々と頭を下げた。

ラッセルではなく、後ろに立っていたスペシャルゲストに。

「トラ男さん、すんません。俺には無理でした。降参っス」

「そうか。なら、後は俺に任せとけ。むしろこっからは俺のお楽しみタイムってやつだにゃあ」

降参を宣言すると同時に、俺達の背後から姿を現したのはスペシャルゲストであるトラ男。

それまで大人しく聞いていたアリスが興味深そうに尋ねてくる。

「トラ男が拷問が得意だなんて初めて聞いたな。こんな意固地になってるヤツに、本当に言う事聞かせられるのか？」

もっともなアリスの問いに、だがトラ男は答える事なく、これから実演してやろうとばかりに檻に近付いた。
「……なんだコイツ？　お前達は人間のクセに、獣人なんて仲間にしてるの？　おい獣人、ボクの言葉が分かるか？　ハハッ、なんとか言えよ！」
　トラ男を見たラッセルは、一瞬言葉を詰まらせるも直ぐさま虚勢を張ってみせた。
　だがトラ男はそれにも答える事はなく。
　ジッとラッセルの顔を見続けると……。
「よくやった六号、今度お前に美味い酒でも奢ってやるにゃん」
「マジっすか。さすがトラ男さん、キモいだけじゃなく太っ腹でカッケーっス」

「キモいは余計にゃん。ラッセルにゃんに嫌われるからそういう事は言うんじゃないにゃ」

俺とトラ男のやり取りに、ラッセルが怪訝な顔をした。

そんなラッセルに、何かを察したアリスが告げる。

「おいお前、バカな事したな。六号の誘いに乗っておけば、毎日ひたすら水を生成するだけで済んだのにな。まあ、せいぜいトラ男と仲良くしろよ」

「……は？」

何を言っているのか分からないという顔で、ラッセルが首を傾げる。

と、いつになく上機嫌のトラ男が、重低音の渋い声でラッセルに名乗りを上げた。

「俺の名はトラ男。ちいちゃい子が大好きな、引退した暁には改造手術で美少女になろうという予定の怪人にゃん」

少女にしてもらう宇宙の怪人にゃん」

　それを聞いたラッセルは、これまた何を言っているのか分からないという表情を浮かべ……。

「…………は？」

「は？　じゃねえにゃん。今日から俺とラッセルにゃんはお友達にゃん。大丈夫だ、俺は優しいから安心しろにゃ」

　牢の鉄格子を両手で握り、荒い息を吐くトラ男。

「い、いや……。何を言っているのか分からないんだけど。浮かれてるとこを悪いけど、ボクは男だから。ハハッ、残念でした。見て分かんないかなあ？　ねえ、この獣は目が悪いの？」

　ラッセルはまだ状況を理解していないようだ。

　トラ男はにこやかに。

そして、重低音のナイスボイスで。

「男なのは知ってるにゃあ。むしろ、男の娘（こ）は大歓迎（だいかんげい）だにゃあ」

——時が止まった。

「……いやいや、何言ってんの⁉　おい、コイツは何を言ってるんだよ、今わけの分からない事を言ったぞ！」

途端（とたん）に慌（あわ）てふためくラッセルに、トラ男はさらに息を弾（はず）ませて、

「ラッセルにゃんは可愛（かわい）い顔してるから、きっとスカートがよく似合うにゃあ」

「何を言ってるのか分からない！」

俺も何を言ってるのか分からない。
だが、これだけは言える。
「さすがトラ男さんだ。怪人は半端じゃねえぜ」
「何がさすがなのか分からない！　ねえ、冗談だよね⁉　ボクは男だし！　っていうか脅しなんだろ⁉　だってこんなのおかしいだろ⁉」
身の危険を感じたのか、ラッセルが必死にまくし立てる。
「俺の心は大きいからな。男の子か女の子かだなんて小さな事は気にしねえ。どっちも等しく愛でてやるにゃん」
「さすがっス、トラ男さん、マジ何言ってるのか分かんないけどキモデッケーっス」
「よし分かった、ボクの負けを認めるよ！　悔しいけど降参だ、水でも何でも出そうじゃないか！」
負けを認めたラッセルが協力を申し出てくるが……。

「トラ男さんさすがっス、小僧が協力するそうですよ」

「バカ言ってんじゃねえ、ここまできてお預けだとか、今さら許されるわけがねえにゃん」

「待って！　降参！　降参するから！　えっ、ちょ、ちょっ……!?」

鉄格子を握っていたトラ男が、それを力任せに引き千切る。

無造作に放り投げられた残骸が、ラッセルの足下にカランと音を立てて転がった。

顔を引き攣らせたラッセルが、上擦った声で訴えかける。

「よし分かった、ボクは今日からお前達の側に付こう！　戦闘キメラを飼っておくと何かと役に立つはずだよ！」

「俺達のとこじゃ、既にキメラは間に合ってんだわ。悪いなラッセル、これからはトラ男さんと仲良くな」

い、ラ男さんの仕事、な」
　俺が放った一言に、ラッセルがぶわっと涙と鼻水を垂らし首を振る。
「嫌だ、嫌だあああああ！　こんなのおかしい！　おかしいよ！　お願いします、水を生成する仕事をボクにください！　毎日一生懸命頑張りますから！」
　ラッセルの必死の呼びかけに、アリスがふんと鼻を鳴らし。
「水を作るのは当たり前だろ、てめーは六号の誘いを蹴ったんだ。お前も組織が違うとはいえ、悪の組織の構成員の一員ならな……」
「おう。反抗するなら最後まで。裏切るのなら真っ先にってな」
　そんな、アリスと俺の言葉に続き、トラ男は顔をズイと寄せ……！
「しょうがないにゃあ。仕事をサボる事がない限り、女装させるだけで勘弁

してやる。精々頑張って水を出せ。でもまあ……。俺としては、サボってくれても構わないにゃあ」

強面（こわもて）の笑み（え）を浮かべて言い放った——

エピローグ1

そこは秘密結社キサラギの会議室。
「リリス、六号からの報告書を解読して欲しいんだけど」
アスタロトはそう言って、リリスに報告書を手渡した。
「彼の字は汚いが、読めないほどではないと思ったのだけどね。どれ、ちょっと貸してみて……。……ごめん、僕にも彼が何を言っているのかさっぱり分からないよ」
目を通して二秒で解読を諦めたのは、六号が送ってきた最終報告書。
「トラ男さんが毎日幸せそうで何よりです、あとスポポッチは意外と美味し

い……。スポポッチって何なの？」
「それは僕が聞きたいとこだね。アリスをバージョンアップさせてくれと書かれてるんだけど、これにしたって意味が分からないし……」
報告書に困惑する二人をよそに、ベリアルの罵声が響いてくる。
「Fの十八号、Fの十九号！　今日の模擬訓練のふぬけ具合は何だ!?　お前達二人はあんなものじゃなかっただろうが！」
「すみませんベリアル様……。十九号と昔の話をしていたら、つい故郷の事を思い出してしまいまして……。父上や妹、そして国民のみんなに、俺がいなくなった事で苦労をかけているんだろうなと思うと……」
「我輩も、きっと今頃ハイネやラッセルに心配されている事だろう……。あの二人は仲間想いであるからな……」
そう言って懐かしそうに目を閉じるのは、戦闘服に身を包んだ二人の男。

だがベリアルは、そんな二人の新人に。
「そうかあ？　お前達が国でどれだけ有名だったのかは知らないけど、いなくなって一週間も経てば、案外コロッと忘れられたりするもんだぞ」
「ベリアル様、さすがにそれはないですよ！　俺は王子で勇者ですよ!?　それが急にいなくなったら、国内は大混乱に陥って……！」
「そうですとも！　四天王の一角たる我輩を慕う部下達が、きっと今頃捜索を……！」
ベリアルの言葉に二人が唾を飛ばして食ってかかるが、即座に拳骨を受けてうずくまった。
「いい加減勇者だの何だのを口にするのは、六号並みに頭が悪く見えるからやめろ！　それに、四天王を勝手に名乗るな！」
騒がしい三人に、アスタロトはチラリと視線を送ると。

「あの新人二人も頑張るわね、ベリアルが直接鍛えると聞いた時にはすぐ潰れると思ったのだけど……」
「そうだね、僕もそれだけは予想外だったよ。でも、ベリアルは面倒見がいいからね。それに、あの新人達はそれなりに死線をくぐり抜けているみたいだよ」
ベリアルの家の庭に現れたという二人の新人。
ヒーロー達との激戦が続く毎日だが、この二人はそれなりの成果をあげている。
「六号の援軍として派遣しようかと考えていたんだけど、あの新人達にはもうしばらくこっちで頑張ってもらいましょうか」
「入社して数ヶ月であの惑星に派遣ってのもかわいそうだしねえ。六号にはもうしわけないけど、向こうは今のままで回してもらおう。今回のヒーロー

達の反抗作戦はどうにかなったものの、まだ油断は出来ないからね」

二人はそう言うと、再び報告書に視線を落とす。

「……ねえ、このモケモケっていうのは……」

「僕に聞かれても困るよ。アリスにも最終報告書を書かせるから、それと照らし合わせて考えてみよう。話をどうにかまとめると、侵略地が増えたみたいだけど……」

報告書にはところどころにわけの分からない事が書かれている。

中でも、とりわけ酷いのが……。

「最後の、グリムに靴下を履かせてみたら大惨事になるとこだった、ってのは……」

「グリムっていうのは確か、[illegible]の部下だったよね。靴下で大惨事の意味が分か

エピローグ2　アンデッド祭り

ラッセルに水不足を解決させてからしばらくが経つ。
不幸な行き違いでヒビが入ったトリス王国との関係も徐々(じょじょ)に修復の兆(きざ)しを見せているらしいし、いずれは通商なども再開される事だろう。
と、そこまでは良かったのだが……。
「隊長なんて顔も見たくないわ！　この隊に入ってから散々な目に遭(あ)ってばっかりよ！　トリスに行けば振られるし、砂漠(さばく)に行けば干(ひ)からびるし、靴下は穿かされるし、街コンでは振られるし!!」
「俺が関係してるのは一つしかねーだろ！　大体、靴下穿かせただけであん

な事になるだなんて予想も出来ないだろ、こっちが文句言いてーよ！」
　グレイス王国の訓練場で、拗ねたグリムに絡まれていた。
「ったく、そこまで言うのなら分かったよ、もう……。他の隊に移動出来るように頼んでやるから……」
　俺が零したその言葉に、グリムの目が見開かれ……。
「いやあああああ！　お願い隊長、捨てないで！　だって私達、苦楽を共にした仲間じゃないの！　散々優しくしておいて、飽きたら捨てるなんて酷いじゃない！」
「お前が文句ばっか垂れるからだろ、一体どうしろってんだ！　大体お前、いつも戦闘が始まる前には高確率でやられてるだろ！　今回はちっとも役に立たなかったし！　ウチの隊はクビだクビ、もっと出来る子を入隊させるからな！　そうだよ、以前名簿に名前があった、ドジっ子魔法使いちゃんかじいさんを……」

検討を始めた俺の腕に、グリムが泣いてすがりつく。
「隊長、私達デートまでした仲じゃない！　パンツまで見た仲じゃない！　それなのに捨てるって言うの⁉　そんな事したら呪ってやるからあああああああ！」
「面倒くせえ女だな！　じゃあどうして欲しいんだよ！」
わんわん泣きながら大声で喚いていたグリムは、
「だってアリスにはペテン呼ばわりされるし、昼は活動出来ないからスノウやロゼみたいに活躍だって出来ないし！　そうよ、活躍の場よ！　私に活躍の場をちょうだい！」
そんな面倒な事を言いながら、服の袖を摑んで放そうとしない。
「活躍の場って言ってもなあ……。だって、お前に出来る事って言えば……」
「結婚式場なんてどうかしら。隊長は悪い事をすればポイントってものが手

に入るんでしょう？　なら、今まさに、誓(ちか)いの言葉を言おうとしているカップルに、永遠に結婚出来ない呪いをかけて……！」

　そしてその呪いの反動で……。

「お前が永遠のいき遅(おく)れになる落ちがイメージ出来た」

「やめて！　私もそんな気はするけど、言霊(ことだま)ってものがあるんだから口にしちゃいけないのよ！」

　と、やかましいグリムをからかっていると。

「グリム、ここにいたのか！　緊急(きんきゅう)事態だ、ティリス様が呼んでいる！」

　訓練場に駆(か)け込んできたスノウが声を上げた。

　俺はグリムと顔を見合わせ。

「クビか……」

「不安になるからやめて！　この時季にティリス様が呼んでいるって事は、

どんな用件かの予想は付いたわ。ほら隊長、車椅子押して！　ティリス様から直々に、私がいかに役立つ女かを説明してもらうから！」

　グリムが面倒くさい事を言いながら早く早くと手招きする。

「お前達、早くしろ！　城の占い師の予想によれば、今年のヤツは過去最大級になるらしいぞ！」

　いつになく焦りを見せるスノウだが……。

「今年のヤツ？　過去最大級？　おいグリム、何の事だ？」

「それは行ってのお楽しみってヤツね、いい女には秘密が多いものなのよ」

　グリムはフッと笑いながらそう言うと、俺の鼻を指でつつく。

　…………。

「俺、焦らしプレイをする女を見ると、ひん剥いてやりたくなるんだが……」

【最終報告】

戦闘員六号の工作により、グレイス王国と隣国との友好関係にヒビを入れる事に成功。

隣国との戦争にまで発展させ、キサラギの支配地拡大はノルマを達成しました。

その際に商売敵の怪人を一人捕縛し、現在はトラ男の支配下に置かれています。

怪人から聞き出した情報によると、この惑星には過去に高い技術を持つ超文明が栄えていた事が判明。

今回の作戦において戦闘キメラの製造技術や有用な情報は引き出せなかったものの、巨大魔獣の存在など生態系の矛盾についても件の超文明が

関与しているとの事。

超文明の残存施設の接収を進めると共に更(さら)なる調査を続けます。

なお、この惑星ではこの時季になるとアンデッド祭りなるものが開催(かいさい)されるとの事。

科学技術の結晶(けっしょう)である自分としては、この不愉快(ふゆかい)なオカルト祭りを全力で妨害(ぼうがい)する意向です。その結果につきましては追って報告いたします。

最終報告者　オカルトバスター、キサラギ=アリス

スペシャルコラボ短編『この素晴らしい星に祝福を！』

「十月三日、午前二時。当方、惑星への降下は滞(とどこお)りなく完了。降下中に灯(あか)りを発見したため、これより探索(たんさく)に向かう」

無事に惑星へと降り立った俺は、端末(たんまつ)に向けて録音しながら辺りの様子を確認(かくにん)する。

見渡(みわた)す限りの平原は、人類が暮らすのに適していそうだ。

今回の任務は楽勝だなと、不覚にも気を緩(ゆる)めてしまったその時だった。

「この惑星は水と緑が豊富であり、人が住むのに適していると思われ……うおっ!?」

突然地面が盛り上がり、そこから巨大なカエルが現れた。
こいつを駆除するのは出来なくもないが、ここに死体を放置すれば、この巨大生物を葬れる存在がいると、付近の住民に警戒されるかもしれない。
「クソッタレ！　エリートの俺がカエルごときに撤退とは……！」
惑星降下後数分足らずで走らされるとは、この星は侮れない。
先ほどのミスは忘れろ、クールな事で知られているいつもの自分を思い出せ。
この星で何が起こったとしても、決して動じず油断はしない。
「降下直後に好戦的な巨大ガエルに遭遇！　調査任務である事を考慮し、戦略的撤退を行う！　レコーダー記録者は、戦闘員二十二号！」
こうして。俺の、ろくでもない世界での生活が始まった――

「——十月十七日、午前六時。これより土木工事のバイトに向かう」
馬小屋で起床した俺は、端末に呼びかけその日の録音を開始する。
この星に降り立ってから二週間が経った。
言語の習得に少しだけ難儀したが、エリートである俺にとっては大した障害ではない。
ここでの暮らしは順調だ。
むしろ、大した娯楽が無いせいで早く寝て早く起床し、健康的に肉体労働に勤しむ日々は地球での暮らしを考えさせられるものだった。
というか、キサラギの給料とバイト代が変わらないのだから悩ましい。
地球では俺を見るだけで住人達が逃げ回ったものだが、この街では誰も気にも留めない。

同僚が言うには、この街には変わった名前と服装をした、黒髪黒目の連中がどこからともなく生えてくるのだとか。
――と、この日も外壁の補修に勤しんでいると、見慣れない少女に声を掛けられた。
「ねえあなた、お手本を見せてあげるわ！」
突如現れた青髪をした少女は、そう言って鮮やかな手並みの塗装を見せつけてくる。
「……先輩、あの青髪の少女は職人ですか？」
「いや、補修隊長はバイトだよ。小遣いが無くなるとここに来るんだ」
少女は周囲の作業員から隊長隊長と呼ばれ浮かれているが、隊長とは一体……。
しかしこの星では、たかだかバイトの少女がこれほどの技術を有している

のか。
　これまでの調査で文明レベルは低いと思っていたが、考えを修正した方が良さそうだ。
　――と、その時だった。
「隊長、壁が崩れて怪我人が出た！　治療を頼む！」
　どうやら事故が起こったらしく、親方が声を張り上げた。
「『セイクリッド・ハイネスヒール』――！」
　と、そちらを見れば隊長が何かを唱え、負傷者が一瞬で回復する。
　そのあり得ない現象に驚き固まっていると。
「まったく！　安全確認しなきゃダメって言われてるでしょう、まったく！」
「補修隊長、すまねえ、助かったよ！　後でクリムゾンビアーを奢るから！」

回復した作業員がそんな事を……。
いやいや、あれだけの奇跡を見て、酒を奢るだけで済むものなのか!?
だが、上機嫌の隊長の様子を見るにそれで十分な代価なのだろう。
補修隊長は安酒一杯で、人まで補修してしまうらしい。
この星の医療はどうなっているんだ――

「――十月二十四日、午後十時。これより悪行ポイントの補充を行う」
現地での生活三週間目。
先日の瞬間治療は魔法だと判明した。
なんともファンタジーな話だが、目の前で見せられては否定できようはずもない。
今日は魔法の事は一旦忘れ、不足してきた悪行ポイントを稼ごうと思

う。
まずは小さな悪行で様子を見て、それで騒ぎになるようなら力でどうにかするとしよう。
俺はそう判断し、街のゴミ箱をひっくり返したりしながらポイントを稼いでいると——
「おい、何をやっている！　ゴミ捨て場を荒らすのはよせ、さもなくばカラススレイヤーに大変な目に遭わされるぞ！」
女教師みたいなエロいスーツに身を包んだ、金髪碧眼の美女に注意された。
「カラス……？　よく分からんが、大変な目に遭うのはお前の方だ。なにせ、こんな時間に女一人でいるんだからな。くくく……自分の警戒心の無さを恨むんだな……！」

「なな、なんだとう⁉」
　軽く脅してやろうと思ったのに、驚くだけで怯みもしない美女。
　悪行ポイントが加算されない事からも、恐怖を感じていないのは間違いない。
「この街にまだそんな気概ある男がいたとは！　どんな大変な目に遭わせるつもりか知らないが、そういう行為をされるのは、もうアイツだけと決めたのだ！」
「くくく……。そのアイツとやらの目の前でお前をひん剥いてやったら、果たしてどんな顔をするのか……。おい、頬染めてんじゃねえぞ、何なんだお前は！」
　なぜか顔を赤く染めてモジモジしだした謎の美女。
「おお、お前が高度な寝取られプレイを提案してきたからだろうが！　以

前の私なら惑わされたが、今の私はそんな甘言に屈しはしない！」

「本当に何なんだお前は！　これが文化の違いなのか!?」

　国が異なれば考えも違うというが、この星ではこれが普通なのだろうか……。

「貴様のような高度な変態は野放しにはしておけん！　さあ、取り押さえてやるから掛かってこい！　決して私を捕まえて、アイツの前に連れて行こうなどとは思うなよ！」

「なぜだか分からないが、お前に高度な変態呼ばわりされると、理不尽な感情が湧いてくるぞ！　一般人相手に大人げないが、キサラギが舐められるわけにはいかなくてな。ちょっとだけ眠ってもらう！」

　騒がれてはまずいと、気を失わせるために腹を殴るが、美女は無言のままで立っていた。

「こ、こり　　っ！」

「こ、この……!?」

「…………………………」

手加減し過ぎたかと思い本気で腹を殴打するも、やはり平然としたままの謎の美女。

それどころか、こんな物かと言わんばかりの、何だか寂しそうな顔で見つめ……。

「帰る……」

なぜか殴った方の俺が拳の痛みに顔を顰めていると、小さく呟き帰って行った。

ポイントが増えない事からあの美女にとって俺の攻撃は、悪行ですらないのだろう。

この星に銃らしき物がないのは文明レベルが未発達なだけではないのかもしれない。

認識を改める必要がある――

「――十月三十一日、午前十時。今日は魔法について調査する」

端末に向けて呼び掛けると、早速(さっそく)行動を開始した。

正門で工事をしていて気付いたのだが、この街では冒険者(ぼうけんしゃ)という連中が狩(か)りをしている。

狩りの相手は俺が最初に出会ったカエルだ。

恐(おそ)ろしい事に、あの巨大な捕食者はこの世界において雑魚(ざこ)なのだそうな。

そして今――

「皆さん、カエルの大繁殖(だいはんしょく)です！　稼ぎ時のボーナスゲームですよー！」

街の外に大量に湧き出したカエル達が、目の前で次々と狩られていた。

その事実に頭が痛くなってくるが、今は魔法だ。

俺が調査対象を探していると、これぞまさしく魔法使いという格好の少女を発見した。
「おいめぐみん、飴(あめ)をやるからあっちで狩ってくれよ」
「ああ、出来れば遠くの方で頼むよ」
めぐみんと呼ばれたその調査対象の少女は、冒険者達にシッシと追い払われていた。
あだ名らしき名で呼ばれるぐらいだ、嫌(きら)われているわけではないと思う。
となるとあの雑な扱(あつか)いは、年齢(ねんれい)的に見ても、まだ未熟な魔法使いだからなのだろう。
「私を邪険(じゃけん)に扱うと、後で酷(ひど)いことになりますよ！」
「ああもう、分かったからさっさと撃(う)ってくれよ。保護者のカズマは何やって

んだ……」
保護者という言葉が聞こえた通り、やはり未熟な魔法使いのようだ。
俺は、どこか微笑ましいそんな様子に思わず苦笑を浮かべながら――
「『エクスプロージョン』ーッ！」
少女の放った魔法を見て固まった。
突然起こった大規模爆発にカエル達は消滅している。
「お疲れさん、それじゃあ家まで送ってくよ。本当に、カズマは何やってんだよ……」
「おい、扱いが随分とぞんざいじゃないか！」
大魔法を放った少女を、まるで荷物のように運ぶ冒険者。
いや、周囲の連中の反応を見るに、ひょっとして今のは大魔法ではないのか？

か？
現に、まるでいつもの事だと言わんばかりに、平然とカエル狩りに勤しんでいる。
やはりあの少女は未熟な魔法使いで、さっきの魔法も下級の魔法なのだ。
俺はこれ以上の調査を中止すると、先ほどの魔法を思い出し、ぶるりと身を震(ふる)わせた。

「──十一月七日、午後八時。これより」
「わざわざ遠い彼方(かなた)より、スパイ任務とはご苦労な事である」
背筋が凍(こお)った。
端末(たんまつ)に呼び掛けていた俺は、声を掛けてきた背後の男に振り向く。
これまでの行動を見られていたとして、スパイだとバレる隙(すき)は見せなかったはずだが。

「おっと、焦りと困惑の悪感情か。残念だがそれは我輩の好みではないな」
というか、この仮面をかぶった大男は、なぜこんな格好で誰にもツッコまれないんだ。
なぜ気付かれたのかは分からないが、知られたからには生かしておけない。
「悪く思うなよ……！」
辺りに人がいない事を確認し、男の胸に銃を突き付けると……！
「そのようなオモチャで我輩を傷付けられるとでも思ったか？　残念、無傷でした！」
心臓の辺りに直撃したにもかかわらず、そう言ってゲラゲラと笑う仮面男。
なんだそりゃあ……、やたらと頑丈な美女といい、この星の連中は皆こう

なのか？

俺はエリート戦闘員じゃなかったのか？

強いはずだと思い込んでいただけなのか？

自信を失い唖然としている俺を残し、仮面男は反撃する事もなく去って行った。

……なんなんだ。この星は本当になんなんだ！

「——十一月二十九日、午前六時……。これより土木工事のバイトに向かいます……」

この星に来て二ヶ月が経つ。

バイトを増やしてアジト代わりの宿屋を借り、転送装置を組み立てた。

後は転送装置が安定し、日本に帰れる日が来るのを待つだけだ。

俺はぐったりしながらバイトに向かった――

「――補修隊長。俺、昨日野菜に襲われたんですよ……」

「あら、それは大変だったわね。怪我したら言いなさいな、隊長が治してあげるから。もし死んじゃった場合には、時間が経つと蘇生出来ないから気を付けてね」

俺は昨日農場で起こった事を、例の青髪少女に愚痴っていた。

反応を見るに、昨日の出来事は俺がおかしくなったわけではなく常識らしい。

というかいろんな事に驚きすぎて思わず流してしまったが、このバイト少女は時間が経っていなければ死者の蘇生すら出来るのか……。

「隊長、小耳に挟んだんですが……。ここって駆け出し冒険者の街って本当ですか？」

「ええ　ほんとよ？　それより元気ないわね　野菜に襲われて怖かったの？
一つ良い事を教えてあげるわ。みかんを食べる際にはね、目に汁を飛ばされないように注意なさい」

……なるほど、みかんまで攻撃してくるのか、一つ賢くなったな。

　そんな事をぼんやりと考えながら、死んだ目で仕事をしていると隊長が。

「辛い事があった時にはね、至高神であるこの女神、アクアさんにすがりなさいな。同僚として困った時には助けてあげるわ。その代わり、お金に困った時には助けてちょうだい」

「至高神、女神アクア様……」

　上の空で仕事をしていた俺だったが、その単語だけはなぜか強く頭に残った。

　ここは駆け出し冒険者の街、アクセル。

魔王軍と交戦中のこの国では、強い冒険者は皆、最前線に向かうらしい。
つまり俺がこれまで見てきた連中は……。

「――十二月二十九日、午後七時。これより最後の調査を終えたのち、地球へと帰還する」

転送装置が安定し、いつでも帰還が可能となった。
俺は端末に呼び掛けると、やり残した事を果たすべく、アクセルの街へと繰り出した。
相手は誰でもいいが弱いヤツだ。
そう、この星ですっかり自信をなくし、ひたすら帰還を願っていた俺だが……。

「俺はキサラギのエリート戦闘員なんだ。このままで引き下がれるか

よ……！」
　俺が遭遇してきた相手だが、実はこの世界でトップクラスの連中だった可能性もある。
　弱い者いじめになったとしても、現地人と真剣に勝負し、勝利して帰りたい。
　我ながら酷くショックを受けたもんだと自嘲しながら、夜の街を散策していた。
「――そこのキミは冒険者か？　ちょっとだけいいかな？」
「俺？　……な、なんですか？　俺のバックには強いヤツや貴族が控えてますよ？」
　やがて俺が声を掛けたのは、ひどく弱そうな少年冒険者。
　その勘は当たっていたようで、小物臭のするセリフを吐いた少年は、俺の

姿を見るなりビクビクしながら後ずさっている。

……そうだよな、強化装甲服を着たキサラギ戦闘員への第一印象って、こんなんだよな。

この街に来てようやく得られたまともな反応に、少しだけ嬉しくなった。

「怖がらせてすまない、キミが冒険者なら、その……。カードというヤツを見たいんだ」

「冒険者カードですか？　いいけど、俺ってステータス低いですよ？　最弱職ですし」

少しだけ落ち着きを取り戻した少年は、そう言いながらカードを渡す。

……なるほど、これは酷い。

この街についてそれなりに調査をし、平均的な冒険者のステータスは聞いている。

目の前の少年は確かに最弱職であり、そして数値も低かった。

悪いが、この子で試(ため)させてもらおうか……。
「すまないが、俺と」
「あーっ！　見つけたぞコラッ、お前ら舐めた真似(まね)しやがって、俺のとこに苦情来たぞ！」
勝負を申し出ようとしたその瞬間(しゅんかん)、少年が叫(さけ)び駆け出した。
俺は少年を引き留めようと手を伸(の)ばし……、
「わあああああーっ！　今回は私は悪くないわ！　めぐみんが言い出しっぺで……！」
少年が駆け出した先を見て固まった。
「わわ、私はちょっと言ってみただけで、まさかみんなが本気でやろうとは……！」
「待てカズマ、落ち着くのだ！　実はこれには訳が……」

そこには青髪の同僚と、頑強な美女に爆裂する少女がいる。
「今さら言い訳なんて聞くか！　お前ら三人ぶっちめてやる！」
その三人が、最弱職の少年に追いかけられて……。
……つまりは、三人の娘達より最弱職で低ステータスな、あの少年の方が強いのだ。
その事に完全に自信を喪失した俺は、端末のレコーダーを起動させる。
「本部へ。この惑星の侵略は、絶対にやめるべきだと強く進言する。そして……」
無謀な挑戦をせずに済んだ幸運を、この星の神に感謝し呟いた。
「女神アクア様に感謝する。戦闘員二十二号、これより地球に帰還します——」

あとがき

このたびは『戦闘員、派遣します！』２巻を手に取っていただきありがとうございます。

作家になって早四年。

最近では、とうとうホテルでの缶詰というヤツを体験し初めてプロ作家っぽい事したなあと、締め切りを大幅に遅れた事を反省もせず感慨に耽っている作者です。

すみません、いろんな方に本当にご迷惑をおかけしました、ごめんなさい！

ここのところ、なんだかいつも謝っている気がします。

さて、ヒロイン達がほとんどヒロインしていない今巻ですが、きっと巻が進むにつれて少しずつヒロイン力を発揮してくれると思います。
なので、ゲスかったり色目を使っていたり猟奇的だったりするヒロイン達を、見捨てないでやってもらえると幸いです。

今巻ですが表紙の通りのアリス巻です。
このアンドロイドは六号の補佐をするのが作られた理由であり存在意義であるため、今後も隙の多い主人公を叱りながらも、なんだかんだで甘やかす事でしょう。

今巻ではちょこちょこと、別シリーズである『この素晴らしい世界に祝福を！』のパロディ要素が含まれております。
まだこのすばを未読の方はそちらも読んでいただけると、巻末のコラボ小説と併せてより楽しめるかと思います。（ダイレクトマーケティング）

この巻末小説は、以前戦闘員1巻とこのすばの連動特典として書いた短編の、別サイド作品となっております。

個人的に別シリーズのクロスオーバー作品などが結構好きなのですが、苦労性の彼の活躍(かつやく)がまた見られるかどうかはスニーカー編集部さんに聞いてください。

そして現在、月刊コミックアライブさんにて鬼麻正明(きあさまさあき)先生による戦闘員のコミカライズが連載(れんさい)中です。

そちらの方も、興味があればぜひぜひぜひ！

というわけで、こうして2巻を出す事が出来たのも、イラストレーターのカカオ・ランタン先生をはじめ、担当のIさんや編集部の皆さん、そして関係者の方々のおかげです、本当にありがとうございます。

そしてもちろん、この本を手に取ってくれた全ての読者の皆様に、深く感謝を！

暁　なつめ

2巻発売
おめでとう
ございます!!
今回は虎男さんという
中々濃いキャラが出て
きましたね…!
出番は多いけど
挿絵少なかった私のラッセルです…

カバー・口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン
カバー・口絵・本文デザイン／岩井美沙（バナナグローブスタジオ）

戦闘員(せんとういん)、派遣(はけん)します!2

暁(あかつき) なつめ

2018年5月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『戦闘員、派遣します!2』
2018年5月1日　初版発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

KADOKAWA　カスタマーサポート
［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）